ISSN 0916－2631

愛知学院大学論叢

愛知学院大学

教養部紀要

第58巻　第2号

論　文

清　水　義　和：寺山修司とオノ・ヨーコ――草月アートセンターに於ける前衛芸術創造――…（ 1 ）

吉 井 浩 司 郎：*The Woodlanders* の時代設定について……（ 25 ）

Gert Michael BURESCH：A Masterful Plot:
An analysis of Barbara Vine's novel "The Brimstone Wedding" ……（ 37 ）

川　口　高　風：法持寺歴住法系譜と戦前の伽藍配置図……（152）

資　料

木　村　文　輝：静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代(6)……（ 53 ）

吉　田　道　興：道元禅師伝記史料集成（十－下）……（124）

授業報告

岡　田　朋　子：教養部における数学教授方法についての考察……（ 89 ）

2010

愛知学院大学教養部

寺山修司とオノ・ヨーコ

――草月アートセンターに於ける前衛芸術創造――

清　水　義　和

01. まえおき

俳人で名古屋ボストン美術館長の馬場駿吉氏は、2009年11月 8 日に開催された「演劇大学 in 愛知　寺山修司」の講演で、「寺山修司の短歌・俳句を専ら国文学からだけの視点で論じていては、寺山の俳句や短歌に対する新機軸は生まれないのではないでしょうか」と語った。馬場氏は、「ゴーギャンの絵画が前衛芸術のルーツにあり、ピカソの絵画はゴーギャンの絵から生まれた」と述べ、ゴーギャンの絵画とピカソの『アビニヨンの娘たち』との類似性を指摘した。そして、「寺山の映画『田園に死す』の中のシーンで、田圃に置かれた散髪台や居間や花嫁の行列は、他の世界からのコラージュであり、ゴーギャンが、自分の絵に、他の絵画からコラージュした手法と同じであって、ゴーギャンのコラージュの手法は、ピカソ、マックス・エルンストにも継承されている。従って、寺山の短歌・俳句も、前衛芸術家が使っているコラージュの手法で読み解かないと、従来の国文学の解釈だけでは新機軸は開かれない」と論じた。

では、いったい、寺山は前衛芸術をどこの誰から最も強く影響を受けたのだろうか。ここではそのルーツを探ることにある。さて、1960年代、草月アートシアターで始まった前衛芸術運動の波は当時の総ての分野のアーティストに影響を与えた。なかでも、ジョン・ケージ・ショックは多くのアーティストに大きな影響を与え、しかも、それを契機にして新しい前衛芸術が生まれた。そもそも、その由来は、ジョン・ケージとニューヨークで芸術活動を共にしていたオノ・ヨーコ氏と深い関わりがある。彼女はジョン・ケージばかりでなく、彼の音楽の影響を受けたアンディ・ウォーホルの実験映画にも関心を持っていた。しかも、寺山もケージやウォーホルに関心を抱き、オノ（以下敬称略称）のように共感し、やがて彼らと芸術的な関わ

りを持つことになる。殊に、オノは直接ニューヨークで前衛芸術の洗礼を受け、ケージやウォーホルらと共に新しい芸術作品を産み出していった。寺山も同じようにケージやウォーホルの影響を受ける事になった。だが、特に、寺山の場合、鋭い直感によって、ケージやウォーホルやオノが影響を受けて創作した作品から即座にその本質を抉り取る資質があったように思われる。そこで、本稿では、寺山とオノの業績を調べる事によって、これまで未知であった寺山の俳句や短歌に影響を与えた前衛芸術に光を当てようという試みである。

02. オノ・ヨーコのアヴァンギャルドアーツ

オノ・ヨーコは1961年11月24日にニューヨークのカーネーギーリサイタルホールで個人演奏会「オノ・ヨーコの作品」を行った。その後、オノは1962年には帰国し、草月アートセンターでハプニングの『カットピース』を披露した。これは、観客がステージに一人一人上がりナイフで彼女の衣服の一部を切りとるパフォーマンスであった。このパフォーマンスは女性が他者から受ける暴力をじっと耐える姿を表している[1)]。だが、或る意味では、『カットピース』は、禅仏教とヴォードビルの両方を表しているともいう。そして、このコンセプトはジョン・ケージの前衛音楽のコンセプトからきているという。というのは、ケージは鈴木大拙の禅やユーモアや様々なジャンルを自分の前衛音楽に取り入れているからである[2)]。ケージが影響を受けたマルセル・デュシャンは、便器を『泉』として出品した。また、デュシャンはモナリザの顔に髭を描きこんだ。つまり、デュシャンのアートには時々茶目っ気のあるユーモアが付き纏っている。このようにしてオノはケージを通して禅とアートが産み出す前衛芸術を学んだのである。或いはまた、オノのパフォーマンスには巫女的な存在感があるからシャーマン風であるともいう[3)]。また彼女のパフォーマンスは、ある見方からすれば、禅修行を思わせ、しかもオカルト的でもあるともいわれる。

ところで、オノ・ヨーコは肖像画写真を個展『YES YOKO ONO』（Press Representation: Ruth Kaplan, 2001）で展示した。だが、このオノのポートレイトは鏡に映った映像を写真に写し取ったもので中身は「空」である事を表している[4)]。同時に、このコンセプトは鈴木大拙の禅哲学の「空」を想い出させてくれる。

さて、前述したようにオノはジョン・ケージから禅哲学のコンセプトを学んだが、ケージ自身も鈴木大拙の禅哲学をニューヨークで学んだ[5)]。但し、オノは禅哲学のコンセプトによってハプニングを産み出して作り上げたコンセプチュアル・アートについては、他人から影響を受けて出来た既成品ではなく彼女自身のオリジナル精神から生まれたものであるという[6)]。つまり、オノはケージから影響を受けたが、やがてそこから逃亡を図ったり精神科に入院したりし

て漸く脱却を遂げ、その結果として彼女独自のコンセプチュアル・アートを産み出したからであるという[7)]。オノの主張は、『ピグマリオン』のイライザとヒギンズの弟子と先生の関係や彫刻家カミィーユ・クローデルとロダンの師弟関係を思い出させてくれる。

ところで、寺山修司の子宮回帰は母ハツと寺山少年の関係から生まれた。ハツは戦争で夫を失い家庭や家も失った庶民であった。いっぽう、オノは、寺山と同じように、敗戦の苦労を味わったとはいえ、寺山と異なり、彼女は財閥の娘であった。だが、オノはトニー・コックスとの間に娘キョウコをもうけ、このキョウコとの関係で苦しむ。この母子関係は、オノの根源的なジェンダーに関する問題の温床となったという。しかも、元々オノは実母との確執があり、今度は母として娘との確執が生まれたという。又更に、東洋人オノにとっての女性の一生は、いわゆる東洋人が西洋人の犠牲になったというポストコロニアルの問題を産み出してもいる[8)]。けれども、少くともオノと寺山が辛うじて結びついているのはやはり子宮回帰のコンセプトにあるように思われる。

オノ・ヨーコがハプニング・パフォーマンスで表した釘打ちや『カットピース』の一種の殺傷暴力に対する怨念には、寺山の実験映画『審判』やドラマ『身毒丸』の釘打ちの背後にある怨念にも頻繁に見られる。

さて、オノ・ヨーコと寺山修司の前衛芸術を考察するときに、1960年代に芸術創造に目覚ましい活動歴を残した草月アートセンターとの関係を抜きにして考えられない。実際オノはジョン・ケージとニューヨークから草月アートセンターに訪れ革命的な前衛芸術を披露した。いっぽう、寺山は劇団天井桟敷旗揚げ公演『青森県のせむし男』を1967年（4月18日－20日）に草月会館で行った[9)]。その前の1966年には、寺山は人間座による「吸血鬼の研究」公演（4月23日－29日）に劇作家として参加していた（p. 22）。

そもそも、草月アートセンターは、草月館内で1958年に勅使河原宏をディレクターとして発足した（p. 8）。ちょうど、草月アートセンターは、戦前築地小劇場が日本の新劇運動のメッカであったように、戦後、日本における新しい前衛芸術運動のメッカであった。そして、草月アートセンターには、世界中から新しい芸術が移入され、ここから、新しい日本の前衛芸術が開花していったのである（p. 16）。かつて小山内薫が、モスクワの芸術座へ行ってスタニスラフスキーに会ったように、1960年代の日本のアーティスト達は、次々と、アメリカのニューヨークへ渡り、ジョナス・メカスやアンディ・ウォーホルやジョン・ケージに会った。寺山も、劇団天井桟敷活動最中に留守をして、ニューヨークに渡り、ラママ・シアターの支配人エレン・スティアートに会って『毛皮のマリー』公演の交渉をした。その間寺山はニューヨークの前衛芸術を具に視察した。寺山の意気込みは、小山内が築地小劇場の活動を置き去りにして渡欧した気持ちと変わりはなかった。しかも、寺山が、小山内と異なるのは、小山内が軽蔑し

た川上音二郎一座の渡欧公演のように、寺山自身が劇団を率いて欧州や北欧やアメリカ公演を果たしたことであろう。そればかりではない。小山内とライバル関係にあった島村抱月のように、寺山は劇団と一緒に、海外公演を果たしただけでなく、欧米や北欧や中東公演も実施した。その後、欧米公演は、蜷川幸雄氏や鈴木忠志氏や平田オリザ氏や流山児祥氏や天野天街氏たちが活発に行っている。ともかく、その口火を切ったのは、寺山であった。

さて、ここで草月アートセンターが1960年代に前衛芸術が果たした役割を詳しく見ることにする。草月アートセンターがジョン・ケージ達を招聘するに当たり、重要な働きをしたのは、ニューヨーク在住の日本人アーティストの一柳慧氏やオノ・ヨーコや黛敏郎らであった。彼らはジョン・ケージの他にもアンディ・ウォーホルやジョナス・メカス達と交流があった。その彼らが、草月アートセンター初期の前衛芸術活動に深く関わったのである（p. 104）。オノ・ヨーコはニューヨークに居た時から音楽家の一柳慧氏と音楽活動を共にしていた。一柳氏はジョン・ケージの現代音楽に師事し、二人はお互いに西洋と東洋の音楽に関心を持った。そして、ジョン・ケージは音楽だけでなく、禅哲学や『易経』やインド哲学や他の芸術にも幅広く関心を持ち、殊に、一柳氏の日本の音楽やオノの禅哲学からの刺激もあったと思われる。彼らが、草月アートセンターの草創期にジョン・ケージ達を招聘した役割は計り知れない偉業であった。

だが、それにもかかわらず、途中で、オノ・ヨーコは、ジョン・ケージや一柳慧氏の輝くばかりの前衛芸術に圧倒され押し潰されるのを恐れたのだろうか。遂に、オノは、日本を離れ、ニューヨークに戻り前衛芸術活動の場所を変えることになる（p. 104）[10)]。1964年8月11日、オノは「小野洋子さよなら公演」を草月アートセンターホールで行っている（p. 20）。更にオノは自分のアートを求めニューヨークからロンドンに活動の場を移し、そこで、ジョン・レノンに出会うことになった。結局、オノとレノンの結婚を契機にして、オノは、彼女独自のコンセプチュアル・アートを深く追求して世界で最も知られた日本人女性へと変貌を遂げた（p. 152）[11)]。いっぽう、一柳氏も西洋と東洋の音楽を融合させた稀有な現代音楽を確立することになった（pp. 164–5）。

さて、寺山修司はオノ・ヨーコ（小野洋子）と入れ代るようにして草月会館で活動していた。いっぽう、その後、オノは1972年にジョン・レノンと日本に帰国している。その前年、草月アートセンターは、10年以上に及ぶ貴重な役割を終えて解散した。

海外生活の長いオノは、草月アートセンターから活動の場所をニューヨークに移してそこを中心にして前衛芸術活動を続けていた。他方、寺山は、ニューヨークのフルクサスと東京の草月会館で活躍した芸術家たちから幅広くしかも深遠で計り知れない影響を受けて自らの前衛演劇を展開していった。

ところで、映像作家のかわなかのぶひろ氏によると、「寺山さんとオノさんが草月アートセンターで会い、お互いに仕事を直接一緒にしなかったのではないか」と語っている（p. 404）。だが、それにしても、オノと寺山が残した作品を通して彼らが同時代の前衛芸術から影響を受けた痕跡を確かめることはできる。その一例として、オノとジョン・レノンが作ったテレビドラマ『レイプ』と、寺山の市街劇『ノック』には共通したコンセプトを見つけることが出来る。両作品とも共通しているのは他人の生活に土足で踏み込むことである。このコンセプトは、アンディ・ウォーホルが、マリリン・モンローの自殺直後彼女のスティール写真を直に自分の作品『マリリン』に取り込み写し取ろうとしたポップアートを思い出させる[12)]。つまり、実はモンローが亡くなった後になってから、次々と彼女の真実が明らかになり、ウォーホルが『マリリン』を発表した当時表したモンロー像のイメージとかなり異なってきた。ということは、ウォーホルがシルクスクリーンの『マリリン』で表そうとしたアートはモンローの実像に迫ることではなく、むしろ寺山やオノやレノンが表したように他人の生活に土足で踏み込みありきたりの日常を抉り取ってみせようとしたポップアートであった。

ありのままの日常を切り取りその断面を大衆に表示してハッとさせる方法は、ウォーホルの『マリリン』であり、或いはまたオノの『レイプ』であり、寺山の『ノック』であったろう。そして観客としての大衆は彼らの作品を観て、ある現実を映しているが現実ではない、いわば鏡に映った虚像のように、鏡の背後には何もない被写体を見る事になったのである。このコンセプトは、もしかしたら、オノが鈴木大拙の禅哲学の「空」から影響を受け、彼女自身が自分の芸術作品として表そうとしたのかもしれない。というのは、宇宙誕生から約150億年の時間から見れば、人間の一生は一切が「空」であるかもしれないからである。

それで思い出すのは、2008年の秋の出来事であるが高知市内で寺山の市街劇『人力飛行機ソロモン』が再演された光景である。筆者はその市街劇を観ながら、寺山の詩集『空には本』を思い浮かべたのである。つまり劇は瞬間芸術であり、後に何の痕跡も残さない。つまり、寺山の市街劇『人力飛行機ソロモン』は、まるで何もない大空に本を掲げるように、一切が「空」であるドラマを劇化しているように思われたのである。寺山が鈴木大拙の禅にどれほど興味を持っていたかどうか分からない。だが、ともかく寺山はオノやウォーホルの前衛芸術から影響を受けて自分自身の市街劇にそのコンセプトを表したのかもしれないのだ。

本稿では、寺山が草月アートセンターの前衛芸術活動を通して得ることになったアンディ・ウォーホルやジョン・ケージの芸術と、オノがニューヨークで直接前衛芸術の活動を通して得た彼女自身の芸術とを俯瞰する事によって、その結果として、オノのテレビドラマ『レイプ』や寺山の市街劇『ノック』の中に、どのような形となって影響が表れているかを跡付けたい。

03. 草月アートセンターに於けるオノ・ヨーコ

オノ・ヨーコは、1952年学習院大学の哲学科でハイデッカーやサルトルの実存哲学を学んだ。それから、オノは、ニューヨークに渡り1952年の後半にサラ・ローレンス大学で詩や音楽を学びながら一柳慧氏と出会った。オノは学習院の頃から禅に興味を持ちサラ・ローレンス大学で鈴木大拙の講演で禅哲学を聞いた。恐らく、もっと重要だったのは、オノが鈴木大拙から学んだ禅を更にジョン・ケージやアンディ・ウォーホルやジョナス・メカスらの前衛芸術家達と一緒に学んだことであろう。こうしてオノは最初、1962年東京で、禅から感化を受けたと思われるパフォーマンス『カットピース』を通してハプニングを上演した。けれども彼女は一部の人以外殆どの聴衆から理解されなかったようだ。やがて再び、彼女は1964年ニューヨークで、『カットピース』を異文化の町ニューヨークで再びハプニングとして表して披露して見せた。けれどもオノは彼女のイベントで静的で動きの殆どない独特のハプニングを上演し続けたが反響は殆どなかった。しかしながら、オノは一柳慧氏との出会いと結婚を通してジョン・ケージと知り合い、更にアンディ・ウォーホルやジョナス・メカスとも出会って日本だけでなくニューヨークでも国際的に芸術的な交流を根気強く続けていった。殊にオノの実験映画「ナンバー４」がアダム・シトニーの雑誌『フィルム・カルチャー・リーダー』（1970）をはじめとして、更にジョナス・メカスが編集する *Film Culture: Expanded Arts—Special* (Number 43, Winter 1966)[13], や *Experimental Cinema, The Film Reader*（2002）[14]などに紹介されたのは後に続く飯村隆彦氏を始めとして多くの日本の映画人に影響を与えたことは重要である[15]。

さて、オノがハプニングによってパフォーマンスを海外公演で行ったことと、寺山がしばしばハプニングによるパフォーマンスを海外で公演したことには共に重要な意味がある。少なくとも、オノは英語で話して公演をした。だが寺山はオノほど英語を流暢に駆使したわけではなかったが、寺山とオノは共に言語を超えたトランス・パフォーマンスへと傾斜したことに注目すべき点がある。殊に、オノがミニマル・アートに関心を持ち日本人独特の簡素な俳句や歌舞伎から独自のアートを切り拓いたことは注目すべきだ。ともかく、寺山も短歌や俳句を詠む歌人であったので二人には類似点が見られるのである。

ところで、これまで寺山と唐十郎氏とのアングラ演劇が比較される事はあっても、寺山とオノの前衛芸術が比較されることは殆どなかった。しかも、寺山とオノが共に前衛的なハプニングやパフォーマンスなどに拘った事は当時の時代風潮であったことを考慮するにしても、寺山とオノが国際的な映画・演劇活動の場で、言葉以外で演劇や映画を伝えることの重要性を実践の場で認識していたことは殊の外重要でるあるように思われる。というのは、オノの海外公演を辿ることは寺山の海外公演を調べるときに時として貴重な羅針盤のような働きをしているよ

うに思われるからでる。

また、オノや寺山を取り巻く1960年代の活動を俯瞰して見ていると、当時の映画や演劇の代表作と共通した潮流の中に、オノや寺山と関連のあるアートを掬い取って読み取ることが出来る。たとえば、勅使河原宏監督の映画『利休』(1989) を観ると、モダンな映画芸術作品の中に、鈴木大拙の禅哲学の精神を垣間見る事が出来る。つまり利休の茶道は簡素な日本の美を表しており、芸術愛好家が茶室に入ると、その瞬間、ケージの音楽作品『4分33秒』(1952) やウォーホルの『マリリン』を思わせるように一切が「空」なる世界に踏み込むことになる場合と似ている。「わび」や「さび」の世界では、俗世界の脂ぎった欲望が空しく映る。「わび」や「さび」は、ちょうど、ケージの音楽やウォーホルの『マリリン』のように極薄で希薄になった世界だけになってしまうように思われる。つまり、オノの『レイプ』や寺山の『ノック』でさえ、たとえ個人の日常生活に土足で入り込んでも、ウォーホルの『マリリン』のように欲望は総て脱色されて、「わび」や「さび」の世界のように何もない空間が横たわっているように思われるのである。たとえば、寺山の『レミング』では隣の部屋は空き部屋となっていたり、或いは『青ひげ公の城』では舞台に青ひげ公が不在となっていたりする「無」の状況は、ある意味でオノやウォーホルやケージのコンセプトでみると、辛うじて繋がっているようにも思えてくる。また、寺山は、バルトークが持つ孤独癖のように、孤独を求め続けていた。寺山の孤独が「寂しさ」や「侘しさ」と直接ではないにしても間接的に繋がっているように思える。ともかく、オノは「俳句」や「歌舞伎」を通して自らのコンセプチュアル・アートを求めた。だから、寺山も俳句や短歌の歌人であったので、海外では彼らは特にお互いに共通した問題意識に直面していたのではないだろうか。

また、オノの静的なパフォーマンスやミニマル・アートがなかなか理解されなかったのは、映画『利休』の中で茶道の「わび」や「さび」が直接日本の美意識を表しているのとは異なり、オノのアートが東洋だけでなく西洋のアートと複雑に融合しているので禅仏教の輪郭がはっきりとせず全体が見えにくくなっていたからではないだろうか。

ところで、キャサリン・ロスは『ニューヨークでのオノ・ヨーコ回顧展』(Yoko Ono's retrospective opens in New York) Associated Press『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001.) で、オノが一匹狼の彼女自身を「アウトサイダー」と呼んでいるのを引用している。

> I always felt that my work is very closely connected my life. And in my life I always felt that I was an outsider and so that I kind of built up this energy of being an outsider.[16)]

アウトサイダーについては、コリン・ウイルソンが『アウトサイダー』の中で論じているが、バーナード・ショーをその典型として論じている。またガイルズは、アンディ・ウォーホルの伝記の中でウイルソンの『アウトサイダー』を引用しながら、ウォーホルを典型的なアウトサイダーと呼んでいる[17)]。また、ウイルソンは他に『オカルト』で呪術師（シャーマン）について論じているが、マルセル・モースの『社会学と人類学』によると「呪術師（シャーマン）は孤独である」と述べている[18)]。また、ウォラ・アメイは、『ザ・ニューヨーク・タイムズ・マガジン』（September 24, 2004）でオノをシャーマンと呼んでいる（p. 60）。

だがその後オノはジョン・レノンと一緒になると、自分の東洋的な前衛芸術がレノンの西洋的なアートとの融合した時一気に開花した。しかもオノはレノンの仏教について最上の理解者であった。また、そんな二人の出会いによって、レノンはポール・マッカートニーに出会った時よりも遙かに強烈で革命的な変身を遂げる事が出来たように思われたのである。更に、レノンはオノのコンセプチュアル・アートを通して、やがてアンディ・ウォーホルの「空」なるポップアートの琴線に触れる事が出来たのである。

しかし、レノンの音楽や映画にオノのコンセプチュアル・アートが分かちがたく融合している。だから、このコンセプトを明確に識別するにはやはり時間を要したことはいうまでもない。先ず、オノの禅仏教的なパフォーマンスや彼女独特のミニマル・アートが、メカスやウォーホルやケージの感性を刺激し、やがて相互に影響しあってお互いの間で浸透していった。次いで、レノン自身にしてもフラクサスに加わることによってオノだけでなくメカスやウォーホルやケージのアートにまで関心が広がり、やがてお互いに興味を抱いて接近するようになった。そうなると、彼らの間でポップミュージックから禅やコンセプチュアル・アートにまで前衛芸術の幅が広がった。ある意味で、彼らの関係は、かつてラファエロ前派のアーティスト達がお互いに影響し合った関係を思いださせてくれる。たとえば、ショーは『ピグマリオン』の第四幕で、ヒギンズ夫人宅の衣装・装飾・舞台装置をウイリアム・モリスの装飾デザインで飾っている。同じ様な視点でみていくと、レノンとオノが合作したアートには、ニューヨークのポップアートやニューヨークで流行した禅哲学との融合を読み取ることが出来る。ジョン・レノンは『レノン・リメンバーズ』の中のインタビューで、ウォーホルを深く敬愛していたことを明らかにしている。

John　I admire Andy Warhol’s work, … He is an original, and he’s great. He is an original great and he is in so much pain He’s got his fame, he’s got his own cinema and all of that.[19)]

或いは、オノやレノンがウォーホルのアートを敬服している例として、オノとレノンのハプ

ニング『ベッド・イン』がある。『ベッド・イン』はウォーホルの『エンパイア』のように延々と同じ場面が続くワンショットワンシーンを思わせる。また、オノやレノンによる愛の表現はレヴィ＝ストロースが『悲しき熱帯』で表した仏教の母胎回帰と繋がっている。

04. ジョン・ケージとアンディ・ウォーホルとジョナス・メカス

ジョン・ケージのインタビューをユーチューブ（YouTube）で観ると、その中で、ケージはオノから教わった菜食のレシピを披露している。オノは、友人の多くに彼女の菜食を勧めた事はよく知られている。日本人だけでなく西洋人でも、菜食が健康に良いのは事実なのであろう。劇作家のGBショーも菜食主義者であったが、ブルジョワであったにもかかわらず、若い頃貧乏生活を強いられ贅沢できなかったからやむを得ず菜食で食事をすませたという。また、ショーは自作の『聖女ジャンヌ・ダルク』の中で、ジャンヌが赤貧に甘んずる生活を余儀なくされる場面を詳細に書いている。ジャンヌの信仰「孤独」とオノの禅哲学とは根本的には異なるであろうが、それにしてもケージの音楽作品『4分33秒』のように修行僧の簡素な苦行を思い起こさせる。

さて、ウォーホルの『日記』によるとウォーホルはレノンやオノとよく会っていた。ウォーホルの実験映画『エンパイア』『スリープ』『ヘアカット』は延々と同じシーンが続く。エリック・サティの音楽『ヴェクサシオン』も同じフレーズが延々と繰り返されるが、これを1963年に初演したケージが長時間演奏するのをウォーホルは知っていて、実験映画『エンパイア』のコンセプトに使ったといわれる。普通の映画が動画であるのに、ウォーホルの画像は殆ど静止画像である。これは明らかにケージの音楽からの影響であり、ケージが鈴木大拙から得た禅哲学を音楽に応用したのを、今度はウォーホルが絵や映画に応用したと思われる。

また実験映画批評家のメカスが、ウォーホルの『エンパイア』『スリープ』を観て感化され直ぐに批評を書いた。そして、更にまた、メカスはオノが禅哲学のコンセプトを表した実験映画やパフォーマンスやコンセプチュアル・アートを認め評価し彼女の新しい芸術に理解を示した。

或いはまた、オノが、一柳慧氏やケージの現代音楽に遭遇し、更にウォーホルやメカスの実験映画に関心を少なからず抱くことによって、自分の作品だけでなくレノンや飯村隆彦氏らの作品をメカスに紹介した。更にオノ自らアーティストであるだけでなく、マネージャーやプロデューサーとしての役割を発揮した。因みにショーの妻シャーロットは財閥の出身だったが、ショーを売り出すために、マネージャーやプロデューサーの役割を発揮した。その意味で、オノ自身も自らアーティストであるばかりでなくマネージャーやプロデューサーとしての才能も

発揮した。つまり、オノは、レノンから新しい音楽を引き出したばかりでなく、レノンをアヴァンギャルド・アーティストとしてプロデュースしたのである。

05. オノ・ヨーコの実験映画

1960年代、一柳慧氏は前衛的な音楽芸術を開花させた。従って、先に述べたように、後に、オノは一柳氏と別れたことを悔やんだといわれる。だが、結局、オノは、ジョン・レノンとの出会いによって、レノンの音楽とのコラボレーションを通して彼女の芸術を開花させたことも事実である。一柳氏の重厚な音楽芸術に比べ、レノンの音楽はポップミュージックではあったが、ともかくオノはレノンと異文化同士の遭遇によって影響しあったと思われる。既に、オノは、ジョン・ケージやアンディ・ウォーホルと混じって異文化同士の遭遇体験を通じて影響し合っていた。従って、また、レノンにしても、オノを通して、更にジョン・ケージやアンディ・ウォーホルの芸術に触れることによって、新しい芸術を創造していったのである。

オノが制作した実験映画『フライ』は、極小蠅の視点を通して、女体を拡大して見つめる映像を示した。蠅が見つめる女体は、小人の国のガリバーや『アメデ』で膨張し続ける死体や『キャッツ』で猫が観た人間社会のように、等身大の女体を、全く、異なった次元に移し変えて表して見せた。或いは、カフカが『変身』に描いた虫になったザムザのように、蠅となったカメラアイは、ちょうど、『戦艦ポチョムキン』で医師が虫眼鏡で拡大して、まるで顕微鏡で肉塊の中にウジ虫を見つめるように、拡大化した女体を眺めることになる。

また、オノが制作したテレビフィルム『レイプ』は、ドイツ人娘を、カメラで追いかけ、彼女のアパートにまで侵入する。視聴者は、タイトルに欺かれて、好奇の眼差しでテレビを見続けることになる。しかし、カメラは、少女の日常生活を単に映し続けているにすぎない。

これは、見方を変えれば、ウォーホルの『マリリン』のシルクスクリーンが、マリリン・モンローのスティール写真をただ単に転写しただけにすぎず、他に何も他意がないのと似ている。

つまり、ウォーホルはシルクスクリーン『マリリン』でただの写真を表しているに過ぎず、芸術的付加価値を付け加えてもいないのと同じように、オノは『レイプ』でただドイツ娘の私生活を表そうとしただけなのだろうか。或いはそうかもしれないが、オノが、鈴木大拙の禅を学び自らも哲学の素養があったのだから、ドイツ娘の日常生活は実体があるが、実はカメラが捕らえた被写体の裏側には何も実体がない「空」の世界であることを示したかったのかもしれない。しかも、アンディ・ウォーホルと異なって、オノは西洋の私生活を東洋人の視点で捉えることによって、一切の現実を空なる禅哲学的視点で対象を捉えた。

さて、オノは、レノンが暗殺され、次いで、ウォーホルが急死した後、少なくとも、彼女自身は、ポップミュージックからもポップアートからも一歩退いて客観的に自分自身を見つめ直す機会を得る事になった。

アンディ・ウォーホルの『日記』には、レノン亡きあと、ウォーホルがオノと息子のショーンとよく会ったことが記されている。また、オノはウォーホルの葬儀の時にも、弔文を読み上げている。オノにとって、ウォーホルの『日記』だけではなく、メカスとレノンとのインタビューにもオノとの想い出が記されている。従って、レノンやウォーホルの死によって、オノにとって、一切は「空」なのではなく、むしろ、空なるものの圧倒的な力によって、あたかも、教会の鐘が鳴り止んだ後、まるで、その反動のように無音という音によって圧倒されてしまうように、実際の鐘の音よりも遙かに強力な大爆音に晒されることになったのではないだろうか。そしてオノはそのような圧倒的な無音に晒され、しかも、音なき音が彼女の心の世界に生き続けていると確信したのではないかと思われるのである。それはちょうどケージが『4分33秒』で鳴り響く無の音はいつまでも心に残ると言っているのはこのことを指すのかもしれない。それは又、まるで芭蕉の俳句「古池や蛙飛び込む水の音」のように、壮大な無音の世界が無限に広がっているように思われるのである。

06. 草月アートセンターに於ける寺山修司と天井桟敷

寺山修司が草月アートセンターの新しい前衛芸術運動と関わりそこから一体どのような新しい芸術を産み出したかは興味が尽きない。そこで、草月アートセンターの新しい前衛芸術に寄与したアーティスト達の活躍のごく一部分を辿ってきた。そしてまた、草月アートセンターで寺山もまた仕事を共にしたアーティスト達と互いに影響しあってきた事を見逃してはならない。

さて、寺山が土着性と前衛芸術の融合を目指したコンセプトには、ジョン・ケージの音楽や一柳慧氏の音楽にある東洋と西洋の融合と比較対照してみると今まで見えなかった一面が見えてくる。たとえば、ドビュッシーが『ペレアスとメリザンデ』を作曲して音楽に水の音を持ち込んだ。いっぽう、バルトークはドビュッシーの水の精に魅入られながらも、更にその不気味な自然界の森羅万象に土着的なスラブ民謡を加えて『青ひげ公の城』をオペラ化した。そして、今度は更に寺山は『青ひげ公の城』の中に様々な作品から次々とコラージュをしていって遂に自作から自分自身を完全に消去してしまった。『青ひげ公の城』の舞台に青ひげ公がいないのは、ケージの交響楽が無音で始まり無音で終わる音楽や、鈴木大拙の「空」の禅哲学思想や、ウォーホルのコピー作品に見られる空虚や、オノ・ヨーコの静謐なコンセプチュアル・

アートと深く結び付いていることを思い起こさせてくれる。

さて、鈴木大拙が『禅と日本文化』で展開する俳句論に現れた「わび」や「さび」の世界がある。これと、寺山の俳句・短歌の子宮の世界と比べてみると双方の歌には自我の消去に類似点が見られるかもしれない。鈴木が俳句論で描いた芭蕉批評は禅の空の世界を描いているように思われる。

古池や蛙飛び込む池の音（松尾芭蕉）

明らかに、芭蕉は蛙が池に飛び込む水音を強調することによって、むしろ池の周りに広がる静寂の方が底なしの無限世界を爆発させて鳴り響かせているように思われる。さて、蛙が池に飛びこむ音はロジエ・カイヨワが『石』で描き、澁澤龍彦が『妖精物語』で書いている「魚石」を思い出させる。『石』では、何億年も石の中に閉じ込められた処女水が奏でる水音がするが、その太古の水音は子宮の羊水の音を連想させるのである。

マッチ擦るつかのま海に霧深し身捨つるほどの祖国ありや（寺山修司）

なるほど、映画監督の篠田正浩氏が言うように、確かにこの寺山の短歌には60年代の政治運動の熱い思いを読み取ることはできるかもしれない。しかし、寺山は法治国家ではなくむしろ市街劇『人力飛行機ソロモン』で1メートル四方の国家を想定しアルカディア（黄金時代）を渇望した。このことからすれば、寺山は法治国家には全く無関心であり専ら子宮回帰に拘り続けたことになる。或いは、一柳慧氏が、音の変遷について例を引きながら、古代は自然界の奏でる音があり、やがて人間が発する騒音が代わり、そして現代は車の爆音に変わってしまったと述べている。もし仮に芭蕉の「古池」をアルカディア（黄金時代）と読み変え、更にアルカディアを故郷の子宮と読み変えていくと、寺山が歌に読んだ「祖国」も人間が生まれ出た遙か彼方の故郷である子宮に見えてきてしまい、そうなると、芭蕉の俳句と寺山の短歌の世界観は俄然近くなる。

ところで、芭蕉は俳諧師として生涯歌を読み続けた。だが、寺山は俳句・短歌を途中でやめてしまう。しかし芭蕉よりも古い時代に、シェイクスピアが『ソネット』の詩人であることよりも『ハムレット』の劇作家に変貌した。そのように、寺山は自ら活字牢獄の呪縛から解放して自由をえてから、詩歌をオペラのように音読し絵画のように詩歌を風景化するドラマの方が大切であると感じたに違いない。だから結局寺山はシェイクスピアのように詩人であることよりも劇詩人であることを切望したのかもしれない。実際寺山はグーテンベルグの印刷の発明によって、まるで詩人が口に猿轡をはめられ、発話しようとして言葉が口から出なくなってしまった状況に異議申し立てをした。けれども、寺山は、マクルーハンの『グーテンベルグの銀河系宇宙』に倣っただけではなくて、草月アートセンターで、詩が活字だけではなく、音楽であり、絵画であり、演劇であり、そして映画であることを、ジョン・ケージらのパフォーマン

スから知り、それと同時に現れたオノ・ヨーコや一柳慧氏、谷川俊太郎氏、武満徹、松本俊夫氏、横尾忠則氏らの前衛芸術の洗礼を浴びたのである。

欧州でも、19世紀にウイリアム・モリスが、グーテンベルグの印刷に反対して、木彫りの文字を復活して芸術の生活化を行った。そのようにウォーホルはアートを大衆化し『マリリン』を大量生産した。或いはまたモリスの影響を受けたショーは『聖女ジャンヌ・ダーク』の中で貴人に語らせている。「昨今、人々は、書物の文字を読むだけで、本を眺める事を忘れてしまっている。」[20]と。

無論、モリスやショーは、マクルーハンの説くインターネットの世界を知らなかった。寺山にしても、21世紀の若者が携帯短歌俳句や携帯小説に興じていることになろうとは予想だにしなかったろう。だが、変わらないものがある。いわば、電子の泥海に太古から響いてくる音がある。それは、子宮が生み出す生命の産声であろう。それは、芭蕉の俳句であり寺山の俳句や短歌のリズムであろう。しかもこのリズムはオノ・ヨーコのミニマル・アートと繋がっている。というのは、オノのサウンドは女性そのものを表すリズムだからである。

また、一方で、芭蕉の「わび」や「さび」の世界は侘しくて寂しい孤独の世界である。寺山の世界にしても単なる豊饒の楽園ではない。むしろその反対である。前述したように、寺山はバルトークの『青ひげ公の城』を脚色したが、元々バルトークはドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』の水の精の音楽に惹かれ、ドビュッシーの音楽に土着的なスラブ民族の民謡を加えて『青ひげ公の城』を作曲した。だがその中心にあるのは孤独である。バルトークが生涯最も恐れたのは孤独であり孤独な死であった。しかもその恐怖の中心にあるのは何もないという孤独であった。青ひげ公の物語にあるように、七人の花嫁は次々と殺害されて何処にも居ない。そこにバルトークが探し求めた孤独と孤独な死と恐怖があった。無論、バルトークの孤独は、芭蕉の「わび」や「さび」と異なるけれども幾分似ている部分もある。それは芭蕉が旅を愛し日常生活を断念したところにあるだろう。旅に出かけ、人里を離れる事は孤独と接することを余儀なくさせられる。バルトークがヨーロッパを離れ、スラブに孤独を求めたのは芭蕉の旅人としての孤独と幾分似ているかもしれない。しかし、芭蕉が人間社会を去り自然の中に「わび」や「さび」を求めたのと、バルトークがヨーロッパではなくスラブ民族が固有に持つ孤独を求めた事とは異なるところがある。だから、芭蕉の「わび」や「さび」は、バルトークの孤独の恐怖とは当然違っている。

ところが、寺山は、前述したように青ひげ公個人の孤独を描くのは止めてしまい、その代わりに、青ひげ公の存在自体を消去してしまって、青ひげ公を空なる存在に変え、とうとう孤独それ自体を描いたのである。しかも、主人公の青ひげ公は居ないのに『青ひげ公の城』のドラマ自体は進行してゆく。おまけに、青ひげ公の六番目の妻は生きているので七番目の花嫁候補

者は結婚できない。更に、未だ七番目の花嫁候補者は結婚式をしていないのだが、八番目の花嫁候補者が既に現れて、早く七番目の花嫁候補者が死んでくれと舞台裏で急きたてる。どうしてこうなるかといえば、ドラマの設定で予め『青ひげ公の城』の粗筋がそのように決まっているからである。けれども、二番目の花嫁が青ひげ公を殺してしまったのか、或いは二番目の花嫁が青ひげ公の代役を演じ続けるので青ひげ公その人のドラマが動かず全く進行しなくなってしまったのである。或いはまた、青ひげ公の花嫁たちは結婚したら皆死ぬことになっている。ところが、台本の中では青ひげ公が花嫁を次々と殺害する筋書きであるのだが、花嫁が殺害される時までは、つまり、そのときまではとにかく花嫁たちは生きているわけである。

肝心なのは寺山が書いた青ひげ公が「空」で特異な存在であり、しかも何故特異な存在かといえば、それは青ひげ公がどこにも居ないからである。或いはまた、青ひげ公の不在によって、不思議なことには、一種のドラマの逆転が働き、青ひげ公が消えたために、不在であった花嫁たちが死ぬこともできず、かえって、花嫁たちは死なずに生きたままでいる。しかも、寺山は花嫁たちを生き返らせ現して見せただけではない。というのは、寺山はこの主人の不在のテーマを既に『奴婢訓』でも表しているからである。『奴婢訓』では召使たちが主人を殺害し召使が次々と主人の代役を演じるのである。その代理の主人が、『青ひげ公の城』では、二番目の妻なのである。また、『奴婢訓』では主人は死んでしまったので恐ろしくはないが、『青ひげ公の城』では、青ひげ公が死んでいるのか生きているのか分からないから、むしろ不気味なのである。

おまけに、寺山の『青ひげ公の城』では青ひげ公の台本は存在するのに青ひげ公役がいないので、誰かが青ひげ公の台詞を言わねばならない。寺山の『青ひげ公の城』はこうした矛盾にみちている。

さて、以上見てきたように、寺山はドラマのからくりを駆使して「無」を実体の空疎化で表している。つまり、寺山が示した孤独は孤独を感じる人がいないので、芭蕉やバルトークとも異なる孤独を表しているのである。或いは、鈴木大拙が示した禅哲学の空なる世界や、或いは空なる禅哲学を抱いたまま欲を捨て生活する事とも異なっている。もしかしたら、寺山は『青ひげ公の城』で母胎への回帰をドラマ化しただけでなくて、孤独な不安をドラマの仕組みから暴き、あたかも針の穴からしか見えないような母胎回帰を表わそうとしたからかもしれない。因みに、オノはコンセプチュアル・アートで針の穴から空を見るパフォーマンスを上演している。また、寺山は俳人であったが、オノはその「ハイク」を英語で読んだ。元々俳句は凝縮したコンセプトを簡潔に表現するのだから、英語圏では「ハイク」を英語を使って表現したり、ボディ・ランゲージで表現したりせざるをえない。けれどもその時に、彼らがその言葉をイマジネーションに転換している間に、忽ち日本語が消えてしまう。だから殊に内容がぎっしりと

詰まっている俳句を、日本語以外の表現で表そうとすると日本語から消えてしまうものがある。しかもその日本語は、俳句にあった凝縮した日本人の心であるかもしれない。俳句の日本語が言葉以外のものになった時、空になってしまった言葉を、寺山にしても、オノにしても空しく感じていたのかもしれない。

07. 草月アートセンターに於ける寺山修司の実験映画『トマトケチャップ戦争』

寺山修司が浅利慶太氏の劇団四季で処女作『血は立ったまま眠っている』の台本を書き、次いで篠田正浩監督のヌーベルバーグ映画『乾いた湖』のシナリオを書き、続いて『書を捨てよ、町へ出よう』を監督して実験映画に傾斜していったが、その理由の一つとして寺山が草月アートセンターで実験映画との出会いがあったことがあげられるだろう。けれども、オノがニューヨークでメカスやウォーホルと実験映画作りをしたように、寺山は活動の場をニューヨークに移して実験映画を制作することは出来なかった。先ず、劇団天井桟敷の活動の場所が東京にあった。そこで、寺山は、実験映画を日本で制作し海外の映画祭に出品する形をとったと思われる。

いわば、草月アートセンターは海外の実験映画との交差する地点としてあり、それはちょうど、東洋と西洋の出入り口として、ベニスやイスタンブールに相当したと思われる。飯村隆彦氏も松本俊夫氏もニューヨークから帰国すると草月アートセンターに集まった。

寺山修司が直接草月アートセンターと関わったのは、1967年（昭和42年） 1月1日演劇実験室・天井桟敷を結成に伴い、 4月18日草月アートセンターで旗揚げ公演を行った時期である。演し物は『青森県のせむし男』であった。

次いで、寺山が草月アートセンターと関わる事になったのは、『トマトケチャップ皇帝』（1970年）の上映であった。またその翌年、寺山は『ジャンケン戦争――トマトケチャップ皇帝の抜粋・再構成版』（1971年）を再編集することになった。

元々、谷川俊太郎氏が最初に寺山に詩集『われに五月を』を出版することを勧めたのであり、更にまた、寺山にラジオドラマを書くように勧め、それで寺山はドラマ『中村一郎』を書くことになった。引続いて谷川氏は、草月アートセンターで前衛的な人形劇や実験映画を発表したが、寺山もそれに参加した。

恐らく、寺山は谷川氏ら前衛芸術家を通して草月アートセンターと関わる事になったと思われる。そのきっかけとなったのが、寺山のラジオドラマ『大人狩り』であり、このラジオドラマが実験映画『トマトケチャップ戦争』や『ジャンケン戦争――トマトケチャップ皇帝の抜粋・再構成版』になった。

さて、寺山がオノ・ヨーコに触れた資料は殆どない。僅かに萩原朔美氏が書いた『想い出の中の寺山修司』に寺山がオノに関心を懐いた記述が出てくる。萩原氏は、その中で寺山とニューヨークで会った時に、オノの夫であった一柳慧氏との交友を書いている。

ジョン・ケージのコンサートが開かれるという情報を小野洋子と一緒だった一柳慧さんから聞き、大きな体育館のようなディスコへ行ったこともあった[21)]。

このディスコで、寺山と萩原氏は、オノと親しかったナム・ジュン・パイクを見かける（p. 74）。更に、萩原氏は、オノと親交のあった飯村隆彦氏の実験映画『ラブ』について、寺山が関心を懐いたことを言及している。

飯村さんから、自作を何本か部屋で観せてもらった。寺山さんは長々と感想を話していた。特に「ラブ」というモノクロのアップが続くフィルムに惹かれたようだった（p. 78）。

この『ラブ』で音楽を担当しているのはオノ・ヨーコであった。もしかしたら、仮に、寺山が、オノのミニマル・アートである音声に関心を持っていたとすれば、後年寺山も自分の映画や演劇にこの音声を使うことになることと繋がっていることになるのかもしれない。

また、寺山は、武満徹との対談「即興論＝ジャズはこびとになったようだ」「現代の演劇と音楽の可能性」で、ジョン・ケージや草月アートセンターについて触れている。

武満　……たとえばジョン・ケージが草月会館にやって来て、舞台の上で、グツグツグツグツ米を炊いたり、そしてその響きをコンタクトマイクで拡大してスピーカーから出したり、そこには、ある感動、ぼくはそれを強いて言えば、ある種の文学的感動といったものだけれど、ある感動をもつわけだ[22)]。

この草月アートセンターのステージに、ジョン・ケージと一緒にオノは居たし、武満や寺山も見ていたわけである。また、武満はケージとの対談でケージが禅や和楽器に関心を抱いた。

武満　ジョン・ケージさんは非常に禅に興味を持たれて、禅がジョン・ケージさんの音楽に非常に影響を与えているわけです。（p. 81）

ケージが禅仏教や和楽器に関心を抱いたことが切っ掛けで、武満が琵琶と笛の『ノベンバー

ステップ』を作曲することになる。殊に、武満とジョン・ケージとの繋がりは前衛と土着の融合を考えるときに重要であると思われる。

或いはまた、寺山は『ニューミュージック・マガジン』、1971.12）に掲載されたアニメ「THE BEATLESSSSSSS 大麻団地」で及川正通作・画にレノンとヨーコの台詞をつけている。その後、1987年のビデオフェスティヴァル *Wave Forms: Video From Japan* (Bay Area Video Coalition, 1987) のプログラムには、寺山と谷川俊太郎合作の『ビデオレター』とレノンの『イマジン』が同時掲載されている。しかし、これらのビデオ公開時には寺山もレノンも亡くなっていた。このイベントが計画されたプログラムには、谷川俊太郎氏とオノ・ヨーコが関わっていたものと思われる。そして、谷川氏とオノとは、1960年代草月アートセンターの企画に関わりあっていたのである。

08. まとめ

俳人の馬場駿吉氏が「『輝け60年代　草月アートセンターの全記録』を是非一読なさい」と、筆者に薦めてくださった。つまり、草月ホールの出し物はそのまま、引っ越し公演として、京都、大阪以外にも名古屋で地方公演があり、全国各地に巡回したのである。そして、草月アートセンターでの出し物にニューヨークの新しい前衛芸術の香りを嗅ぎ分け、京都や大阪や名古屋や各地方都市に新芸術の種がまかれていった。

オノが草月アートセンターで活躍した時期は1962年から1964年までであった。1962年10月にオノはジョン・ケージの演奏会に参加し、1964年 8 月に「小野洋子さよなら演奏会」を行っている。いっぽう、寺山は、1962年 2 月に人形劇団ひとみ座公演で『狂人教育』を上演している。また、1964年 6 月 7 日フェスティヴァル「律」公演で『犬神』を上演している。従って、寺山が、この期間に打ち合わせやリハーサルで草月アートセンターを訪れた時、オノと草月アートセンターで会った可能性はある。しかも、オノはジョン・ケージとのジョイントコンサートに参加したのであり、勅使河原宏の映画のニューヨーク上映の際通訳を務めたのだから、前衛芸術家の間では有名人であり、このオノと寺山が交流を持たなかったことは考えにくい。ともかく、寺山が、1967年劇団天井桟敷の旗揚げ公演のときには、オノはニューヨークに行ってしまった後であった。また、オノがレノンと1972年に日本に来た時にも、寺山がこの二人に無関心であったとは考えにくい。何れにしても、寺山はオノの最初の夫であった一柳慧氏と交流があり、寺山は自分の詩に一柳氏に作曲してもらったのだから、一柳氏からオノの情報を聞いていたことは間違いない。

これまで見てきたように、寺山とオノのアートはお互いに重なる部分がある。しかも、とに

かく二人は同時代人であり草月アートセンターに集ったアヴァンギャルド・アーティストであった。

寺山もオノも実験映画を作った。オノの方はジョナス・メカスと直接交流し、ウォーホルやレノンとドキュメンタリーを撮ったのだから本場のニューヨークのオリジナルに近い実験映画に直接関与したことは間違いない。また、いっぽう、寺山は、レノンやウォーホルのように若死にしてしまった。だから、オノの方が自分の芸術を整理し発展させるには都合が良かった。けれども、ウォーホルやレノンも若死にしたにもかかわらず、彼らを評価する研究はかなり進んでいる。寺山も、ソーゲンフレイ教授やミリアム・サッス教授やステーヴン・リジリー教授が目覚ましい寺山研究の成果を挙げている[23)]。少なくとも、ウォーホルやレノンやオノや寺山に共通している研究は何れも前衛芸術である。こうした研究の成果を経て、ウォーホルやレノンやオノや寺山が国際的な評価を得ることになるだろう。

本稿では、少なくとも、ウォーホルやレノンやオノや寺山が共通して禅やポッピズムの影響を受けて前衛芸術を築きあげてきた業績を辿ってきた。殊に、オノと寺山は海外公演を通じて東洋と西洋を融合させ前衛と土着を混淆させながら、トランス・パフォーマンスやミニマル・アートを追求し続けた。この点で二人は真のアヴァンギャルド・アーティストであるといえるであろう。

オノは映画『蠅』の音楽でミニマル・アート的な「あー、あー、あー」という微かであるが音を自ら発声している。この「あー、あー、あー」という微かに聞こえる音は、寺山のドラマ『邪宗門』でも、Ｊ・Ａ・シーザーが「あー、あー、あー」という音を駆使して寺山の子宮回帰のコンセプトを構築している。但し、オノは音楽会のコンサートや映画の音響でミニマル・アート的な「あー、あー、あー」を使っているが、いっぽう、寺山は劇場で「あー、あー、あー」という爆音を鳴り響かせながら使っている。つまり、寺山のドラマはストレート・プレイというよりはミュージカルであり音楽劇（メロドラマ）である。またオノは禅哲学の影響が強いが、レノンと一緒になって作られた『イマジン』を聞いているとレヴィ＝ストロースが『悲しき熱帯』で述べている「母胎回帰」を思い浮かべる。だからオノの作品はわれわれが鑑賞していると禅と仏教の融合を考えてしまうのである。そこのところで、オノと寺山のアヴァンギャルド・アートはお互いに最も接近していると思われる。

こうしてみてくると、オノとジョン・レノンが作ったドイツ放送の為に制作されたテレビ・ドキュメンタリー『レイプ』や寺山の市街劇『ノック』には共通したコンセプトを見つけることが出来る。それらは、ニューヨークのフラクサスやファクトリーの前衛映画の影響であり草月アートセンターでの前衛芸術の移入による影響によるものであり、しかもその影響がオノのテレビ・ドキュメンタリー『レイプ』や寺山の市街劇『ノック』に明確に現れている。その影

響を本稿では彼らの作品のコンセプトに基づいて検証してきた。両作品とも共通しているのは他人の生活に土足で踏み込むことであった。それは、虚構ではなく、リアルであるが空なる日常の生活空間であった。

本稿では、また寺山が草月アートセンターの前衛芸術活動を通して得ることになったアンディ・ウォーホルやジョン・ケージの芸術と、オノがニューヨークで直接前衛芸術の活動を通して得た彼らの芸術とを俯瞰する事によってオノのテレビ・ドキュメンタリー『レイプ』や寺山の市街劇『ノック』の中でどのような形となって影響を受け互いに結びついているかを跡付ける事が出来た。

寺山の子宮回帰はオノとレノンの「ベッド・イン（Bed In）」によくあらわれている。前述したように「ベッド・イン」は仏教の母胎回帰を表している。しかも、レヴィ＝ストロースが『悲しき熱帯』で述べている「仏教の母胎回帰」を思いださせる。

或いはまた、オノの詩は、マルグリットの前衛的な絵画を思い出させる。以下に示すオノの詩の一部は、シュールレアリスム的である。

> “Glass Keys to Open the Sky” shows a row of four glass frame. “Sky Machine” is a reconfigured vending machine that gives customers cardboard pieces of “sky”.[24)]

上記のオノの詩は、キャサリン・ロスが『ニューヨークでのオノ・ヨーコ回顧展』(Yoko Ono’s retrospective opens in New York) Associated Press『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001.) からの引用である。このオノの詩は、寺山の詩集『空には本』のコンセプトと類似している。

また、オノはアウトサイダーとしばしば批評される。しかもアンディ・ウォーホルもまたアウトサイダーとしばしば批評された。オノとウォーホルはアメリカでは異邦人に属する。むしろ出自が貧民であるということからみれば、オノよりも、オノの夫レノンの方がウォーホルのアートと深く結び付いていた。このウォーホルとレノンの結びつきによって、オノは音楽と美術の架け橋になっていた。つまり、この 3 人の繋がりは、1960年代のニューヨークの前衛芸術になくてはならないシンボルになっていた。そして、寺山は、ウォーホルを通して彼らの前衛芸術に近づいて行ったのである。

従って、寺山の前衛（草月アートセンター）と土着（青森）の混淆は、オノの前衛芸術（フラクサス）と土着（アジア人）の混淆と比べてみると、両者が似ている面が多々ある。その理由は、寺山がオノと同じように、前衛芸術家のマルセル・デュシャンやウォーホルやメカスやジョン・ケージの前衛芸術の影響を受けながら絶えずアイデンテイティー・クライシスに直面

してきたからである。そして、フラクサスと草月アートセンターが前衛芸術である前衛と土着の混淆の震源地になっていた。こうして、彼らは、ゴーギャンの絵画『われわれはどこから来たのか？　われわれは何者なのか？　われわれはどこへ行くのか？』のように、前衛と土着の狭間で己のアートを鍛えぬいていたのである[25)]。

注

1）Kimellman,Michael, *Yoko Ono: Painter, Sculpter, Musician, Muse* (*The New York Times*, October 27, 2000), p. 35. “Cut Piece” (1965), for which she sat impassively, a kind of bodhisattva, while people slowly cut off her clothes. It was an amazing feminist manifesto before most people knew what feminism was.

2）Danto, Arthur C. *Life in Fluxus* (*The Nation*, December 18, 2000,『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001), “Cage was an dept of Zen.” (p. 36) & Macunas spoke of Fluxus as “the fusion of Spike Jones, vaudeville, gag, children’s games and Duchamp.” (p. 34) Kimellman,Michael, *Yoko Ono:Painter, Sculpter, Musician, Muse* (*The New York Times*, October 27, 2000), (p. 35) When she had her first show at Maciunas’s gallery he was coming up with the idea for Fluxus, his name designating an anarchic multimedia movement that mixed Cage, happening, Buddhism, vaudeville, guerrilla theater - basically everything Ms. Ono was up to then. モンロー、アレクサンドラ、「イエス（YES）の精神：オノ・ヨーコ」の芸術と人生）」『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001), p. 23. 参照。“「ケージと私たち全員と、禅の本質とを結びつけていたのは、笑いの感覚でした」とオノは語る。”

3）Wallach, Amei, *Yoko Ono gets her own moment in a new avant-garde. The Widow Peaks* (The New York Times Magazie, September 24. 2000), p. 60. “She’s a shaman”

4）Kimellman,Michael, *Yoko Ono:Painter, Sculpter, Musician, Muse* (*The New York Times*, October 27, 2000), p. 35. “Mrs. Ono’s art is a mirror. We see ourselves in our reaction to it”

5）Wallach, Amei, *Yoko Ono gets her own moment in a new avant-garde. The Widow Peaks* (The New York Times Magazie, September 24. 2000), p. 60. “Japanese concept like Zen Buddhism were in the air through Hohn Cage … Donald Rihie an influential champion of Japanese culture, eviscerated her (Ono) for ideas” “borrowed … especially from Joh Cage”

6）Newhall, Edith, A Long and Winding Road Art news, www.artnewsonline.com October 2000), (pp. 162–163) “Like John Cage, she drew from modernism and East Asian esthetics,” Munroe explains, “So much of the thinking came to be what we know as Fluxus and Conceptual art” As an example, Munroe points to the 1962 “Instructions For Paintings” series. These works were a watershed in the history of Conceptual art, as Ono was among the very first artists to replace paint with pure language as a medium of visual art.”

7）モンロー、アレクサンドラ、「イエス（YES）の精神：オノ・ヨーコ」の芸術と人生）」『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001), p. 29.「(一柳）慧の妻であり、ジョン・ケージの友人であるということ以外の私は、一体誰だったのでしょうか？」

8）Wallach, Amei, *Yoko Ono gets her own moment in a new avant-garde. The Widow Peaks* (The New York Times Magazie, September 24. 2000), p. 61. “I think the image of Asian woman up until me was Madam Betterfly,” she (Ono). Cf. Rossa , O’MUIREATAIGH, *About Suzuki and art* “Suzuki had a “Romantic” view of art, that is, he believed

art was a gateway to a higher reality. He believed artists were similar to 'Zen men' because their withdrawal from conventional reality gave them creative powers to form their own *transcendent* reality. (See for example *Zen in Japanese Culture* by Suzuki) This "Romantic" view of art is a bit different from a "post-modern" (aka Andy Warhol et. al) view of art which sees art as not something deeper than "reality" but as something non-transcendent that fragments reality with false verisimilitude. The post-modernist is more negative and cynical about art than the romantic. However, where there may be a convergence between Suzuki's view of art and the post-modernist view of art is in the fact that Suzuki seems to have favored art as 'performance' over art as 'objects'. All the art-forms that Suzuki particularly exalted (Noh, 茶道、剣道 etc.) involve performance by actors making them art-forms that are instantaneous and artist-centered (i.e. the artist not the work of art is important). Even 書道 and 俳句 for Suzuki were superior because their supposedly innate 'minimalism' made them more performance arts than *objet-d'art*. This attitude may have found resonance with post-modern artist such as Warhol et al."

9）『輝け60年代　草月アートセンターの全記録』（フィルムアート社、2002），p. 24. 以下、同書からの引用は、頁数のみ記す。

10）井川宏三、「アートセンターの運営を任されて」『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001),（参考）"洋子さんはアートセンターで個展をやったりした後、六四年にアメリカに帰ったんですね。トニーと一緒に。いろいろ寂しかったんでしょ。ニューヨークから手紙が来て「……どうして私は慧のように良い人と別れたのでしょう」"

11）諸井誠「蝶々が出て行かなかったら、曲が終わらない」『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001), "コンセプチュアル・アートです。紙に穴をあけ、その穴から空を見るという、それで詩なんですよ"

12）Kimellman,Michael, *Yoko Ono: Painter, Sculptor, Musician, Muse* (*The New York Times*, October 27, 2000), p. 35. "Like Warhol, she (Ono) turned to films"

13）(FILM CULTURE). Mekas, Jonas, et al. FILM CULTURE: EXPANDED ARTS - SPECIAL ISSUE: NUMBER 43, WINTER 1966. New York: Film Culture Inc., 1966. arcanabooks.com/INVENTORY_interface/information.asp?booknumber=014913

14）Experimental Cinema: The Film Reader eng-wdixon.unl.edu/film reader.html

15）飯村隆彦、『YOKO ONO オノ・ヨーコ人と作品』（文化出版局、s60）参照。

16）Roth, Katherine, Yoko Ono's retrospective opens in New York (Associated Press『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001.)

17）Guiles, Fred, Lawrence, *Loner at the Ball the Life of Andy Warhol* (Black Swan, 1990), pp. 120–121. サラ・スクマーラーは「何というコンセプトだろう！」で、オノの孤独を「アウトサイダーの一人」と呼んでいる。『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001)

18）Mauss, Marcel, *Sociologie et Anthropologie* (Presses Universitaires de France, 1966), p. 30.

19）Wenner, Jann, *Lennon Remembers The Rolling Stone Interviews* (Penguin Books, 1975), pp. 167–8.

20）Shaw, Bernard, *Saint Joan, The Theatere of Bernard Shaw* (DoDD, Mead & Company, 1961), p. 731. "Now this is what I call workmanship, There is nothing on earth more equisite than a bonny book, with well-placed coluns of rich black writing in beautiful borders, and illuminated pictures cunningly in set. But nowadays, instead of looking at books, people read them."

21）萩原朔美、『思い出のなかの寺山修司』（筑摩書房、1992），p. 73. 以下、同書からの引用は、頁数のみ記

す。

22）武満徹、『ひとつの音に世界を聞く　武満徹対談集』（晶文社、1975），p. 215. 以下、同書からの引用は、頁数のみ記す。

23）Sorgenfrei, Carol Fisher, *Unspeakable Acts: The Avant-garde Theatre of Terayama Shuji And Postwar Japan*, (Hawaii U.P., 2005) Sas, Miryam, Experimental Arts in Postwar Japan: Moments of Encounter, Engagement, and Imaginative Return, (Harvard University Asia Center in Spring 2010) Ridgely, Steven C. *Japanese Counterculture: The Antiestablishment Art of Terayama Shuji* (Univ of Minnesota Pr, 2011)

24）Roth, Katherine, *Yoko Ono's retrospective opens in New York* (Associated Press『YES YOKO ONO』(Japan Society Gallery, October 18, 2000–January 14, 2001.)

25）清水義和『寺山修司の時代』（河出書房新社，2009），pp. 161–168.

参考文献

Mac Donald Scott, *A Critical Cinema 2 Interviews with Independent Filmmakers* (California U.P., 1992)

To Free the Cinema Jonas Mekas & the New York Underground Edted by David E. James (Princeton U.P., 1992)

Film Culture Reader Edited by P. Adams Sitney (Cooper Square Press, 2000)

The Ballad of John and Yoko The Editors of Rolling Stones (Micael Joseph, 1982)

Hopkins, Jerry, *Yoko Ono A Biography* (Sidgwick & Jackson, 1987)

Memories of John Lennon Edited by Yoko Ono (Harper Entertainment, 2005)

Wenner, Jann, *Lennon Remembers The Rolling Stone Interviews* (Penguin Books, 1971)

Chales, Daniel, *John Cage For the Birds* (Marion Boyars, 1995)

The Rolling Stones Edited by David Dalton (Quick Fox, 1979)

Suzuki, T., Daisetz, *Zen and Japanese Culture* (Princeton U. P., 1973)

Mekas, Jonas, *Movie Journal The Rise of a New American Cinema, 1959–1971* (Collier Books, 1972)

Wave Forms: Video From Japan (Bay Area Video Coalition, 1987)

Nam June Paik, Video Time—Video Space (Harry N. Abrams Inc., Publishers, 1993)

『YES YOKO ONO』（Press Representation: Ruth Kaplan, 2001）

『YES YOKO ONO』（朝日新聞社、2003）

『寺山修司対談集密室から市街へ』（フィルムアート社、1976）

『身体を読む寺山修司対談集』（国文社、1983）

寺山修司「THE BEATLESSSSSSS 大麻団地」（『ニューミュージック・マガジン』、1971.12）

萩原朔美『思い出のなかの寺山修司』（筑摩書房、1992）

『輝け60年代　草月アートセンターの全記録』（フィルムアート社、2002）

白石美雪『ジョン・ケージ混沌ではなくアナーキー』（武蔵野美術大学出版局、2009）

武満徹『ひとつの音に世界を聞く　武満徹対談集』（晶文社、1975）

武満徹『樹の鏡、草原の鏡』（新潮社、1975）

武満徹『音楽の余白から……』（新潮社、1980）

吉本隆明・坂本龍一『音楽機械論』（リブロポート、1986）

飯村隆彦、『YOKO ONO オノ・ヨーコ人と作品』（文化出版局、1985）

『鈴木大拙全集』第 8 巻（岩波書店、1968）
鈴木大拙、『禅思想史研究』第 2 巻（岩波書店、1987）
『易経』上高田真治、後藤基巳訳（岩波文庫、1981）
『易経』下高田真治、後藤基巳訳（岩波文庫、1982）
寺山修司「マンガ人間と歌謡曲人間と」（『音楽専科』1968.4）
ナム・ジュン・パイク『フィード・バック＆フィード・フォース』（クレオ、1993）
John Lennon 1940–1980（月刊「宝島」臨時増刊号　JICC 出版局、1981）
レノン、ジョン『ジョン・レノン詩集』岩谷宏訳（シンコー・ミュージック、1987）
『ビートルズ』（『音楽の手帖』青土社、1981）
『レノンとヨーコ』（ホリデーグラフィック 3　実業の友社、1970）
朝妻一郎、木崎義二、秋山邦晴『ビートルズその後』（主婦と生活社、1971）
『ロック・クロニクル Vol. 3 1965–1974 ビートルズの時代』（音楽出版社、1998）
寺山修司「マンガ人間と歌謡曲人間と」（『音楽専科』1968.4）
「前衛・アングラ」（平凡パンチ、1968.10.28）
『戦後文化の軌跡』（朝日新聞社、1995）

The Woodlanders の時代設定について

吉 井 浩 司 郎

The Woodlanders は、ハーディの主要小説の中で離婚問題を本格的に扱った初めての作品であって、しかも、この作品の中で言及されている離婚法が the Matrimonial Causes Act of 1857なのかそれともその法律の修正案の the Matrimonial Causes Act of 1878なのかという議論を含めて、この作品の時代設定について論争があり、まだ、決着を見ているとは言い難い。そこで、この小論において、時代設定についての論争の内容について纏め、なおかつ、筆者のこの問題に対する見解を明確にしておきたい。それは、この作品に込められたラディカルさの問題を扱う前にどうしても整理しておく必要があるからだ。

I

まず最初に、この作品の時代設定に関して the New Wessex Edition の注釈者が纏めているところを[1)]、整理することから始めたい。

この版の注釈者は、Carl J. Weber が、

> The “new statute” in Chapter 37 was a modification of English divorce law made in 1878. The reference to the “South Carolina gentleman” (Chapter 43) who had left the South after the failure of the Confederate cause (Chapter 21) helps further to date the action and enables us to discover that Hardy’s time-chart was designed to cover two and a half years from Christmas 1876 to March 1879.[2)]

として、この作品の時代設定を1876年のChristmasから1879年3月までとしていることを紹介し、更に、F. B. Pinionも以下のように、ウィーバーの主張する時代設定に同調していることを指摘する。

> The new divorce law of 1878 and Hardy's reference in 1926 to the period of the novel ('fifty years ago': *Life*, 432) leave no doubt that the story extends from 1876 to 1879.[3)]

ところが、彼等の計算には、2点の誤りがある、とこの注釈者は指摘する。

物語が扱われているのは足掛け4年であるが、前年に国会で通過した新しい離婚法についてMelburyが知らされるのは、その4年の内の第4年目でなくて第3年目であるということ。従って、Chapter 37に言及されている新しい離婚法が「1878年の法律」であるとするなら、物語の "the chronological span of the action" は、1877年から1880年ということになる。これが第一点目の誤り。第二点目の誤りは、ウィーバーとピニオンとがこの作品で言及されている離婚法を1878年の法律であるとしている点である、という。

他方、the lawyer BeaucockがChapter 37で言及しているのは、「1857年の離婚・婚姻事件法」のことである[4)]、とMichael Millgateが指摘していることをこの作品の注釈者は紹介している。

そしてもしも、作中で言及されている法律が1857年の法律だとするなら、"the chronological span of the action" は、1856年－9年ということになる。

しかし、これは、"Mrs. Charmond's South Carolinian lover left America after the failure of the Southern cause in the Civil War of 1861–5." (p. 408) と矛盾することになる。

この矛盾を説明しようとすると、次の4つの可能性がある、とこの注釈者は言う。

①ハーディはこの物語の話（action）をアメリカの南北戦争の終結後数年あたりに設定していたが、最初の離婚法の成立がこのときだと勘違いしたか、あるいは、1878年の法律と混同していたということ。

②ハーディはこの物語の話（action）を1850年代後半に設定していたが、アメリカの南北戦争がこれより先に起こったと誤解していたということ。

③ハーディがChapter 21（南北戦争）を書いているときには、時代設定として、1877年から1880年を考えていたのだが、ハーディがChapter 37（離婚法）を書いているときには、時代設定として、1850年代後半を考えていた。のちに、この矛盾を解消するのを忘れた、ということ。

④ハーディはこの物語の話（action）がいつ起こったことにするかという時代設定を確定し

て創作したのではなかった、ということ。

①の説明は、極めて可能性が低い。なぜなら、「1857年の婚姻訴訟法」というのは、英国の法制史上、慣習法史上、画期的な出来事であって、ハーディが1878年の修正された法律と混同する筈がない、という。

特に、‘twenty and twenty-one Vic., cap. eighty-five’（「ヴィクトリア女王即位二十年、二十一年の第85条」）という phrase は、ハーディがこの法律に関して詳細な知識をもっていたことを示している。

②の説明は、ミルゲイトが採用するものだが、①の説明と同様、あり得ない。というのは、South Carolinian がアメリカ合衆国を出国して 5 年[5)]が経過していることを考慮に入れると、ハーディがアメリカの南北戦争を1848–52に起こったと考えていたことになってしまう。

そうなると、③と④の説明しか残らなくなる。③あるいは④のうちどちらかに決定する必要はない。なぜなら、③は④の一徴候（a symptom）に過ぎないから。

ハーディは常に、正確な真実らしさ、歴史的正確さよりも想像力に訴える効果の方に関心があった。従って、歴史的正確さよりも “imaginative effects” を優先させた、と思われる。

以上が、the New Wessex Edition の注釈者の纏めであって、決定打を打ち出しているわけでなく、甚だ歯切れの悪い纏めと言う他はない。しかも、筆者はこの拙論の末尾に「*The Woodlanders* 出来事年表」を作成しているが、その「年表」を見る限り作品内の出来事の時間的構成を破綻なくハーディが仕上げていることが明らかであって、そのことを考慮すると、注釈者が列挙する③と④の可能性も甚だ低いと言わざるを得ない。

この注釈者に否定された F. B. ピニオンが、かなり説得的な反論を展開しているのだが、それを紹介する前に、他の研究者がこの問題に対してどのような態度を取っているかを、紹介しておこう。

Lance St. John Butler は、

> The novel opens on ‘the louring evening of a bygone winter’s day’ (Chapter 1) in 1876 or so[2,6)]

として、脚注 2 cf. the note on the time scheme at the end of the New Wessex Edition of the novel. と追加しながら、ウィーバーやピニオンに同調している。Robert Langbaum も、

> Hardy first projected this novel in the 1870s as a pastoral on the mode of *Under the Greenwood Tree*. When he returned to the story in 1885, he took a new view of the country; for while the earlier

> pastoral novels are retrospective, *The Woodlanders* takes place around 1878–9[12], so close to the time of writing as to make the pastoral landscape, the woodland of Little Hintock, anachronistic in a world of busy roads, railroads and industry.[7)]

として、12 Carl J. Weber, in his useful datings of the actions of ten Hardy novels, dates *The Woodlanders'* action 1876–9 (*Hardy of Wessex*, p. 224). I would date the action no earlier than 1878 because of the reference to the new divorce law of 1878. という注を付けて、ウィーバーに賛同している。

他方、時代設定について言及がないものの、Penny Boumelha は、

> It is the first of Hardy's novels to make use of the fictional possibility of divorce, which had become possible in fact some thirty years previously, at the time when the novel is set[16], with the Matrimonial Causes Act of 1857.[8)]

として、作中に扱われている離婚法が the Matrimonial Causes Act of 1857であるとする。なお、16 The year is clearly identified as 1858 by a reference on p. 284 to '"the new statute, twenty and twenty-one Vic., cap. eighty-five"'. という注を付け加えている。なお、William A. Davis も、

> Hardy wrote *The Woodlanders*, published three decades after the 1857 law, referred to by the novel's characters with hope as "the new law" (W 207).[9)]

と、作中に扱われている離婚法が the Matrimonial Causes Act of 1857であるとしている。

のちほど、作中で扱われている法律が the Matrimonial Causes Act of 1857であるのかそれとも the Matrimonial Causes Act of 1878であるのか、この拙論中で述べるが、実は法律の内容的には何れであっても、大差はないということだけをここで指摘しておく。

それでは節を改めて、the New Wessex Edition の注釈者に対するピニオンの反論を、具体的に見てみよう。

II

ピニオンは、*Hardy the Writer: Surveys and Assessments* の中の第六章 "The Uniqueness of *The Woodlanders*" の中で反論を展開しているのだが、the New Wessex Edition の注釈者が言うところの矛盾の根本原因は、

> It arises from Fred Beaucock's reference to the divorce act of 1857 as 'the new statute' passed, 'last year', after, in fact, the extraordinary appearance in the woods on old Midsummer Eve of an American who had left the State years earlier, in 1865, at the end of the American Civil War.[10)]

という具合に、ボーコックの言及するのが1857年の「離婚法」であり、チャーモンド夫人に付きまとう彼女の恋人 South Carolinian lover がアメリカ南北戦争後にアメリカ合衆国を出国したという言説が時代設定の矛盾を引き起こしている、と指摘する。そしてピニオンは、以下のように理解すればこの矛盾は解消すると提言する。

このアメリカ人は、「アメリカ南北戦争」の終結時に合衆国を出て、その後、祖国アメリカ合衆国には帰らずにイタリアに在住してイタリア化しているぐらいだから、作品の時代設定時点では、アメリカ南部側の主張が敗れて数年経過しているものと考えられる。そうなると、この作品の時代設定は1870年代初めということになる。

ハーディがアメリカ南北戦争の時期を誤解していたとは考えられない、とする。というのは、England にはアメリカ合衆国に親戚を持つ人々も多く、南北戦争に関する関心は高かったのであり、また、ハーディはアメリカ合衆国の事情については *The Saturday Review* を読むことで把握していたのであるからだ、という。また、この *The Saturday Review* は、戦争当時ほとんど毎週社説で南北戦争のことを扱っていた、という。

また、同時代の critics たちは、誰一人として、この作品の chronology に問題ありと言った批評家はいない。またハーディがこの作品の chronology に何らかの問題があると思っていたとすれば、1895年に作品内の地名に変更を加えた際に、chronology に変更・修正を加えていたはずだ、とする。そしてピニオンは、

> We do not need to resort to the whimsical explanation of the New Wessex Edition that Hardy presents a dream-world in which historical sequence is irrelevant.[11)]

と、the New Wessex Edition の注釈者の説明を 'whimsical' だとして一蹴し、自ら1857年の「離婚法」とアメリカ南北戦争とが作り出す時間的矛盾を、作品内容の解釈でもって、解消しようとする。というのは、この時間の矛盾に関して、1857年の「離婚法」についても、アメリカ南北戦争についても現代の我々よりも通暁していた当時の読者・批評家たちはこの 'the time-sequence of *The Woodlanders*' に何ら問題となるものを見出さなかったからである。

ボーコックがペテン師であり、メルベリーを騙そうとしているような書き方をハーディがしていることに、ピニオンは注目する。メルベリーが娘グレイスの離婚問題で相談に乗っても

らっているこの時のボーコックは酒に溺れて弁護士の事務官の職を失って何年も経過しており、居酒屋で一件半クラウンで遺言書を作成することで生計を立てるという身の上に落ちぶれていたのである。従って、ボーコックが new divorce law という時、それは the 1857 law のことではあるが、もはや new ではなくなっていると解釈できる、とピニオンはみる。

ピニオンのボーコック解釈が明解に出ている箇所を以下に引用してみよう。

> ‘An idea implanted early in life is difficult to uproot, and many elderly tradespeople still clung to the notion that Fred Beaucock knew a great deal of law’, Hardy warns us. From this it is clear that Beaucock had had little to do with the law for a long time; he knew the title at least of the 1857 act, which he repeats parrot-like….
>
> Had Beaucock known the law, he would have realized that it offered nothing to raise Melbury’s hopes, and he would have taken care not to risk consulting a London lawyer on the case. He may have read newspaper reports in the 1870s on battered wives in industrial areas, and the mounting pressures on their behalf which were to lead to the Matrimonial Causes Act of 1878.[12)]

以上、ピニオンは明確な設定年代を指摘している訳ではないが、ボーコックがペテン師であり、彼が言っている法律は the 1857 law のことではあるが、彼が a lawyer’s clerk の職を失ってから相当の年数が経過しているのであって、チャーモンド夫人の恋人が南北戦争終結後アメリカ合衆国を去って数年経過していることを根拠に、この作品の時代設定は1870年代初めから数年だと見るべきだろう、と主張する。

この作品の時代設定に関する上記のピニオンの解釈は、ピニオンが *A Hardy Companion* (p. 44) の中で述べた内容（既に引用済み）の修正版と見るべきだろう。

それでは、節を改めて筆者の見解を述べておきたい。

Ⅲ

この拙論で取り上げた研究者の大多数は、ボーコックの発言 ‘Under the new law, sir. A new court was established last year, and under the new statute, twenty and twenty-one Vic., cap. eighty-five’(「新しい法律によってですよ。新しい裁判所が去年設立されましてな、新法、というのは、ビクトリア女王即位二十年、二十一年の第85条のことですがね」[13)]）を根拠に、ボーコックの言う離婚法は the Matrimonial Causes Act of 1857のことである、としている。これには賛同してよいと思われる。ただ、ボーコックの “last year” を額面通りに受け取っていいかどうかは

問題が残る。つまり、ピニオンが説明するように、ボーコックはペテン師であり、メルベリーを鴨にして金儲けを企んでおり、そのメルベリーのボーコックに対する信用を勝ち取るためにさも法律に詳しいことをアピールするための発言として読者は理解しておくべきだろう。そうなると、ピニオンの説明が説得力を帯びてくる。

また、the Matrimonial Causes Act of 1878は the Matrimonial Causes Act of 1857の修正案に過ぎないのであって、内容的にはボーコックの意味する法律がどちらでも大差はないのである。そこで、それぞれの法律の内容を確認しておきたい。

英国法制史上画期的と言われている「1857年の離婚・婚姻事件法」の中身について、Robert Langbaum が述べているところによれば、The grounds for divorce are stipulated as “Adultery, or Cruelty, or Desertion without Cause for two years and upwards”.[14] ということで、姦通、虐待、正当な理由なくして 2 年間以上遺棄すること、いずれかがあれば離婚の理由となった。ところがよく知られているように、この法律は男女間で double standard があって、「妻は姦通を犯しただけで離婚されたのに、夫の姦通は次の 4 つのどれか 1 つと重ならないと、妻は離婚を申し立てることができなかった」[15]。すなわち、①近親相姦、②別居が許されるような虐待、③重婚、④もっともな理由なくして妻を 2 年間以上遺棄すること（妻の同意を得ずに別居すること）。因みに、イギリス19世紀までにおいて、夫の姦通は寛大に対処されて、妻の姦通は即離婚の原因となるというダブル・スタンダードには、それなりの根拠があったことに触れて置こう。つまり、父権制社会にあっては、財産とか称号とかが、父親から正当な子供に引き継がれる必要があったのであり、妻の姦通はそれを無効とする危険性があったので、妻の姦通に対しては厳しく対処されたのであった[16]。

それでは、「1878年の離婚・婚姻事件法」の中身を見てみよう。この法律は、よく知られているように、「1857年の離婚・婚姻事件法」を改正したものであって、これまた、Robert Langbaum によれば、The new 1878 law, the one passed ‘last year’ (p. 333) amends the 1857 law by emphasizing as grounds for divorce a husband’s ‘aggravated assault’ upon his wife, imperilling ‘her future safety’.[17] ということであり、Mary Lyndon Shanley によれば、“Parliament passed the Matrimonial Causes Act of 1878, which allowed a wife beaten by her husband to apply for a separation order from a local magistrate court.”[18] ということで、夫から暴力を受けている妻が地方行政長官裁判所に対して、別居命令を出してもらうよう訴えることができるようになったに過ぎないのである。つまり、また Mary Lyndon Shanley によれば、“The Matrimonial Causes Act of 1878 did not give a wife the right to leave a brutal husband, but to appeal to a court to be allowed to do so.”[19] ということで、この法律はまだ、妻が暴力的な夫から逃げる権利を認めておらず、逃げることが出来るよう裁判所に訴える権利を認めたに過ぎなかったのである。

グレイス・メルベリーの場合、夫のフィッツピアーズはチャーモンド夫人やシューク・ダムソンと姦通したのであって、その姦通＋夫フィッツピアーズの妻グレイスに対する虐待の程度が離婚に相当するかどうか、という問題になる。ということは、先ほど両法律の内容を確認したことから明らかなように、両法律とも内容的には大差がないのであって、グレイスのケースでは、どちらの法律でも同様の結論が出るものと思われる。すなわち、離婚は認められない、という結論である。従って、「ヴィクトリア女王即位二十年、二十一年の第85条」という一節から、ボーコックが意味する法律は the Matrimonial Causes Act of 1857のことだと理解して妥当だと思われる。

次に、例の the South Carolina gentleman がジャイルズに語っている次の台詞が時代設定を決定づける有効な証拠として浮かび上がってくる。

> ‘I am an Italianized American; a South Carolinian by birth,’ he said. ‘I left my native country on the failure of the Southern cause, and have never returned to it since.’ (p. 183)

この台詞から判断するに、ここでも、ピニオンの主張が妥当だと言えるのではなかろうか。

そこで、仮に1872年から1875年を時代設定として作品の出来事年表を作成してみると以下のようになるだろう。ただし、季節の変化や月日を示すシニフィアンを中心に作成していることをここで断っておかなくてはならない。

「*The Woodlanders* 出来事年表」

1872年 冬	○ Chapter 4 ・the bleared white visage of a sunless winter day (p. 54)
12月	○ Chapter 9 ・a Christmas party (p. 98)
1873年	○ Chapter 19 ・春（４月）が突然来る。Spring weather came on rather suddenly, (p. 165) ・The flowers of late April took up a position unseen, (p. 165)
６月	○ Chapter 20 ・Midsummer eve (p. 174)【Midsummer Day → ６月24日】
	○ Chapter 24

8 月	・Grace と Fitzpiers との結婚
	○ Chapter 25
	・グレイスとフィッツピアーズとは、2 ヶ月間の新婚旅行を終えて、Sherton Abbas の the Earl of Wessex というホテルまで戻ってくる。
10月	・The time was early autumn, (p. 204)
	○ Chapter 28
秋	・He looked and smelt like Autumn's very brother (p. 235)
1874年	○ Chapter 30
	・季節はやがて冬の到来となり、グレイスとフィッツピアーズとの結婚後 6 ヶ月。
2 月	・On a day in February, about six months after the marriage of Fitzpiers (p. 247)
	↓
	【フィッツピアーズとグレイスとの結婚は、8 月であったという計算になる。】
	○ Chapter 31
3 月	・As February merged in March, (p. 253)
	○ Chapter 34
4 月 初め	・It was at the beginning of April, a few days after the meeting between Grace and Mrs. Charmond in the wood, (p. 274)
	○ Chapter 37
5 月	・Thus the early days of May passed by. (p. 297)
5 月 中頃	・フィッツピアーズ国外へ
	・メルベリーは、Fred Beaucock から、「新しい法律のもとでは」離婚が結婚と同様に簡単にできる、と教えられる。(p. 298)
6 月 初め	・It was the beginning of June, (p. 301)
	○ Chapter 39
6 月	・It being a fair green afternoon in June, she seated herself in the garden, (p. 315)
	○ Chapter 40
夏の 終わり	・The window was open. On this quiet, late summer evening (p. 325)
	・夫の声を認めて、グレイスは学校時代の友達の所に行きますという置き手紙を残して、家を出る。

	・Summer was ending (p. 326)
	○ Chapter 41
	・Autumn, this year, was coming in with rains. (p. 333)
	○ Chapter 42
9月	・ジャイルズを看病するグレイス
	・Six months before this date a scene, almost similar in its mechanical parts, had been enacted at Hintock House. (p. 342)【Hintock House でフィッツピアーズがチャーモンド夫人によって看病されるのが４月初めのことであった。Chapter 36】
	○ Chapter 43
	・メルベリーは、チャーモンド夫人が the South Carolina gentleman によって射殺されたこと、その事件の前にフィッツピアーズはチャーモンド夫人と喧嘩別れしていたこと、その原因はマーティであること、をグレイスに語る。
	○ Chapter 44
	・病気から回復したグレイスがマーティと連れだって、ジャイルズの墓参り。
9月	・In the dusk of the late September day (p. 357)
	○ Chapter 45
秋・冬	・with the lapse of the autumn and winter seasons, (p. 361)
1875年 ２月14日	・On a certain day in February—the cheerful day of St Valentine—a letter reached Mrs Fitzpiers, (p. 361)
	○ Chapter 46
春	・as the spring advances (p. 371)
	・as the spring wore on (p. 373)
	○ Chapter 47
	・man-trap の一件で、グレイスとフィッツピアーズとの間で和解が成立する。すなわち、フィッツピアーズが Midlands で医者の partnership を購入し、そこへ permanent residence を求めて移り住んだのだが、グレイスに来て欲しい、と申し出て、グレイスがそれを受け入れることで、二人の和解が成立するのが５月。(p. 384)
5月	・It was an exceptionally soft, balmy evening for the time of year, which was just that transient period in the May month when beech trees have suddenly unfolded large limp young leaves of the softness of butterflies' wings. (p. 384)
	○ Chapter 48

5 月	・ジャイルズが亡くなって 8 ヶ月。(p. 392)【ジャイルズの死が前年の 9 月だから、計算は合っている。】

注

1）Thomas Hardy, *The Woodlanders* (London: Macmillan Press Ltd., 1974 [paperback]), pp. 407–409. 以下括弧内に示した頁数はこの版による。

2）Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 156.

3）F. B. Pinion, *A Hardy Companion: A guide to the works of Thomas Hardy and their background* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1968), p. 44.

4）Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (London: The Bodley Head Ltd., 1971), pp. 245–6.

5）South Carolinian がアメリカ合衆国を出国して 5 年経過しているとは作中どこにも言及がない。この注釈者はどのような根拠でもって 5 年経過したと言うのだろうか。

6）Lance St. John Butler, *Thomas Hardy* (London: Cambridge University Press, 1978), p. 80.

7）Robert Langbaum, *Thomas Hardy in Our Time* (Basingstoke and London: The Macmillan Press Ltd., 1995), p. 113.

8）Penny Boumelha, *Thomas Hardy and Women: Sexual Ideology and Narrative Form* (Sussex: The Harvester Press, 1982), p. 106.

9） William A. Davis, *Thomas Hardy and the Law: Legal Presences in Hardy's Life and Fiction* (Newark: University of Delaware Press, 2003), p. 128.

10）F. B. Pinion, *Hardy the Writer: Surveys and Assessments* (London: The Macmillan Press Ltd., 1990), p. 68.

11）*Loc. cit.*

12）*Ibid., pp. 69–70.*

13）トマス・ハーディ著、『森に住む人たち』（瀧山季乃訳、千城、昭和56年）、p. 376.

14）Robert Langbaum, *op. cit.*, p. 164.

15）度会好一著、『ヴィクトリア朝の性と結婚』（中公新書、1997年）、p. 78.

16）Laurence Stone, *Road to Divorce* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p. 7.

17）Robert Langbaum, *op. cit.*, p. 164.

18）Mary Lyndon Shanley, *Feminism, Marriage, and the Law in Victorian England, 1850–1895* (London: I. B. Tauris & Co. Ltd., 1989), p. 158.

19）Mary Lyndon Shanley, *op. cit.*, p. 174.

A Masterful Plot:

An analysis of Barbara Vine's novel "The Brimstone Wedding"

Gert Michael BURESCH

Barbara Vine is Ruth Rendell, one of Britain's most accomplished crime fiction writers. She was educated at the County High School for Girls in Loughton, Essex. After graduation, she worked as a journalist for Essex newspapers. She was fired after writing an article on the local Tennis Club's annual dinner, which she had not actually attended, thereby missing the untimely death - in mid-speech - of the after-dinner speaker.

Parallel to her perennially beloved and popular Wexford novels, she wrote psychological crime novels exploring themes such as sexual obsession, the effects of misperceived communication, the impact of social chance and coincidence and the (in)humanity of the criminals involved. In many of these books the protagonists are severely isolated and socially disadvantaged, and Rendell explores, in a convincing and often spellbinding manner, the ways in which their circumstances have an adverse impact on them as well as on their victims. She analyzes and brings to light the collision between society and the individual, particularly where circumstances drive the individual to behaviour that society regards as somehow abnormal. She excels at what Val McDermid called "the delicate filleting of the characters' psyches." [1)]

The (longer and more ambitious) novels she published under her *nom de plume* from 1986 (Barbara is Rendell's own middle name and Vine her grandmother's maiden name) inhabit the same territory as her psychological crime novels while they further develop themes of family misunderstandings and the side effects of secrets kept and crimes committed. Writing as Barbara Vine, Rendell became famous for her elegant prose and sharp insights into the human mind, as well as her ability to create cogent plots and characters. Rendell has also injected the social changes of the last 40 years into her work, bringing to public awareness such issues as domestic violence and the changes in the status of women, and rather

more pedestrian changes like computers, the advent of e-mail and the Internet, and the blessings of air-conditioning. Her experiences as a member of the House of Lords (she was created a Life Peer in 1997) are reflected in her novel *The Blood Doctor*, and changes in legislation on homosexuality caused her to write *The Chimney Sweeper's Boy*. These novels of psychological suspense also have the recurring theme of long shadows cast by events of the past.

Her novel *The Brimstone Wedding* [2)] opens with a chilling line, "The clothes of the dead won't wear long. They fret for the person who owned them." It introduces one of the *leitmotifs* of the story, the heroine's being prone to superstition. This seems to run in the family, as her mother is obviously quite superstitious herself. In practically every chapter, some superstition is introduced which has a direct bearing on an issue arising in the course of the action. There are 310 pages in 25 chapters which are grouped into 4 parts. Part I comprises chapters 1–8, part II chapters 9–11, part III chapters 12–19, and part IV chapters 20–25.

This novel, in which events of the past and the present are skillfully interwoven, employs a sometimes confusing array of time levels and viewpoints. There is first of all the omniscient author's voice, speaking in the novels's present as well as in the flashbacks. The author's voice is frequently joined by Jenny - the heroine - speaking in the first person. As to the present time of the novel, there is direct narrative from Jenny, and information from Stella related by Jenny. Stella herself does not speak in the first person. The flashbacks, except for factual information provided by the author, are told by Jenny and, in chapters 23–25, by Stella, on the tapes she recorded. The tapes which Jenny inherited and assumed to contain just recorded music represent another popular device frequently employed in crime fiction. It is, like a letter, a vehicle for a confession, or for presenting, in some other way, the solution of the crime, just like Poirot's gathering of the suspects for the final revelation, but unlike the assembly of living people, a letter or a tape can even be introduced after the death of the person who wrote or recorded it.

What, then, constitutes a good plot? How is it constructed? There are a few standard ways of putting together a *whodunit*. One is to tell the story chronologically and work towards a climax when all is revealed. Agatha Christie's novels are mostly constructed in this fashion, the Poirot series as well as Miss Marple's adventures. Poirot customarily assembles all suspects in a room and explains *coram publico* how it happened and then identifies the culprit. The opposite approach was adopted in the popular *Columbo* TV series. The plot - that is to say, the crime - happened right at the start, the viewer witnessed, how it happened and who committed it, and could then sit back and watch Columbo unravel the mystery. The element of surprise is paramount in either technique.

In printed crime fiction, more subtle elements are often employed, such as parallelism of events,

flashbacks and other manipulations of time and place which are often too elaborate to show on the silver screen, and are therefore either eliminated or simplified when a detective story is turned into a movie. The most satisfactory plot in a chronological presentation of events is - in this writer's opinion - one in which the reader is kept on tenterhooks until virtually the last page when he must realize that he has overlooked one - or multiple - hints, although they were in plain view all the time. This happens in *A Brimstone Wedding*. (The technique in the Columbo-style approach is not really all that different. The challenge for the viewer is to pinpoint where the culprit slipped up, thus enabling Columbo to find the decisive clues and to assemble the pieces of the puzzle.)

We first meet the heroine herself, Genevieve Warner (known to everyone as Jenny), a woman who volunteers to look in on the residents of Middleton Hall, an upmarket retirement home. The story moves forward from the moment Jenny becomes care assistant to Stella Newland, an elegant old lady diagnosed with lung cancer, and ends with Stella's death. During this time, the story behind the story is told in flashbacks. Stella tells Jenny certain events of her past life which weigh heavily on her mind. She usually drops some hints, and leaves Jenny to agonize over them for a while before she offers any explanations. Jenny's struggle for answers to the questions that surround Stella teaches her strange but valuable lessons about herself and about the significant people in her life - parents, sister, husband, lover - lessons, and ultimately truths which enable her to escape from a life bound by tradition and superstition.

The first of Stella's secrets is revealed in chapter 2. Stella shows Jenny an old document which turns out to be the title deed to a house. Most of what follows centers around this house, in the present as well as in a past chain of events. The clandestine possession of a house may not in itself be a particularly strange thing, but the fact that Jenny - still a comparative stranger - gets to hear about it while Stella's own children apparently know nothing about this piece of real estate and should never be told, makes it slightly ominous. Further, the house can be seen from the top floor of Middleton Hall, and when asked if she chose the retirement home because of its proximity to the house, the answer is in the negative. In fact, had Stella known about the proximity beforehand, she might have settled elsewhere, although - and here another hint is dropped - Jenny happened to be a care assistant at Middleton Hall. In other words, Jenny is the prime reason for Stella having selected this location. Stella's children don't know about the house and don't know that their mother is familiar with the neighbourhood. As it turns out, a single bizarre coincidence has brought her to the one place and the one person who will allow her to unlock the dark secrets of her heart.

Stella offers Jenny a key to the house and asks her to check on its condition. She asks her "to drive carefully" when she goes for an inspection of the house.

Stella's advice to Jenny "to drive carefully" recurs frequently and is also something of a *leitmotif*. Her fear of driving, of getting in a motor vehicle at all, is easily overlooked at this stage. We are barely 30 pages into the story, but the pivotal points have been well established by now.

Upon visiting the house, Jenny found pictures of children and animals on the walls of the dining room, and an ancient red Ford Anglia in the garage, a few years older than herself. She could easily ascertain this, as her own father had once owned exactly the same model. The car had scorch marks on the bumper. In the refrigerator, she discovered, among moldy remnants of food, a bottle of champagne. Also, in a drawer, she found a photograph of a man and a woman whom she did not recognize. Upon mentioning this to Stella later on, the old lady confirmed that the woman in the photograph was herself. (She asked Jenny to get her the photograph on her next visit to the house, and when Jenny did so, it occurred to her that she now had a place at her disposal where she could take Ned, her lover, for their secret encounters.)

When Jenny, after her first visit to the house, returns to a spot nearby where she has an assignation with Ned, she is irritated by another car that she first mistakes for Ned's, as it looks exactly like his, but is in fact driven by a woman she doesn't know. [3] The juxtapositions of facts, events, places and time frames are steadily increasing. This is a moment that cries out, as it were, for some application of lateral thought to bring together all these seemingly unconnected events. The woman will turn up once again [4] at the same spot, and much later, in a pub where she will have some eye-opening facts to relate to Jenny.

Another bit of foreshadowing is Stella's request of a tape recorder, ostensibly for recording music. Her son Richard who shows up for a visit confirms to Jenny his mother's love of chamber music und promises to bring her a tape recorder on his next visit. Although Stella is ready to confide in Jenny, she cannot bring herself to tell her the story directly, face to face. She can tell it only to the non-judgmental ear (or rather microphone) of a tape recorder.

Then comes a first substantial flashback (Jenny talking to Stella) which takes us a while back in Jenny's life with her husband Mike, a builder, and to the first meeting with Ned (a married man with an asthmatic daughter), who will become her lover. We also find out that Jenny's parents are separated. The flashback continues after the main story has been moved ahead three days. Jenny has established a firm rapport with Ned, and Stella, when told about it, observes that she understands this "only too well" which is not just a polite reply but a reference to a similar event in her own life. When asked for more details regarding the house, Stella tells Jenny that it has not been lived in for 24 years, that it was neither let nor sold, that she was in fact afraid to sell it.

The next clue is in the form of a person, the actress Gilda Brent. [5] When Stella hears that Jenny likes old films and often visits her friend Philippa who is a real movie buff, she asks her if she is familiar with

the name. These clues often appear as cliffhangers right at the end of a chapter. [6] They may not be taken up again until a good while later, and in the meantime, other hints may get dropped. This helps to keep the reader permanently on edge, and to quicken the pace of events.

Chapter 5 starts with Stella's attempts to use the tape recorder which Richard, her son, has brought her. Her purpose is to "set on record something that no one knows but me…" In the course of the first recording session, we learn the reason why she selected Middleton Hall while inspecting several residential homes:

> "[Jenny] would probably say that fate directed me to her. Yet I had never met her, never thought of her since that day, but when I heard her name.… " [7]

To be sure, Genevieve is an old-fashioned and unusual name, a name which one would be bound to remember, especially if the connotations were disturbing or upsetting. Stella's fear of driving is again brought up here, in a reminiscence to what must have been a car accident:

> "… the smell of smoke and the tiny glass cuts on my hand. I could almost see the blood on my fingers. But I looked at her, I was intrigued by her. In the beautiful face was something of a face from long ago, a tilt of the eye, a colour in the cheek, a curve of the lip." [8]

In other words, the name Genevieve evoked in Stella the memory of some accident and immediately, her mind was made up. She informed her son that the search was over and that she was going to settle in Middleton Hall.

Most readers will probably overlook the significance of this point, but it is the second most important clue of the whole novel, skipped over easily enough, to be sure.

Finally, there is mention of an obituary of an artist, a painter and illustrator of children's books. Now the inventory of people and events is complete. Chapter 5 closes with Stella wondering whether she will ever be able to tell Genevieve her secret. And if so, "is it because she is the only possible person to be the recipient of my - what? My confession." This implies that Stella is not just reporting events, but that she is entangled in them, perhaps even criminally involved. She is not making this confession for Genevieve, but because she is there, and "because of a child's face seen twenty-four years ago." [9]

Chapter 6 opens in Jenny's present time, with information about her relationship (or rather lack thereof) with her husband Mike. As a builder he is often away on weekends, and over time, they have

become quite indifferent to each other. Some years back, Jenny's grandmother had prepared a "love potion" for Jenny to administer to Mike to win him back, but she had kept it and now gave it to Ned, and it worked (this is again part of the superstition which permeates the whole novel), and she and Ned become lovers.

They had no place to go when they met, but he assured her that he would leave his wife and daughter, an idea which Jenny abhorred. She had asked both her friend Philippa and Ned about the actress Gilda Brent, and both knew her. Philippa had seen several of her movies, an Ned had actually contemplated casting her for a part in a film some 15 years earlier, only to discover that she had seemingly disappeared. Because of a proximity in age and Stella's rather nebulous remarks, in connection with the fact that her own daughter Marianne happened to be an actress, it had occurred to Jenny that Gilda might be Stella herself, and, after a dull weekend with Mike away in Norwich to watch some sports event, confronted her with this deduction the following Monday, only to be told by Stella that this was, in fact, not the case, and to which she mysteriously added: "I wish she had been." [10)]

A few days later, Jenny watched one of Gilda's old movies with her friend Philippa, and talked about it with Stella the next time they met. Having heard before from Stella that Gilda was dead, she inquired about the cause of her passing and was told that Gilda had died in a car crash. Not sure that Jenny had grasped the significance of the preposition, Stella repeated, "*in* a car crash, not *of* a car crash." [11)] Afraid of having said too much, Stella then made Jenny promise that she would not repeat this piece of information to anyone.

On the occasion of another of Richard's visits to Middleton Hall, Jenny finds out that Stella's fear of being in a car has nothing to do with her husband's death, because he was taken ill on a train and died in a hospital soon after. Richard himself thinks it is a bit of a mystery, but is not inclined to ask his mother for the precise reasons of her phobia.

When Jenny mentions to Stella the bottle of champagne that she found in the refrigerator at the cottage, she is very surprised. "Genevieve, did we really leave that in the fridge? It - it *can't* be. After so long?" Stella really gets worked up about this piece of information which to her is an important reminiscence, and she feels the need to smoke a cigarette in spite of her rapidly declining health. Jenny knows now - as does the reader - that Stella must have been to the house with someone who was not a family member. During this conversation, Stella finally reveals to Jenny that she bought *Molucca*, her cottage, for £4.000 with the money she got from the sale of her father's house which she had inherited after his death. She wanted to have something of her own, since everything else belonged to her husband, even the house they were living in at the time was entirely in his own name (although she inherited it after his death). But by then

she had been owning *Molucca* for five years. She used the cottage for her clandestine assignations with Alan, just as Jenny is meeting Ned there in the present time of the novel.

Chapter 9 (and part II of the novel) starts with a flashback on Stella's early life in London. She had two boyfriends, Alan Tyzark and David Conroy, but both relationships came to nothing, and in the end, she married her boss, Rex Newland, the head of a firm of solicitors. After being married for five years, a daughter was born, and Rex, disappointed that it wasn't a son and irritated by Stella's very slow recovery (she had spent most of her pregnancy in bed), took up relations again with a former girlfriend (although Stella called her his mistress). Jenny tries to make an educated guess at the girlfriend's identity and assumes it must be the actress Gilda Brent.

However, it was Alan who eventually got married to Gilda Brent, and Stella sets Jenny straight on this point. The girlfriend or mistress was a woman called Charmian Fry, and Stella found out about the affair from her own father-in-law who saw nothing strange in the notion that if a man cannot get from his wife what he is entitled to get, he can go and get it elsewhere.

Information about Jenny's father is sparse, and dispensed piecemeal. We know that her parents were separated when she was 8 years old. Later we find out that he still shows up at the pub sometimes, accompanied by another wife or girlfriend. In chapter 5, we are informed of his death, at the age of 55, and later still, of the fact that, after his marriage had failed, he had a series of wives and girlfriends, the final one being two years younger than Jenny. When Stella hears about his death, her sorrow seems genuine, although there is no suggestion that she could have known anything about him, let alone been acquainted with him.

The circumstances of his death yield another easily overlooked clue. He had seemed fit and healthy, and just before his death he had been working on a car that he intended to sell, and an interested customer had already had a look at it. This suggests that he is a kind of car mechanic or used car dealer. There is another clue to this effect when Jenny, disappointed by the meager turnout at the funeral, notes that his

> "… former partner in the garage business sent a wreath of yellow chrysanths and ivy in the shape of a bull-nosed Morris, but he didn't come himself." [12)]

A little later, we learn that Jenny's mother "chucked him out" and, later still, (ch. 15) when Stella asked her how old she was when her parents divorced, and who left whom, we are given the reason:

> "He's got someone else, a woman called Kath. He'd promised to give her up but one night when he

was late home again and he'd been seeing her, Mum said it was the last straw and to go and not come back." [13)]

Surprisingly, Stella then asked whether this could have been in late August or early September which Jenny tentatively confirms. Why would she ask that question? And rather than asking it at all, or perhaps at what time of year it happened, which would be strange and unexpected enough, she obviously had a fairly accurate idea of the time already. What does she know about Jenny's parents' separation? What business is it of hers? How is she involved in it? - This is another hint which this reader, at any rate, completely ignored.

In chapter 11, Stella confesses to having had a love affair with Alan that Gilda did not know about until much later. Another hint is placed when Jenny, on one of her visits to Stella's cottage, finds a dress in the upstairs wardrobe that is Stella's in every respect - except for the fact that it is soiled. No further explanation is given for its condition, and Jenny thinks that

"… it was like a dress to wear to a wedding, a bridesmaid's or even a bride's. But the bride had dug a ditch or lit a bonfire." [14)]

This flippant and even heartless thought will later attain some gruesome reality.

Within a few pages, the stage is set for the fateful course of events which bring the novel to its climax. After a fight with Gilda which Stella has the misfortune to witness, Alan turns away from her and proposes to Stella - in a strangely matter-of-fact way when driving her home - to become lovers. Stella agrees, although her husband had just turned away from his mistress Charmian after a fight and had resumed sexual relations with her. The following year, her second child Richard was born, and she could not be sure whether the father was her husband or her lover.

The parallelism of events is also apparent in chapter 12 (the first chapter of part III of the novel). Just as Stella continued her illicit affair with Alan, Jenny keeps seeing Ned on the side. Other than Alan, however, Ned has a family, a wife and a seriously asthmatic daughter to whom he is devoted.

In chapter 13, Stella confirms (not to Jenny, but only to the reader, by way of her secret tape recordings) that Alan is the father of her son Richard. It came out through a blood test which had to be done because the boy suffered from anaemia. Stella was afraid that, eventually, Richard's looks would betray his parentage, but Rex died of a heart attack before this could happen.

An uneasy friendship then developed between the three women who did not really like each other,

Charmian still in love with Stella's dead husband, and Stella in love with Gilda's living husband, and Gilda always feeling superior to both of them.

After some time - several months, according to Stella's daughter Marianne - Charmian, unable to get over her lover's death, shot herself in the barn of her farm, and the same day Stella told Alan that he, and not Rex, was Richard's father.

We also learn that the tapes which Stella has been recording so far were just practice tapes, to get used to the device. She intends to erase all of them and start over for the "real thing". She muses on the unpleasant associations that some things have for her, cars, fires, and - ploughs. What seems to be a bit incoherent is actually another important hint. Stella experiences a physical revulsion whenever she comes across the term plough, be it as a crossword clue or as a constellation in the sky. (Alan used to call her "my star" since Stella means star.) [15)]

The structure of the novel is getting more complicated at this point, as the reader is now occasionally overtaking Jenny in his knowledge of Stella' secrets, by virtue of being offered the occasional glimpse of (or rather eavesdrop on) Stella's tapes that Jenny knows nothing about yet.

While Stella and Alan are installed in their love nest, Jenny's present time marriage to Mike disintegrates more and more. They still share a home and a bed, but try to keep out of each other's way as much as they can, Mike through his work as a carpenter and Jenny through her volunteer work as a carer.

Hearing more about Stella's secret life at *Molucca*, Jenny wonders whether the red Ford Anglia that is still kept in the garage there might be Gilda's car, but Stella neither confirms nor denies this. She only says that Charmian's suicide note to Rex "was the start of it".

In a conversation with Ned, Jenny learns about Somerset House [16)] in London where public records pertaining to birth, marriage, divorce and death are kept, and asks him to find out when Gilda Brent died. This is around the time of Stella's 71st birthday. Ned has a friend perform the investigation but there are no pertinent data. Gilda seems to have vanished from the face of the earth. Jenny assumes she must have died in 1970 but Ned insists that he spoke with her agent as late as 1979. Also, as she was a successful actress in her day, there should have been an obituary in one of the national papers, but none could be found.

During another conversation at the nursery home, Stella shared with Jenny some reminiscences about Gilda's motion pictures which they used to go and watch together as soon as they came to local theatres, and Stella surprised Jenny with the admission that at one of these movie outings, Alan made the first joke about getting rid of Gilda by killing her. She added that she remembered the date of this outing more clearly than her wedding day or her children's birthdays, thus giving it some ominous quality.

Eventually, Gilda got wind of her husband Alan's illicit affair, but rather than suspecting Jenny (whom she thought too old for Alan's taste), she set her sights on exposing Priscilla, the wife of another member of the Newland family. Ironically, she confides in Jenny - the actual culprit - to discuss Alan's affair and to search for means to end it. Jenny reproaches Alan for not leaving Gilda when there was still time, to which Alan jokingly responds "you should have let me kill her." The reader cannot be sure at this point how much of that statement is playful and how much is serious.

At her next visit, Jenny confesses to Stella that she is using *Molucca* for secret meetings with Allen to which Stella surprisingly responds with an expression of gladness that the house is used by happy lovers, and that she herself and Allen were always happy there, always, except for the last time. This, to Jenny, sounds like a dark and sinister omen (which it is). The conversation then continues with Stella telling Jenny that Gilda continued to suspect one woman after another to be Alan's secret lover, and that she even stalked him on a visit to Norwich, but it all came to nothing. Asked why Alan did not leave Gilda since she was obviously going out of her mind, Stella replied that, in the end, he did leave Gilda to be with her. Jenny then leaves the room to look after some other patients, but when she passes Stella's door again on her way out of the building she thinks she can hear indistinct talking inside the room, and assumes Stella is talking to herself.

Allowed once again to eavesdrop on Stella's recordings, the reader - but not Jenny - now gets this information: In the summer following Rex Newland's death, everyone went on vacation, Gilda went to France, Stella's children were taken care of, so she and Alan decided to spend ten days at *Molucca*. The "killing Gilda" game was over, now they started playing honeymoon. But it was not to be. At this point, we only learn that during the next three days, something terrible must have happened, something which terminated their relationship. Expecting that finally they could spend a whole night in each other's arms, they found that they couldn't. They did spend two nights at *Molucca*, the longest nights of their lives, but not in the way they had dreamed about.

Stella tidied and closed up *Molucca*, leaving a bottle of champagne and some ham in the refrigerator, and a soiled dress in her bedroom wardrobe - things which eventually Jenny found. She left Gilda's car in the garage, knowing that no-one would ever trace it, but also realizing that she could never sell the cottage as long as it was there.

Back home, she felt the symptoms of an oncoming flu and decided that she would never drive a car again. When she tried to think of Alan, she found she could think only of burning fields, a green scarf and blood on the grass.

From the above passage we can deduce that Gilda must have shown up during their last stay at the

cottage. The question is how and why she left without her car - or whether she left at all. There is, after all, the earlier hint that "she only went there once, and that was on the day of her death." [17)]

Faced with the ruins of her marriage, Jenny decides to leave Mike and informs her lover Ned about it. They make an assignment to meet at *Molucca* the next day. Jenny makes all the necessary preparations and waits for him to arrive, but he does not come. When the phone finally rings, it is not Ned, but Richard, who informs her that Stella who has grown very weak wishes to see Jenny as soon as possible. This jolts her back to reality, and she tries to call Ned, but she only gets his answering machine.

Jenny's marriage ended after 13 years, and her mother called the 13th anniversary the Brimstone Wedding. This explains the title of the novel. Everyone is familiar with Silver and Golden Wedding anniversaries, but there are many other names for minor wedding anniversaries. The parallelism between Jenny's and Stella's lives continues here. Brimstone is explosive, its smell sulphuric. It carries connotations of fire and destruction which are symptoms for Stella's doomed love affair as well. - This chapter also gives an account of Stella's last few days and ends with her death.

In part IV, Jenny keeps trying to get hold of Ned, she even enlists Richard's help who, with his voice of authority as a doctor and his upper-crust accent, succeeds in finding out from various sources that Ned has gone to Switzerland on vacation and will be back in the New Year. If Jenny still had any doubt that Ned had "ditched" her, she has her proof now. Richard gives her Stella's dressing gown and the tape recorder with the tapes, as Stella had intended.

Later, when Jenny is in her mother's pub to drown her sorrows in pink gin, a lady enters the bar whom Jenny recognizes. It is Linda Owen, the blonde woman who twice passed her in a car at Thelmarsh Cross [18)], the turning where she was waiting for Ned prior to taking him to *Molucca*. Over a couple of drinks, Linda sets Jenny straight about Ned's true personality. He has been befriending other women as well, Linda included, meeting them at the very same intersection, turning their heads with promises of love and marriage, only to dump them when he got tired of them. Linda assures Jenny that Ned will never leave his wife or his sick daughter whom he truly loves.

At home, distraught and bewildered by what she has just learned, she has to face Mike and tells him she is leaving him. Unable to take it all in, he shows no reaction and Jenny packs her personal things and leaves. When she finds that Mike followed her to her mother's pub, she escapes to *Molucca*. She sees Mike again in the pub on Christmas Eve. He gives her a letter from Stella's solicitors, which has arrived in the meantime, and she is astonished to learn that she has been left Stella's house.

So Jenny takes possession of her new home and, thinking about the events which happened there during the three fateful days all those many years ago, she understands the significance of Stella's last

communication, written down by her daughter Marianne and handed to her when Stella was already unconscious, that “there is nothing in the house or the garden.” [19] It means that Gilda is dead, but not buried at or anywhere near the cottage.

Further events distract Jenny’s mind: there is an announcement on TV that Ned made a documentary about Gilda’s disappearance entitled “The Lady Vanishes”, based on the details he had gleaned from Jenny. Also, Mike asks her for a divorce. A passing remark about never having listened to the *music* on Stella’s tapes is followed up by her decision to listen to them during a walk in the fens.

Spellbound, she learns the truth. While Alan and Stella were at *Molucca*, Gilda suddenly showed up to have it out with Alan. The trip to France had been a ruse. She had followed him to the house the previous week but had still not guessed the identity of his companion. Finally she understood the truth. After lots of things were said, and lots of threats made, she eventually decided to leave, but her car would not start. Alan offered to drive her back to town and Gilda insisted that she, as his rightful wife, sit next to him in the passenger seat, with Stella in the back - a fatal mistake. Alan was speeding in order to dispatch Gilda as quickly as possible, and dispatch her he did - at some sharp turn he did not realize quickly enough that a huge combine harvester was parked half on the road and half on the grass verge. The violent impact catapulted Gilda who was riding shotgun straight through the front window into the field. A split-second before the impact, Stella, desirous for physical contact, had thrown her arms around Alan from behind, thus acting as a safety belt and protecting him from potentially fatal contact with the steering wheel or the front window.

They found Gilda a few yards into the field at the foot of a big tree. Alan suggested to let her rest until they could get help. Soon a small van approached. It was the mechanic from a nearby garage, on his way home. He immediately understood the nature of the accident and, trying to establish the facts, asked the question that turned everything around and made all the puzzle pieces of the novel click into place (except the final one): “Just you two, was it?” [20] With Gilda out of sight, it seemed the logical question to ask, but it gave Alan the decisive idea and he answered in the affirmative: “Just the two of us”.

The mechanic decided that there would be no need to involve “the fuzz” (the police) and then left to get his tow truck. Meanwhile, Alan checked on Gilda, to “move her out of the sun.” [21] When he returned to Jenny who was sitting on the grass verge, he told her that Gilda was dead.

The mechanic returned, their car was towed to the garage. In the office, Stella noticed a framed photograph of two small girls and a baby boy, presumably the mechanic’s children. After the paperwork was done, the mechanic drove them home and jumped the battery of Gilda’s car so that it could be moved. Upon leaving, the mechanic mentioned that thanks to the accident he’d get home late once again. In

Stella's words,

"His wife had told him this was his last chance. If he was late again 'he'd had his chips', she was throwing him out, so since he'd be late anyway now he was going to keep a date he'd made with a woman called Kath and get home really late. Might as well be hanged for a sheep as a lamb." 22)

These were exactly the same words that Jenny had used months earlier when describing to Stella the reasons for her parents' divorce. Now she heard Stella using them in connection with the accident. Things have come full circle - for those readers who picked up on it. Rendell is generous enough even to repeat the girlfriend's name - Kath - although there is no logical reason why the mechanic should have divulged the name of his paramour to complete strangers.

This is the last (and most outspoken) hint that points to how all the persons in the novel are connected. But the reader's attention is torn away yet again from putting two and two together, as there is still the question of what happened with Gilda.

Alan had left the Anglia's engine running and suggested to go and get Gilda, at which point Jenny nearly jumped out of her skin. She felt remorse for not telling the truth, for not asking for an ambulance and also doubted if Alan had told her the complete truth about Gilda's death. She realized that they had maneuvered themselves into a corner from which they could not escape. They had to follow through with their fabricated story and that meant that Gilda had to disappear. They picked up Gilda's body at an opportune moment when there was no traffic on the road, and took her back to *Molukka*. After resting and bathing, they went out to dinner, although Jenny could not eat anything, then returned home. They spent the following day performing routine tasks and chores, and before nightfall faced the inevitable together.

On the other side of the tape, Stella described how they found a field that had recently been burned, and part of the hedge had been uprooted to enlarge the field. Some half-burned logs were still smoldering. This was where they put Gilda's body and incinerated her. When the funeral pyre had turned to cinders and ashes, Alan assembled a makeshift petrol bomb to make sure there were no recognizable parts left behind. They battled the feeling of sickness with gin that they drank straight from the bottle. At daybreak, when their work was finally accomplished, they returned to *Molucca* and slept in separate rooms, like the night before.

In the afternoon of the next day, after going through their bathing and dressing routines, they were on the road again, driven by terror and fear of what might await them in the field, but to their immense relief, they found that it had already been ploughed over. The farmer had lost no time and taken advantage of the fine weather. Where there had been ash and destruction, they now saw rich, freshly turned, chestnut brown earth, ploughed in parallel lines.

But Gilda's presence and subsequent death at *Molucca* had ruined any hopes of a future together. The fire was between them, the ploughing over of the site, and the fifteen unexplained seconds that Alan had held the scarf over Gilda's face when she was lying in the field. Also, Alan realized that he could never be a widower now, and never get married again, since there is no legal death without a body. Although Gilda was gone, she was, and would always be, more present than ever. Stella and Alan went their separate ways; she saw him just once more and then never again.

Coming to the end of the tapes, Jenny realized that they were left to her for a purpose, and she makes it very clear - to those readers who missed all clues from start to finish - that she understood the last piece of the puzzle. The mechanic who had put the idea of disposing of Gilda into Alan's head by asking "Just the two of you, is it?" had been her father. One of the girls in the photograph on the mechanic's desk had been herself. From this moment on, her life was irrevocably linked with Stella's. Hearing her unusual Christian name mentioned at Middleton Hall ended Stella's search for a suitable nursery home to live out her remaining days. This revelation is given three paragraphs from the end of the novel, on the last page. Rendell truly kept her audience on tenterhooks right to the end.

Note:

My first intention was to compare this novel with another one called *An Unkindness of Ravens* which the author wrote under her real name Ruth Rendell, and the title was supposed to have have been "Two Masterful Plots". However, the scope of this paper became so large that I will discuss the other novel in a separate paper.

Footnotes:

1) This review originally appeared in the Manchester Evening News. My source is www.twbooks.co.uk/reviews/mcdermidonrendell.html
2) I used the Penguin paperback edition published in 1996.
3) p. 36
4) p. 117
5) This character is fictitious, but there existed a real life actress named Gloria Brent at the time. Some movie titles and actors' or actresses' names are genuine, too.
6) in this case, at the end of chapter 4
7) p. 56
8) p. 56
9) p. 59
10) p. 71
11) p. 79

12) p. 133
13) p. 194
14) p. 135
15) p. 168
16) The vast former London residence of the Dukes of Somerset today houses the Courtauld Institute and the Public Record Office.
17) p. 72
18) p. 248, with ref. to pp. 36 & 117
19) p. 267, with ref. to p. 237
20) p. 289
21) p. 290
22) p. 294

Sources

Cooper-Clark, D. (1981), *Interview with Ruth Rendell*, Armchair Detective Magazine.

Kyzlinková, L. (2003) *Ruth Rendell/Barbara Vine: Social Thriller, Ethnicity and Englishness*, Brno Studies in English 29. Brno : MU, 2003. pp. 123–130.

Munt, Sally R. (1994) *Murder by the Book?*, London: Routledge.

Rowland, S. (2001), *From Agatha Christie To Ruth Rendell: British Women Writers in Detective and Crime Fiction (Crime Files)*, London: Palgrave Macmillan.

Staudohar, P. D. (Ed.) (2008) *Murder short & sweet*, Chicago: Chicago Review Press.

Symons, J. (1974) *Bloody Murder, From the Detective Story to the Crime Novel*, Middlesex, England: Penguin.

Wroe, Martin (1998) *The Baroness in the Crime Lab*, Books and Culture, March/April Ed., London: The Observer.

Online Source

Brooks, L. (2002) *Dark lady of whodunnits: Barbara Vine*, Writer Profile Column, The Guardian Weekly, The Guardian.co.uk.

静岡県中・東部地方における
曹洞宗寺院の歴住世代⑹

木　村　文　輝

本稿は、『愛知学院大学教養部紀要』第57巻第１、２、３、４号、第58巻第１号に所収の拙稿「静岡県中・東部地方における曹洞宗寺院の歴住世代⑴、⑵、⑶、⑷、⑸」の続編である。本稿では、曹洞宗静岡県第１宗務所管内の第10、第11教区に属する寺院の調査結果を掲載する。ただし、調査票未回収の寺院については掲載を見送った。凡例に関しては、前掲の各拙稿に記載のものに従う。なお、同宗務所管内第12教区以下の寺院の結果については、次号以降に引き続き掲載する予定である。

追記、調査に御協力下さった各寺院御住職に対し、謝意を表します。また、本稿作成にあたり、調査票配布と資料整理には愛知学院大学大学院中村早栄氏の御助力を賜った。さらに、資料整理には静岡市在住村越健氏、谷田貝ちさと氏、山嵜政美氏の御協力を賜った。記して謝意を表します。

10教区	だいゆうざん	そうじょうじ	〒	426−0033
460番	大雄山	宗乗寺	住　所	藤枝市小石川町1丁目10−40
			住　職	伊藤正見
開 山 年	享徳2(1453)		草創年	
本　　尊	釈迦如来			
開　　基				
旧 名 称	前島山(13世まで)			
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大興寺(657)―長興寺(584)			
寺 史 等	『宗乗寺五百年史』(1977)			

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大用宗顕	応仁1（1467)6・17	京都宇治郷太田氏出身、奈良真言律宗法華寺で得度(7歳)、比叡山に上る(24歳)、京都東山に草庵結ぶ(37歳)、享徳2当寺開山(47歳)、世寿60歳	長興寺2世	977c
2	安室宗全	長享1（1487)6・12（文明19)	開山法嗣		
3	蒲岸全忠	永正5（1508)8・13	2世法嗣	興福寺開山、養雲寺開山	
4	行室宗順	享禄1（1528)2・27（大永8)		東泉寺(475)開山、円成寺(廃)開山	
5	一天存最	永禄10(1567)7・15	中興、4世法嗣、寺内整備	正傳院(581)開山	
6	茂客長栄	文禄3（1594)1・19	5世法嗣	傳榮寺(478)開山	
7	太補守臨	寛永1（1624)6・10	長興寺6世乗山全最法嗣	長興寺7世	977h
8	嶺山韓石	明暦2（1656)8・2	慶安1・7・17朱印拝戴	栄昌寺開山	
9	朝谷韓暾	貞享1（1684)9・6	8世法嗣、貞享2・6・11朱印拝戴	總持寺傳法庵輪住(延宝7)	1046c
10	儀峯慈湛	正徳3（1713)8・10			
11	太頷益守	寛保3（1743)1・8	小笠郡正林寺10世霊頷貞瑞法嗣、10世の遺命で当寺住職、正林寺へ転住(在住17年)	正林寺(831)11世	
12	覚州義見	享保6（1721)5・27	宝永4地震で諸堂被害、宝永6過去帳改訂(現存最古)、享保3・7・11朱印拝戴、總持寺傳法庵で示寂	總持寺傳法庵輪住(享保5)	1046d
13	凹海立玄	寛延3（1750)4・21	重興、天和3生まれ、駿府大林寺9世槐国万貞法嗣、享保7入山、享保16・4諸堂焼失、元文5山門・衆寮再建、寛保2本堂・庫裡再建、寛保3・8諸堂落慶・山号改称・寺紋制定、延享4・8・11朱印拝戴、世寿68歳	退玄峯(廃)開山	190a
14	道庇亨乾	明和8（1771)8・17	13世法嗣、宝暦9・2退玄峯開創	富洞院14世	190b
15	亨方趙玄	享和2（1802)4・19	13世法嗣、14世兄弟子、後に富洞院・大興寺を歴住	總持寺傳法庵輪住(明和1)、富洞院16世、大興寺19世	190b 1047h
16	天寿良全	明和7（1770)11・27	15世法嗣、宝暦12・8・11朱印拝戴		
17	慶峯弘叔		16世法嗣		
18	瑤山龍門	天明4（1784)2・25	宗乗寺統宗祖外法嗣、明和6綸旨拝戴		190d
19	正外義天	文政3（1820)7・19	天明8・9・11朱印拝戴、文化13・6開山像再建・開山350回忌修行	總持寺傳法庵輪住(文化8)	1047g

20	石巌太堂	天保2（1831)8 ・27	18世法嗣、円成寺より転住、天明7・3・6綸旨拝戴、白山権現堂修復	円成寺(廃)八世	190e
21	龍山太珉	嘉永5（1852)4 ・21	20世法嗣、天保9・7・24本堂・庫裡焼失、天保10・9・11朱印拝戴、天保11衆寮・禅堂焼失、嘉永4・9本堂・庫裡再建		190f
22	賢外麟瑞	文久2（1862)2 ・6	当寺衆寮で修行、榛原郡華蔵院首先住職、天保15・3・9綸旨拝戴、21世法嗣、本堂・庫裡修理	華蔵院14世	
23	宝山太鏡	明治6（1873)8 ・13	文政9生まれ、21世法嗣、明治4庫裡屋根葺替、世寿48歳		190g
24	直指太伝	明治8（1875)12・9	天保11生まれ、23世法嗣、世寿36歳 ［鈴木］		190d
25	金提龍文	明治14(1881)1 ・18	文政2生まれ、駿府顕光院首先住職、吉永村高岳寺住職、同村正泉寺兼務、明治9・2・4当寺住職、明治12松寿寺住職、明治13・9当寺退院・興福寺へ隠居、小笠郡青竜院で示寂、世寿63歳 ［岩本］	顕光院(1)23世、松寿寺(469)5世、高岳寺(531)16世、正泉寺(532)法地開山、大霊寺(533)4世	462d
26	穆山瑾英	明治43(1910)12・4	勧請、勅賜直心浄国禅師、青森県三戸郡笹本氏出身、八戸市長流寺弟子(9歳)、浅草本然寺安窓泰禅法嗣、明治10可睡斎住職、明治34大本山總持寺住職、横浜西有寺で示寂、世寿89歳 ［西有］	大本山總持寺独住3世、如来寺(166) 2世、可睡斎(1302)47世、常現寺(青森69)開基、光龍寺(同70)法地開山、法光寺(同79)30世、西有寺(神奈川2)開山、万徳寺(同9)開山、英潮院(同360)17世、鳳仙寺(群馬163)25世、鳳林寺(東京105)15世、宗参寺(同128)24世、本然寺(同197)12世、中央寺(北海道85)開基	101a 1050c
27	祖雲老龍	明治32(1899)12・12	文久2・9・10生まれ、岡部内谷黒石東平二男、俗名「広吉」、24世弟子(慶應3、6歳)、明治8・2・28興福寺首先住職(14歳)、24世法嗣(明治13、25世より代受)、明治14・2・20入山、梵鐘等新添、明治20開山堂新築、明治20頃より26世穆山師に随侍、東泉寺法地開山(世代になし)、在住19年、世寿38歳 ［黒石］	(東泉寺(475)前住)、興福寺10世、栄昌寺法地開山	190e
28	大澄義順	昭和33(1958)11・26	明治11・7・15生まれ、岳叟寺夏目泰山弟子、当寺衆寮で修行、内瀬戸延命寺居住(3年)、27世法嗣、明治32・8・29入山(21歳)、大正2米国サンフランシスコ留学、帰国後東京在住、昭和8・6・18神奈川県大慈院住職、東京牛込で示寂、世寿81歳 ［夏目］	大慈院(神奈川)	190f
29	古道哲遠	昭和36(1961)6 ・19	明治22・8・22生まれ、愛知県東春日井郡下原村伊藤喜蔵4男、俗名「磯八」、27世弟子(8歳)、28世法嗣、大正3入山、鐘楼・庫裡新築、大正10青島幼稚園設立、昭和30梵鐘再鋳・山門修復、在住47年、世寿73歳 ［伊藤］	正傳院(581)2世	190g
30	一山正之		大正6生まれ、29世長男、同弟子(昭和6)、同法嗣(昭和18)、昭和36・10入山、昭和46青島幼稚園移転 ［伊藤］	傳榮寺(478)法地開山	190h

31	正見	現住	［伊藤］	傳榮寺(478)2世	

10教区	きんりゅうざん	しんがくじ	〒	426−0083
461番	金龍山	心岳寺	住　所	藤枝市谷稲葉1591
			住　職	鈴木舜光
開 山 年	永正1(1504)		草創年	不詳
本　　尊	釈迦牟尼佛　(旧、地蔵菩薩、元亀1・12まで)			
開　　基	(中興開基)圓成院殿心岳宗智大禅定法尼(三条実望母、永禄1(1558)4・1没)			
旧 名 称	蓮佛庵大永寺(開創時)、蓮佛山大永寺(慶長2まで)			
旧所在地	現在地より約100メートル山上			
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	兆山岱朕	享禄2 (1529)8 ・28	林叟院賢仲繁哲第一弟子、蓮佛庵に留錫、永正1蓮佛庵大永寺開創、在住約5年、林叟院へ転住(在住20年)、享禄1林叟院退院、世寿65歳	石雲院(607)輪住(永正14)、林叟院(388)3世、養源院(474)開祖、松雲寺(1049廃)開山	409a
2	虎雲慧篁	天文23(1554)2 ・23	開山第1法嗣、享禄3三条実望葬儀導師	石雲院(607)輪住(享禄4)、善福寺(廃)開山	409b
3	学叟昌文	弘治2 (1556)4 ・29		新豊院(214)開山、徧照寺(430)2世	409c
4	蒲山孝順	天正1 (1573)11・29	勅賜大満孝心禅師、永禄1三条実望母葬儀導師、元亀1・12本尊変更	徧照寺(430)開山、正泉寺(464)開山、正岳寺(465)草創開山、満蔵寺(471)開山、養源院(474)、常元寺(574)開山、大竜寺(575)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
5	太意孝舜	慶長4 (1599)2 ・11		慈林寺(219)開創開山、(松寿寺(469)開山)、慈光院開山、圓通院開山、光正寺(廃)開山？	409e
6	閑巣順学	慶長18(1613)1 ・15	慶長2山号寺号改称、旧山号寺号を開創した末寺へ付与	大永寺(553)開山、清源院開山	409f
7	儀堂宗威	元和2 (1616)1 ・29		大洞院(1303)輪住(慶長15)、法昌寺(482)開山、常観寺(570)開山、一照寺(576)開山	409g
8	通谷壽聞	寛永2 (1625)7 ・26		松寿寺(469)開山、清林寺(484)改宗草創開山	409h
9	活山傳龍	寛永12(1635)12・24		観音寺開山、医福寺(429廃)開山？	409c
10	歴州順応	明暦2 (1656)8 ・6		徧照寺(430)10世、法泉寺開山、蔵田寺(廃)開山？	409d
11	星山茂天	元禄4 (1691)8 ・6	寛文8・9・6諸堂大破、本堂建立	石雲院(607)輪住(明暦3、寛文3)、正泉寺(464)2世、清源院開山	409e
12	霊岩天英	元禄15(1702)1 ・4		清源院2世	409f
13	慧空盤海	享保20(1735)7 ・13		石雲院(607)輪住(享保2)	
14	活門通禅	宝暦4 (1754)3 ・11			
15	泰州古泉	安永5 (1776)1 ・24	(世寿81歳、山西洞家より)	正泉寺(464)3世、信香院(556)14世	409g 410e
16	増山義長	天明4 (1784)10・28	(安永7焼失、安永8・3諸堂再建、稲葉町誌より) (世寿61歳、同上)	石雲院(607)輪住(明和8)	

17	泰屋斧山	安永5（1776）1・24	（世寿34歳、同上）		
18	大高真海	寛政4（1792）1・23	（世寿48歳、同上）		
19	戒雲禅達	文化9（1812）5・30	（世寿68歳、同上）	静居寺(493)20世	
20	旭輪本高	文政3（1820）9・19	（世寿51歳、同上）	正泉寺(464)4世、静居寺(493)22世	
21	然亮高堪	天保8（1837）11・21	（世寿60歳、同上）	正泉寺(464)5世、信香院(556)18世	410b
22	天壽台全	嘉永6（1853）9・7	（世寿78歳、同上）	石雲院(607)輪住(文政8)、正泉寺(464)6世、信香院(556)19世	410c 636d
23	応仙実宗	嘉永4（1851）6・7	（世寿62歳、同上）	正泉寺(464)7世、信香院(556)20世、富洞院22世	410d 636c
24	智観禅鏡	慶応4（1868）6・19	（世寿55歳、同上）	松寿寺(469)法地開山、養源院(474)開山、富洞院23世、高山寺2世、光明寺開山？	636c
25	得隆昭瑞	明治25(1892)11・8	（明治5・4・9諸堂焼失、法泉寺で示寂、稲葉町誌より）	正泉寺(464)11世	
26	傳牛俊全	明治28(1895)5・30	（世寿51歳、山西洞家より）［稲葉］	正泉寺(464)12世、正岳寺(465)開山、松寿寺(469)2世、養源院(474)2世、（法昌寺(482)）、富洞院27世	636e
27	禅良鐵門	大正5（1916）1・22	［吉岡］	正泉寺(464)13世、正岳寺(465)2世、満蔵寺(471)開山、高山寺4世、医福寺(429廃)法地開山？	636c
28	玉道全覚	昭和5（1930）11・19	［高岸］	正泉寺(464)14世、正岳寺(465)4世、満蔵寺(471)2世、(法昌寺(482))	636d
29	舜孝鐵禅	昭和19(1944)11・18	中興、昭和9本堂建立、（世寿67歳、同上）［吉岡］	正泉寺(464)16世、正岳寺(465)5世、満蔵寺(471)3世、法昌寺(482)法地開闢、清林寺(484)法地開闢開山、石雲院(607)独住8世	636d
30	慈孝禅明	平成1（1989）4・1	（勧請、正泉寺記録より）［吉岡］	正泉寺(464)17世、正岳寺(465)6世、大竜寺(575)前住	636e
31	満慶祖光	平成4（1992）1・1	重興［鈴木］	林叟院(388)37世、法昌寺(482)3世、清林寺(484)2世	636e
32	尭潤舜光	現住	［鈴木］	慈光院、圓通院	636g

10教区	くまのさん	しょうせんじ	〒	426−0066
464番	熊野山	正泉寺	住　所	藤枝市青葉町3丁目14−10
			住　職	吉岡博道
開山年	永禄年間(1558−1570)		草創年	
本　尊	釈迦牟尼仏			
開　基	(法地開基)廣輪院繁林栄昌居士、廣貞院繁室妙昌大姉			
旧名称	松林寺(享保9(1724)2まで)			
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺史等	『傳牛俊全大和尚追慕』(1993)、『師資二代』(2005)			

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	蒲山孝順	天正1（1573）11・29	勧請(法地開闢時)、勅特賜光心大満禅師	心岳寺(461)4世、偏照寺(430)開山、正岳寺(465)草創開山、満蔵寺(471)開山、養源院(474)、常元寺(574)開山、大竜寺(575)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
2	星山茂天	元禄4（1691）8・6	勧請(法地開闢時)	石雲院(607)輪住(明暦3、寛文3)、心岳寺(461)11世、清源院開山	409e
3	泰州古泉	安永5（1776）1・24	勧請(法地開闢時)、世寿81歳	心岳寺(461)15世、信香院(556)14世	409g 410e
4	旭輪本暠	文政3（1820）9・19	勧請(法地開闢時)、世寿51歳	心岳寺(461)20世、静居寺(493)22世	
5	然亮暠湛	天保8（1837）11・20	勧請(法地開闢時)、島田市中溝町小沢氏出身、世寿61歳	心岳寺(461)21世、信香院(556)18世	410b
6	天壽台全	嘉永6（1853）9・7	法地開闢(嘉永2)、世寿78歳	石雲院(607)輪住(文政8)、心岳寺(461)22世、信香院(556)19世	410c 636d
7	應先實秀	嘉永7（1854）6・7	世寿63歳	心岳寺(461)23世、信香院(556)20世、富洞院22世	410d 636c
8	州全玉剛	明治11(1878)3・16	世寿49歳　［高岸］	信香院(556)24世、富洞院25世	410h 636d
9	寶國興闇	明治19(1886)10・20	世寿82歳　［高岸］		
10	秀山賢苗	明治39(1906)8・11			
11	得隆昭瑞	明治25(1892)11・8		心岳寺(461)25世	
12	傳牛俊全	明治28(1895)5・30	尾張出身、心岳寺24世智観禅鏡弟子、愛知県半田竜台院・名古屋祇園寺で甘雨為霖の鉗鎚を受く、正岳寺で示寂、『傳牛俊全大和尚追慕』参照、世寿53歳、法齢37年［稲葉］	心岳寺(461)26世、正岳寺(465)開山、松寿寺(469)2世、養源院(474)2世、(法昌寺(482))、富洞院27世	636e
13	禅良鐵門	大正5（1916）1・22	嘉永3・4・15生まれ、有渡郡有渡村古澤幸次郎三男、心岳寺24世智観禅鏡弟子、慶応1-3加賀天徳院奕堂の下で修行、12世法嗣、正岳寺で示寂、世寿67歳　［吉岡］	心岳寺(461)27世、正岳寺(465)2世、満蔵寺(471)開山、高山寺4世、医福寺(429廃)法地開山？	636c
14	玉道全覚	昭和5（1930）11・19	慶応2・11・18生まれ、藤枝町木町森島久四郎二男、富洞院25世玉剛弟子、林叟院で修行、13世法嗣、当寺で示寂［高岸］	心岳寺(461)28世、正岳寺(465)4世、満蔵寺(471)2世、(法昌寺(482))	636d
15	諦應大忍	昭和31(1956)7・26	14世弟子、同法嗣、世寿63歳［長谷川］		636e
16	舜孝鐵禅	昭和19(1944)11・18	明治11・3・17生まれ、志太郡前島村曽根善重長男、13世弟子、同法嗣、天徳寺で秋野孝道・臨済宗正眼寺で対馬昭隠の鉗鎚を受く、永平寺後堂、永平寺眼蔵会講師、石雲院で示寂、『師資二代』参照、世寿67歳、法齢53年　［吉岡］	心岳寺(461)29世、正岳寺(465)5世、満蔵寺(471)3世、法昌寺(482)法地開闢、清林寺(484)法地開闢開山、石雲院(607)独住8世	636d

17	慈孝禅明	平成1（1989)4 ・1	中興、明治37・2・27生まれ、名古屋市市川市太郎二男、16世弟子、同法嗣、大正13−昭和2発心寺で原田祖岳の鉗鎚を受く、昭和31熊野権現堂・奥之院建立、昭和40墓地・駐車場造成、昭和59本堂建立、当寺で示寂、『師資二代』参照、世寿86歳、法齢72年［吉岡］	心岳寺(461)30世、正岳寺(465)6世、大竜寺(575)前住	636e
18	大舜博道	現住	昭和17正泉寺生まれ、17世弟子、同法嗣、昭和61晋山、平成9墓地・駐車場造成、平成18駐車場造成、平成22庫裡建築　［吉岡］	正岳寺(465)8世	636g

10教区	はくおうざん	しょうがくじ	〒	425−0073
465番	白應山	正岳寺	住　所	焼津市小柳津252
			住　職	吉岡博道
開山年			草創年	
本　尊	十一面観世音			
開　基				
旧名称				
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—心岳寺(461)—正泉寺(464)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	蒲山孝順	天正1（1573)11・29		正泉寺(464)開山、心岳寺(461)4世、徧照寺(430)開山、満蔵寺(471)開山、養源院(474)、常元寺(574)開山、大竜寺(575)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
開山	傳牛俊全	明治28(1895)5 ・30	明治26毘沙門堂再建　［稲葉］	正泉寺(464)12世、心岳寺(461)26世、松寿寺(469)2世、養源院(474)2世、(法昌寺(482))、富洞院27世	636e
2	禅良鐵門	大正5（1916)1 ・22	当寺で示寂　［吉岡］	正泉寺(464)13世、心岳寺(461)27世、満蔵寺(471)開山、高山寺4世、医福寺(429廃)法地開山？	636c
3	剛禅俊法	昭和4（1929)8 ・1	［稲葉］	富洞院28世	636c
4	玉道全覚	昭和5（1930)11・19	勧請、正泉寺で示寂　［高岸］	正泉寺(464)14世、心岳寺(461)28世、満蔵寺(471)2世、(法昌寺(482))	636d
5	舜孝鐵禅	昭和19(1944)11・18	法地開闢(明治39・4・18)　［吉岡］	正泉寺(464)16世、心岳寺(461)29世、満蔵寺(471)3世、法昌寺(482)法地開闢、清林寺(484)法地開闢開山、石雲院(607)独住8世	636d
6	慈孝禅明	平成1（1989)4 ・1	昭和4住職、昭和8正泉寺へ転住　［吉岡］	正泉寺(464)17世、心岳寺(461)30世、大竜寺(575)前住	636e
7	義海良浩	昭和53(1978)5 ・24	昭和8・4・29入寺式、昭和8・7・27住職辞令、昭和40本堂建立、当寺で示寂　［阿部］	盤龍寺(50)26世	636g

8	大舜博道	現住	昭和53・10住職辞令、昭和54・4・1晋山式、昭和60正泉寺へ転住・当寺兼務　［吉岡］	正泉寺(464)18世	636g

10教区	ちょうこざん	えんめいじ	〒	426−0076
466番	長古山	延命寺	住　所	藤枝市内瀬戸646
			住　職	梅貝孝雄
開山年	天正9(1581)10？		草創年	
本　尊	延命地蔵菩薩			
開　基	良知安平			
旧名称				
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―洞雲寺(459)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	覚翁文等	文禄4（1595)7・26		洞雲寺(459)4世、釣学院(583)開山、耕雲寺開山、芳林寺(埼玉91)開山	410b
法地開山	関室元啓		［伊村］	洞雲寺(459)27世、向善寺(423)3世、龍雲寺5世、林昌院	411c
2	道順達元		［伊村］	洞雲寺(459)28世、光明寺(472)2世	411c
3	仙峯啓寿	昭和18(1943)3・23	法地開闢　［伊村］	洞雲寺(459)29世、向善寺(423)5世、龍爪寺開山、林昌院4世	411c
4	終南卓成			向善寺(423)4世、積善寺21世	
5	義門徹宗				
6	蒼龍鉄髯		［神谷］	円良寺(485)前住、龍泉院(新潟477)25世	431d
7	孝山達道	昭和58(1983)3・11	［小川］	洞雲寺(459)30世、圓泉寺(559)9世	411e
8	大道文雄	昭和62(1987)4・28	［梅貝］	法華寺前住	411g
9	(泰嶽)孝雄	現住	［梅貝］		411f

10教区	せんとうざん	しょうじゅじ	〒	426−0041
469番	仙洞山	松寿寺	住　所	藤枝市高柳1丁目8−30
			住　職	伊藤正和
開山年	寛永2(1625)		草創年	治承1−2(1177−1178)真言宗
本　尊	妙見菩薩			
開　基	松壽寺殿義翁實雄大居士(岡嵜四郎平義実)			
旧名称				
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	賢仲坊法印一超	治承2（1178）5 ・28	真言宗、三浦六郎平義村の帰依により高野山西谷金剛密院より当寺へ移転		
2	良観僧律		真言宗、建長2栄西帰朝により京都に移る		
3	義證律師		真言宗、建久6源頼家に随い東大寺に入る		
4	良渕僧律	承元2（1208）6 ・22	真言宗、以後元亀2まで数代続くが元亀年間に兵火で滅亡		
（開山）	（太意　舜）	（慶長4（1599）3 ・11） （慶長4（1599）2 ・12）	（駿河記、駿河志料より）	心岳寺(461)5世、慈林寺(219)開創開山、慈光院開山、圓通院開山、光正寺（廃）開山？	409e
開山	通谷寿聞	寛永2（1625）7 ・26		心岳寺(461)8世、清林寺(484)改宗草創開山	409h
前住	眼葬善密（庵）（察）	23			
前住	才雲藝公	9	中興		
前住	慶峯禅賀	正徳1（1711）6 ・6			
前住	定室龍禅	正徳4（1714）3 ・6			
前住	名峯州譽	元禄1（1688）10・23			
前住	性山梅本	宝暦2（1752）11・23	中興、伽藍建立・田地購入		
前住	牧翁廻牛	明和2（1765）7 ・11	丹波氷上郡黒井在平松村出身		
前住	亨穏五宗（享）	明和4（1767）4 ・23			
前住	越玄了仙	文政2（1819）11・18			
前住	大道秀関	文政3（1820）5 ・23	中新田村出身		
前住	實有芳禅	弘化1（1844）12・19 （天保15）	当村池田市五郎三男、当寺開山の養育の師		
前住	照山心亮	慶應3（1867）10・18	志太郡藪田村出身		
前住	佛山魯恭	明治2（1869）8 ・21			
法地開山	智觀禅鏡			心岳寺(461)24世、養源院(474)開山、富洞院23世、高山寺2世、光明寺開山？	636c
2	傳牛俊全			心岳寺(461)26世、正泉寺(464)12世、正岳寺(465)開山、養源院(474)2世、（法昌寺(482)）、富洞院27世	636e
3	興庵惠宗				
4	南嶺台籌			一雲斎24世？、海福寺1世？、興禅寺(愛知)27世？	181b?
5	金堤龍文		［岩本］	顕光院(1)23世、宗乗寺(460)25世、高岳寺(531)16世、正泉寺(532)法地開山、大霊寺(533)4世	462d
6	活文潭龍				
7	洞雲本龍				
8	大雲嶺登	明治44（1911）9 ・2	愛知県医福寺で示寂		
9	転常法輪	昭和2（1927）3 ・27	正泉寺で示寂、世寿79歳［近藤］	正泉寺(532)8世	462c
10	松洞皆禅	昭和34（1959）6 ・18	常泉寺で示寂、世寿74歳［近藤］		462d
11	大巖道器	昭和39（1964）3 ・16	世寿84歳　［鈴木］		31d
12	天荘自佑	東堂	平成2・6・11退院　［木村］	顕光院(1)27世	462g

13	真禅正和	現住	［伊藤］		

10教区			〒	426−0134
470番	寶城山	竜雲寺	住　所	藤枝市滝沢1498
			住　職	中野俊光
開 山 年	天正1(1573)		草創年	後三条天皇の頃(1068−1072)
本　　尊	延命地蔵菩薩			
開　　基	実参洞惇和尚(天正9(1581)1・28示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—洞雲寺(459)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	竜雲玄空道人		竜雲寺建立(後三条天皇の頃)		
開山	信屋聚哉	天正1 (1573)1 ・18	勧請	石雲院(607)輪住(永禄2)、洞雲寺(459)3世、岳叟寺(427)開山、利勝院(428)開山、用心院(568)開山、慈済寺(廃)開山、用雲寺(廃)開山、峰叟院(廃)開山、竜泉寺(廃)開山、林昌寺3世	410a
2	實参洞惇	天正9 (1581)1 ・28	開基、寺号山号制定、1573年住職、在住10年？		
前住	用雲茂全	慶長3 (1598)1 ・15		用雲寺(廃)	
前住	安岫祖全	慶長15(1610)5 ・2		用雲寺(廃)	
3	賀州呑益	承応2 (1653)4 ・3			
前住	月峯収吟	元禄6 (1693)10・9		用雲寺(廃)	
4	霊苗龍田	宝永7 (1710)2 ・9			
5	興岩運隆	享保4 (1719)12・28	中興、在住40年、世寿77歳		
6	月峰玉印	安永8 (1779)8 ・16	在住42年、世寿70歳、法齢57年		
7	教宗祖外	文化12(1815)8 ・1	現本堂建立・諸堂再建、(現在地へ移転、瀬戸谷村誌より)		
前住	大龍				
8	温山祖恭	嘉永2 (1849)2 ・15	市之瀬宗右衛門の子、洞雲寺21世悦宗岱善弟子		
前住	積応岱然	文久2 (1862)4 ・30	洞雲寺より閑居	洞雲寺(459)22世、盤脚院(421)14世	411c
9	大長德圓	明治26(1893)7 ・17	法地開山、明治14晋山式、明治23島田初倉養德寺へ隠居 ［鈴木］		411c
10	大洞耕雲	明治32(1899)3 ・2	世寿40歳 ［神谷］		411d
11	大仙隆寶	昭和25(1950)3 ・29	中興、大正7初住、昭和19・4・3晋山式、屋根替・什物一新、徳望高し、世寿62歳 ［鈴木］		411f
12	忠允俊雄	昭和20(1945)6 ・11	戦死、世寿21歳		
前住	大乗仙栄		還俗 ［鈴木］		411e
前住	正範		出奔 ［村瀬］		

13	絶学一信	平成8（1996）7・3	昭和31住職・庫裡改築、昭和32晋山式、昭和56位牌堂新築、世寿87歳　［鈴木］		411g
14	魏嶽信之	昭和44(1969)10・12	南アルプス宝剣岳で遭難、世寿27歳		
15	得髄俊光	現住	平成10・8入寺式、平成13・3・11晋山式、平成12本尊新造・諸堂改修・屋根替　［中野］		241e

10教区	ぎょうこざん	まんぞうじ	〒	426−0022
471番	暁居山	満蔵寺	住　所	藤枝市稲川1丁目3−14
			住　職	古市太郎
開 山 年	永禄12(1569)		草創年	元弘1(1331)（真言宗・志太郡田尻村寶楽寺末、西益津村誌より）
本　　尊	延命地蔵菩薩			
開　　基				
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	暁居		（児島七郎高久、元弘1当地へ来訪、29歳で出家・庵を創建、西益津村誌より）		
開山	蒲山孝順			心岳寺(461)4世、偏照寺(430)開山、正泉寺(464)開山、正岳寺(465)草創開山、養源院(474)、常元寺(574)開山、大竜寺(575)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
	（法輪）		（宝暦7諸堂再建、同上）		
	（雲峯）		（明治16・12・18住職、明治24当時住職、同上）［金田一］		
	（見道）		（大正2当時住職、同上）［久保田］		
開山	禅良鉄門	大正5（1916）1・28	勧請、世寿67歳　［吉岡］	心岳寺(461)27世、正泉寺(464)13世、正岳寺(465)2世、高山寺4世、医福寺(429廃)法地開山？	636c
2	玉道全覚	昭和5（1930）11・19	勧請、世寿65歳　［高岸］	心岳寺(461)28世、正泉寺(464)14世、正岳寺(465)4世、(法昌寺(482))	636d
3	舜孝鉄禅	昭和19(1944)11・18	勧請、世寿67歳　［吉岡］	心岳寺(461)29世、正泉寺(464)16世、正岳寺(465)5世、法昌寺(482)法地開闢、清林寺(484)法地開闢開山、石雲院(607)独住8世	636d
4	德道春隣	昭和36(1961)1・28	法地初住、中興、昭和13本堂再建、世寿63歳　［加藤］		450e
5	徳山春光	平成4（1992）2・14	重興、4世長男、藤枝市稲川出身、昭和57開山堂・位牌堂新築、世寿69歳　［加藤］		450f
6	徳門大智	平成15(2003)10・10	5世示寂後兼務住職、世寿76歳　［加藤］	養源寺(474)8世	450e

7	大円太郎	現住	5世孫、平成11住職、平成16・5・23晋山式　［古市］		

10教区	うんそうざん	こうみょうじ	〒	426−0011
472番	雲掃山	光明寺	住　所	藤枝市平島372
			住　職	岡田達夫
開 山 年	寛文1(1661)		草創年	不詳・真言宗
本　　尊	釈迦牟尼如来　(旧、地蔵菩薩)			
開　　基	椿年壽公首座　(寛文1(1661)11・7示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―洞雲寺(459)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大洲重撮	寛永19(1642)7・24		洞雲寺(459)6世、釣学院(583)3世、芳林寺(埼玉91)4世、向善寺(423)開山、源昌寺(434)開山、延命寺開山？	410d 411a
開基	椿年壽公	寛文1(1661)11・7			
前住	江山鯨長				
前住	悦叟受忻				
前住	転山門易	元文2(1737)12・22			
前住	寂應慧禅	安永8(1779)8・5			
前住	天巖良苗	文化5(1808)3・27			
前住	天温全良	文化9(1812)8・9			
前住	岱宗默禅	文久	中興、万延1本堂再建		
前住	巨海龍音	明治1(1868)12・27			
前住	寿嶽鳳瑞				
前住	彦鳳				
前住	惠海龍卵	明治20(1887)9・17	［中西］	龍泉寺(東京)15世	
前住	佛門孝道	明治33年(1900)4・22	(明治21・5・30住職、西益津村誌より)［橋本］		
前住	瑞巖玉麟	大正末	東京都浅草玉宗寺へ転住［續］	長福寺(埼玉)27世、玉宗寺(東京)24世、福泉寺(同)30世	101b
2	道順達元		法地開山　［伊村］	洞雲寺(459)28世、延命寺(466)2世	411c
3	霊樹秀峰	昭和13(1938)11・20	法地開闢(明治45・4・3、西益津村誌より)［小島］		
4	祖嶽正道	昭和25(1950)10・21			
5	佛戒祖禅	昭和48(1973)12・21	［大和］	円良寺(485)前住、甘露寺(滋賀)20世	797f
6	祖峰達夫	現住	昭和56・11・16晋山　［岡田］		797g

10教区	じゅうりんざん	しんぷくじ	〒	426−0066
473番	十輪山	新福寺	住　所	藤枝市青葉町1丁目28−1
			住　職	牧野真三
開 山 年			草創年	

本　　尊	地蔵菩薩尊
開　　基	徳外順音大和尚禅師(延宝1(1673)10・25示寂)
旧 名 称	
旧所在地	
本　　寺	大本山總持寺―大興寺(657)―長興寺(584)―富洞院(462)
寺 史 等	

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	徳外順音	延宝1 (1673)10・25		總持寺傳法庵輪住(寛文5)、富洞院9世	1046e
2	如山黙全	大正14(1925)5 ・2	[江崎]	官養院3世	410e
3	中山忍興	昭和27(1952)1 ・30	[野扒]	官養院4世	410f
4	大游劫外	昭和48(1973)10・26	静居寺へ転住 [菅原]	静居寺(493)30世、法幢寺(509)2世、慶福寺(511)2世、玉雲寺(513)1世	412g
5	乕嶽真哮	昭和43(1968)9 ・2	[牧野]		
6	大徳真三	現住	岐阜県観音寺33世諦音良信弟子 [牧野]		

10教区	こうりゅうざん	ようげんいん	〒	426−0041
474番	高柳山	養源院	住　所	藤枝市高柳2丁目4−44
			住　職	西村隆昌
開 山 年	天正1(1573)		草創年	寛徳1(1044)真言宗
本　　尊	聖観世音菩薩			
開　　基				
旧 名 称	用伝寺(真言宗)			
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
創立	観應悰公大法印	承暦1 (1077)1 ・18 (承保4)	真言宗		
開祖	兆山岱朕	享禄2 (1529)8 ・28		石雲院(607)輪住(永正14)、心岳寺(461)開山、林叟院(388)3世、松雲寺(1049廃)開山	409a
	補山孝順	天正1 (1573)11・29		心岳寺(461)4世、徧照寺(430)開山、正泉寺(464)開山、正岳寺(465)草創開山、満蔵寺(471)開山、常元寺(574)開山、大竜寺(575)開山、高山寺開山、普光寺(廃)開山、心月寺(廃)開山	409d
開山	智観禪鏡	慶応4 (1868)6 ・19	世寿55歳	心岳寺(461)24世、松寿寺(469)法地開山、富洞院23世、高山寺2世、光明寺開山?	636c
2	傳牛俊全	明治28(1895)5 ・30	世寿51歳 [稲葉]	心岳寺(461)26世、正泉寺(464)12世、正岳寺(465)開山、松寿寺(469)2世、(法昌寺(482))、富洞院27世	636e
3	法眼佛洲	明治23(1890)5 ・17	世寿59歳 [開地]	清源寺(42)16世	413d
4	心瑞賢宗	明治26(1893)9 ・15	法地開闢、世寿62歳		

5	宗山忍岳	大正7（1918）10・9	世寿50歳		
6	道始玄隣	大正9（1920）9・20	世寿71歳［太田］	大吉寺（愛知296）14世	450c
7	徳翁占隣	昭和27（1952）7・15	開立中興、世寿68歳［加藤］		450d
8	徳門大智	平成15（2003）10・10	世寿76歳［加藤］	満蔵寺（471）6世	450e
9	隆昌	現住	［西村］		

10教区	ばしょうざん	とうせんじ	〒	426−0011
475番	芭蕉山	東泉寺	住　所	藤枝市平島179
			住　職	寺澤孝道
開山年	正保2（1645）		草創年	
本　尊	延命地蔵菩薩			
開　基	芭蕉院東泉起立居士			
旧名称	馬上山			
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺—大興寺（657）—長興寺（584）—宗乗寺（460）			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	行室宗順	享禄1（1528）2・27（大永8）	勧請	宗乗寺（460）4世、円成寺（廃）開山	
草創開山	金屋　礼	正保2（1645）4・14		長興寺4世	
前住1	土桂洞達	延宝3（1675）10・24		栄昌寺3世	
前住2	花山蘭渓	元文4（1739）4・14			
前住3	竜雲徹吟	安永8（1779）1・24			
前住4	放午桃林	文化7（1810）3・4			
前住5	洪貴俊丈	天保6（1835）11・22	中興		
2	劫外実能	文久1（1861）12・27			
前住6	契聞了空	明治19（1886）10・6	世寿65歳［遠藤］		
（前住）	（老龍）		（明治19・6・12住職、明治24当時住職、西益津村誌より）［黒石］	宗乗寺（460）27世、興福寺10世、栄昌寺法地開山	190e
3	夏目泰山	大正5（1916）8・21	（法地昇等（明治41・9・15）、大正2当時住職、同上）、世寿87歳［夏目］	岳叟寺（427）3世	
4	欽保魁三	昭和5（1930）11・4	養雲寺へ転住［吉村］	養雲寺（476廃）	
5	法嶽俊隆	昭和49（1974）8・9	重興、愛知県犬山市出身、昭和27晋山、昭和48本堂・庫裡改築［寺澤］		456e
6	大心俊孝	東堂	5世弟子、昭和49晋山、平成21退院［寺澤］		456f
7	大玄孝道	現住	6世弟子［寺澤］		

10教区	ばんしょうざん	でんえいじ	〒	426−0051
478番	萬松山	傳榮寺	住　所	藤枝市大洲5丁目5−13
			住　職	田中秀明
開山年	天正3（1575）3		草創年	
本　尊	十一面観世音菩薩			
開　基	梅嶽玄清和尚			
旧名称				

旧所在地	
本　　寺	大本山總持寺―大興寺(657)―長興寺(584)―宗乗寺(460)
寺 史 等	

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	茂客長栄	文禄3（1594)1 ・19		宗乗寺(460)6世	
開基	梅嶽玄清		開山から法地開闢まで約20人、詳細不明		
(前住)	(巨鑑)		(中興、宝永2破堂取り壊して本堂建築、大洲村誌より)		
	(俊乗)		(万延1庫裡再建、同上)		
	(俊英宜鑑)		(明治35無住の当寺に閑居、庫裡・観音堂再建、同上)	法昌寺(482)前住15、龍源寺(愛知369)17世	
法地開闢	一山正之	平成2（1990)1 ・2	[伊藤]	宗乗寺(460)30世	190h
2	祖道正見		[伊藤]	宗乗寺(460)31世	
3	演能亮道		[田中]	浄圓寺現住、松光寺(549)1世	464e
4	秀明		[田中]		

10教区	だいかくさん	ほうしょうじ	〒	425−0088
482番	大覚山	法昌寺	住　所	焼津市大覚寺1024
			住　職	神谷隆幸
開 山 年	慶長年間(1596−1615)、(寛永年間(1624−1644)、駿河記・駿河志料より)		草創年	嘉祥3(850)（天台宗、駿河記・駿河志料より）
本　　尊	阿弥陀如来			
開　　基	日野資名			
旧 名 称	(法昌山大覺寺(天台宗)駿河記・駿河志料・西益津村誌より)			
旧所在地	(六間川の北、駿河記・駿河志料より)			
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	儀堂宗威	元和2（1616)1 ・29		大洞院(1303)輪住(慶長15)、心岳寺(461)7世、常観寺(570)開山、一照寺(576)開山	409g
前住1	松岳龍公	延宝3（1675)3 ・15			
前住2	無参春作	天和4（1684)11・24（貞享1）			
前住3	定心林禪	宝永6（1709)3 ・26			
前住4	善慶春積	享保11(1726)7 ・15			
前住5	汰輪水應	寛保1（1741)1 ・16（元文6）			
前住6	知外恵昌	宝暦2（1752)2 ・9			
前住7	環堂法運	宝暦4（1754)6 ・25			
前住8	挑翁春方	宝暦5（1755)1 ・12			
前住9	皿月本海	安永1（1772)5 ・17（明和9）			
前住10	巨山林海	天明4（1784)12・13			
前住11	萬元棟國	文化1（1804)7 ・21			
前住12	渓法桃源	天保12(1841)12・14			
前住13	法州泰乗	元治1（1864)7 ・5			

前住14	慈雲大薩	明治8（1875）12・15			
	（俊全）		（明治24当時住職、西益津村誌より）［稲葉］	心岳寺(461)26世、正泉寺(464)12世、正岳寺(465)開山、松寿寺(469)2世、養源院(474)2世、富洞院27世	636e
	（全覺）		（大正2当時住職、同上）［高岸］	心岳寺(461)28世、正泉寺(464)14世、正岳寺(465)4世、満蔵寺(471)2世	
前住15	俊英宜鑑	昭和4（1929）3・3		（傳榮寺(478)）、龍源寺(愛知369)17世	
前住16	戒光慧禪	昭和7（1932）3・18			
法地開闢	舜孝鐵禪	昭和19(1944)11・18	［吉岡］	心岳寺(461)29世、正泉寺(464)16世、正岳寺(465)5世、満蔵寺(471)3世、清林寺(484)法地開闢開山、石雲院(607)独住8世	636d
2	秀道金英	昭和24(1949)12・30	［竹田］	大永寺(553)24世	38d
3	満慶祖光	平成4（1992）1・1	［鈴木］	心岳寺(461)31世、林叟院(388)37世、清林寺(484)2世	636e
4	大道守禪	平成5（1993）1・16	中興、2世弟子、昭和25・3・16晋山、昭和35開山堂建築、昭和51本堂屋根替、世寿73歳［神谷］	常元寺(574)前住、一照寺(576)前住	38e
5	大岳隆幸	現住	4世弟子、平成17・5・15晋山式［神谷］		

10教区	こうほうざん	せいりんじ	〒	426-0041
484番	広峰山	清林寺	住　所	藤枝市高柳2425
			住　職	武藤俊弘
開山年	寛永13(1636)		草創年	慶雲2(705)華厳宗
本　尊	聖観世音菩薩(藤枝市指定文化財)			
開　基	(改宗開基)祖海			
旧名称	正法寺(草創時)			
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―心岳寺(461)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	義淵僧正		華厳宗、奈良東大寺住僧		
改宗草創開山	通谷寿聞	寛永2（1625）7・26		心岳寺(461)8世、松寿寺(469)開山	409h
改宗開基	祖海				
法地開闢開山	舜孝鐵禪	昭和19(1944)10・29	［吉岡］	心岳寺(461)29世、正泉寺(464)16世、正岳寺(465)5世、満蔵寺(471)3世、法昌寺(482)法地開闢、石雲院(607)独住8世	636d
2	満慶祖光	平成4（1992）1・1	［鈴木］	心岳寺(461)31世、林叟院(388)37世、法昌寺(482)3世	636e
3	一峰貫之	大正9（1920）1・19	［森］	雲太寺(愛知194)13世	245f
4	一雄鐵禪	昭和51(1976)11・13	法地開闢(昭和24・12)、昭和16当寺住職、昭和25晋山式、昭和29高洲幼稚園開設、世寿72歳、法齢60歳［武藤］	雲太寺(愛知194)14世	245g

5	孤峰俊弘	現住	4世弟子、昭和52・4晋山式、昭和52倉庫建築、平成3客殿建築、平成11庫裡増築、平成12墓地造成、平成23本堂改築 ［武藤］		

10教区	てんがくさん	えんりょうじ	〒	426−0031
485番	天岳山	円良寺	住　所	藤枝市築地1丁目13−21
			住　職	加藤英俊
開 山 年	文亀3(1503)3・19		草創年	
本　　尊	釈迦牟尼如来、十一面観世音菩薩			
開　　基	(中興開基)龍雲寺殿峯林桂公大姉(寿桂尼、今川氏親妻)			
旧 名 称	龍池山淵竜寺			
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―洞雲寺(459) (旧)大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―増善寺(60) (万治2(1659)まで)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	了念玄超 (然)	享禄4 (1531)5 ・1	増善寺法子		405f
勧請開山	在天祖龍	享禄5 (1532)1 ・27 (天文1)	勧請	洞雲寺(459)開山、円良寺(485)開山、桂林院(廃)開山、大円寺(廃)開山、長谷寺(廃)開山、宝相寺(廃)開山、林光院(廃)開山、林昌院開山	409a
前住	大休伊徹	天文1 (1532)6 ・11			
前住	祥翁麿吉	寛永12(1635)4 ・8			
前住	心安宗傳	寛文3 (1663)9 ・20			
前住	久安龍昌	寛文8 (1668)2 ・1			
前住	第室樶及	寛文10(1670)3 ・10			
前住	眞叟全應	元禄7 (1694)5 ・27	中興		
前住	梅芳秀香	元禄10(1697)8 ・30			
前住	祖柏雪園	元禄16(1703)11・19			
前住	寂翁宿禅	享保3 (1718)11・19			
前住	祥山海瑞	享保7 (1722)5 ・9			
前住	林鳳廣園	寛保3 (1743)2 ・11			
前住	玄開哲要	宝暦4 (1754)8 ・22			
前住	路峯採玄	宝暦8 (1758)8 ・29			
前住	祖道心禅	宝暦10(1760)2 ・19			
前住	信峯宗音	天明3 (1783)8 ・2			
前住	海潮大音	天明2 (1782) ・24			
前住	悦峯海洲	文化11(1814)7 ・30			
前住	佛山梁園	天明3 (1783)10・2			
前住	知道黙俊	寛政1 (1789)11・3			
前住	康三堅海	元治2 (1865)7 ・1 (慶應1)			

前住	孝道養順	明治27(1894)2 ・9	洞雲寺東堂になり当寺に入る［大石］	石雲院(607)輪住(嘉永2)、洞雲寺(459)24世、法幢寺(97)21世、龍雲寺2世	411e
前住	蒼龍鐵髯	昭和20(1945)8 ・24	当寺より大本山總持寺へ知客和尚として上山　［神谷］	延命寺(466)6世、龍泉院(新潟477)25世	431d
前住	太巖重之	昭和36(1961)3 ・2			
前住	佛戒祖禅	昭和48(1973)12・21	藤枝市光明寺へ転住　［大和］	光明寺(472)5世、甘露寺(滋賀)20世	797f
現住	(孝道)英俊	現住	［加藤］		181f

11教区	ふとうさん	てんとくじ	〒	427−0002
492番	冨洞山	天徳寺	住　所	島田市大草911
			住　職	石橋晋哉
開山年	明徳1(1390)		草創年	不詳・天台宗千葉山智満寺の三昧堂を改修したという
本　尊	釈迦牟尼佛			
開　基	長勝院殿輝翁道光居士(長谷川藤兵衛長勝、明暦1(1390)没)			
旧名称	深泉寺(草創時)			
旧所在地	会下沢(現在地より1里山奥、慶長年間(1596−1615)以前)			
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)（慶長年間(1596−1615)より (旧)大本山總持寺―泉福寺(大分58)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大通融士	応永19(1412)11・18	無著妙融弟子(無著16哲の1人)、深泉寺開山	泉福寺7世(大分58)、永泉寺(同・廃？)開山、大泉寺(同)開山、萬年寺(同)開山	531b 539a
前住2	一溪龍充	19		大泉寺(大分)2世、萬年寺(同)2世	539b
前住3	髙峰智現	天正19(1591)			
前住4	宝山了珍	天正21(1593)1 ・18 (文禄2)			
前住5	竺巖嬾桂	6			
2	国山禅梁	寛永10(1633)10・10	中興		
3	智山円達	寛永11(1634)1 ・16			
4	大応全海	明暦2 (1656)2 ・3		石雲院(607)輪住(寛永19)、長徳寺(494)開山	
5	紫天鯨雲	元禄3 (1690)11・23		洞源寺(500)開創、養徳寺(501)草創開山、瑞雲寺(502)草創開山、龍雲寺(510)開山、清源寺開山、法蔵寺開山、釣月寺開山、智徳寺開山、長雲寺開山？、来光寺(廃)開山？	
6	大義一道	享保2 (1717)7 ・25			
7	玄山義門	享保4 (1719)2 ・8			
8	活洲玄龍	享保6 (1721)11・3			
9	明堂鉄眼	享保9 (1724)7 ・27			
10	大頓寛悟	宝暦7 (1757)11・28			
11	棟宗哲梁	明和9 (1772)5 ・6	大津村出身		
12	寛海大龍	天明3 (1783)4 ・4	三河出身、世寿66歳		
13	大宗常存	文化4 (1807)10・16			

14	浮木寛江	寛政6（1794)5 ・12			176c? 177a?
15	雪団英積	5　　6 ・24	遠江掛川本郷邑長福寺21世法孫、在住27年、世寿79歳		517d
16	壽岳鳳仙	天保8（1837)12・10	島田上村出身、15世法孫、世寿60歳		517e
17	頑翁敷空	嘉永7（1854)5 ・15	三河岡崎出身、三河田原霊巌寺篤拙法嗣、世寿62歳	洞源寺(500)伝法初祖、建福寺17世	477b
18	憐英徳雄	明治15(1882)11・7	空性庵で示寂、世寿78歳	長福寺26世、傳心寺10世、東林寺19世	517f
19	賚豊興麟	明治14(1881)7 ・4		普門院(495)15世	
20	千外徹英	元治1（1864)6 ・24	三河吉田下地邑傳蔵二男、17世法嗣、駿東郡須走口永昌寺在住18年、同寺より転住、在住2年、世寿47歳	永昌寺	
21	宝山徳純	明治16(1883)2 ・9	相賀洞源寺で示寂、世寿67歳	洞源寺(500)3世、養徳寺(501)伝法開山、慶雲寺法地開山？	
22	拙堂卜頑	明治19(1886)9 ・23	三河出身、20世法嗣、尾川法蔵寺で示寂、世寿46歳		
23	禅巌本宗	明治37(1904)2 ・13			
24	大忍孝道	昭和9（1934)2 ・20	法憧開闢、勅特賜黙照圓通禅師、相良町波津出身、幼名「茂助」、世寿77歳　［秋野］	大本山總持寺独住7世、瑞雲寺(502)開闢開山、可睡斎(1302)49世、大洞院(1303)独住6世、長興寺23世、清源寺法地開山？	411b 1050g
25	蒼海彦龍	昭和21(1946)8 ・11	尾張中島郡稲沢町出身、世寿71歳　［鵜飼］	傳心寺19世	411c
26	真海洞龍	昭和59(1984)3 ・8	名古屋出身、大本山總持寺副貫主、世寿88歳　［石橋］	勝名寺(1188)6世、正法寺(岩手)54世、興禅院(神奈川373)25世、	411f
27	大機晋哉	現住	26世弟子、昭和59・11・18晋山［石橋］	慶雲寺6世	411g

11教区	せいげんざん	じょうこじ	〒	427−0048
493番	青原山	静居寺	住　所	島田市旗指3083
			住　職	古川義雄
開山年	永正7(1510)4・21		草創年	
本　尊	釈迦三尊仏(9世代より)			
開　基	(中興開基)大澤院殿荷叟浄圓居士(浅原四郎右衛門安近)			
旧名称	大澤山静居院(9世代に現在名に改称)			
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開祖	賢仲繁哲 (贔中繁喆)	永正9（1512)6 ・24	茂林芝繁弟子、崇芝性岱下で修行、永正4求慶寺(愚渓寺)開山、(当寺で示寂、駿河記・駿河志料より)、世寿75歳、法齢62年	石雲院(607)輪住(延徳3、明応4、永正2、永正7)、大洞院(1303)輪住(文亀1)、林叟院(388)2世、竜眠寺(869)開山、求慶寺(514廃)開山、見性寺開山	405a 409a
2	大樹宗光	天文19(1550)12・2	開祖弟子、世寿81歳	石雲院(607)輪住(大永4)、竜眠寺2世、慶福寺(511)開山、昌桂院(正林寺831)開山、慶正庵(廃)開山？	409a

前住	隨天宗順	永禄6（1563）	島田市金谷志戸呂平馬の子、開祖弟子、2世法嗣（永正14）、世寿77歳、法齢67年		409b
3	琴峰受泉（寿）	天正10(1582)5・16	2世法嗣、世寿84歳	石雲院(607)輪住(天文14)、昌桂院(正林寺831)2世、林入寺(507)開山、康泰寺(508)開山、快林寺開山、竜源寺開山、寿泉庵(廃)開山？	409b 412a
4	鉄叟棲鈍	寛永2（1625)7・11	中興、3世弟子	石雲院(607)輪住(慶長12)、桃原寺(89)開山、香橘寺(497)開山、法憧寺(509)開山、浄円寺開山？	412a
5	舟谷長呑	慶安5（1652)3・28	正林寺7世法嗣、總善寺住職(世代になし)	石雲院(607)輪住(寛永10)、香橘寺(497)2世、宝鏡庵(廃)開山？	412b
6	傑山鉄英	寛文9（1669)6・28	5世法嗣	石雲院(607)輪住(慶安5)、香橘寺(497)3世	412c
7	報資宗恩	寛文9（1669)10・5	寛文5住職、世寿41歳	香橘寺(497)4世、法恩寺(515廃)開山	412d
8	五峰開音	天和3（1683)10・15	7世法嗣(桃原寺3世機山慶全代付)	香橘寺(497)5世	412b
9	天桂伝尊	享保20(1735)12・10	慶安1・5・5生まれ、紀伊和歌山出身	香橘寺(497)6世、丈六寺(徳島)14世、明光寺(同)3世、普門院(495)開山、玉雲寺(513)開基、普門寺開山、蔵鷺庵(大阪20)開山、陽松庵(同68)開山	412c 413a
10	泰州真靖	享保11(1726)2・19	9世法嗣	石雲院(607)輪住(正徳1)、香橘寺(497)7世、福泉寺開山	413a
11	龍水竺雲	延享5（1748)3・6	10世法嗣	薬師庵(527)開山	
12	逆浪蔵白	延享5（1748)7・8	元録1・10・22生まれ、島田桑原仁兵衛の子、10世弟子	伝心寺開山	
13	巨海波龍	寛保3（1743)1・11	享保16・7・25生まれ、12世法嗣	普門院(495)6世	190b
14	禅峰宗参	宝暦8（1758)6・6	9世弟子、12世法嗣	普門院(495)7世	413c
15	空印心王	安永9（1780)6・7	9世弟子、14世法嗣、福井県空印寺中興(世代になし)、武蔵豊島郡金杉村で示寂		
16	二見石了（梁）	天明2（1782)3・9	宝暦8・4・5晋住、宝暦12退院、武蔵松月院で示寂	松月院(東京)21世	431a
17	斧伝道仙	明和6（1769)2・27	在住8年、世寿43歳	石雲院(607)輪住(明和2)	
18	無得克酬	享和3（1803)9・27	明和6・4・12晋住、武蔵松月院で示寂		
19	龍湫惠天	文化3（1806)3・16	天明2・10晋住、在住25年、世寿63歳	洞雲寺(459)16世	411c
20	戒雲禅達	文化9（1812)5・29	宝暦4・8・28心岳寺泰州古泉に師事、19世法嗣(文化3・4・11、林叟院23世代付)、明和6・7・25晋住	石雲院(607)輪住(文化4)、心岳寺(461)19世、普門院(495)12世	
21	慧光戒全	天保7（1836)4・4	20世法嗣(林叟院24世代付)、文化9・12・10晋住、島根永明寺で示寂	普門院(495)13世、全昌寺(岐阜)18世、永明寺(島根)30世、訂心寺(山口)15世	219c 221a
22	旭輪本暠	文政3（1820)9・19	寛政3・9心岳寺18世に師事、文化10・5・28晋住、世寿50歳	心岳寺(461)20世、正泉寺(464)4世	
23	石中泰眠	弘化3（1846)6・24	22世法嗣(文政3・11・23、林叟院24世代付)、文政3・11・23晋住、世寿63歳	盤脚院(421)12世	411b
24	大乗旭禅	文久3（1863)11・6	文化3・8・28心岳寺旭輪(当寺22世)に師事、世寿63歳	石雲院(607)輪住(文久1)、信香院(556)21世、伝心寺9世	410e 411c 412a

25	天成祐禅	明治6（1873)7・11	文久3晋住、在住11年、世寿43歳		412a
26	天慧禅能（惠）	明治26(1893)10・8	重興、藤枝出身［大石］	普門院(495)17世	412b
27	天如真禅	大正15(1926)6・22	嘉永6・11・28生まれ、島田瀧野彦作三男、24世弟子(9歳)、25世に師事(文久3)、明治20碧雲寺住職、明治26・11・1当寺晋住、大正11・12・18退院、世寿74歳［瀧野］	碧雲寺(209)28世	412c
28	道戒孝順	昭和12(1937)6・6	明治17・8生まれ、名古屋出身、27世弟子(明治30・9・28)、同法嗣(明治39・6・11)、大正12・12・18碧雲寺より晋住、在住15年、世寿54歳［鵜飼］	碧雲寺(209)30世	412f
29	祖嶽良道	平成3（1991)2・16	愛知県出身、昭和12晋住、昭和16退院・大阪陽松院へ転住、世寿84歳［加藤］	慶福寺(511)法地開闢、陽松庵(大阪68)33世、講田寺19世？	412g
30	大游劫外	昭和48(1973)10・26	明治40・2・22生まれ、富山県菅原家八男、富山県立山寺大法領外弟子(大正15・10・8)、28世法嗣(昭和10・3・11)、昭和10・4・26藤枝新福寺晋住、昭和17・8・24当寺晋住、在住32年、世寿66歳［菅原］	新福寺(473)4世、法幢寺(509)2世、慶福寺(511)2世、玉雲寺(513)1世	412g
31	大忍義雄	現住	昭和16生まれ、古川正義長男、香橘寺25世古川哲英弟子(昭和26・5・20)、30世法嗣(昭和34)、昭和43・10・28香橘寺晋住、昭和48・12・18当寺晋住［古川］	香橘寺(497)27世、松風軒(521)現住	412h

11教区	みょうおうざん	ちょうとくじ	〒	427−0059
494番	明王山	長徳寺	住　所	島田市新田町8650−1
			住　職	近藤宗彦
開山年	正保4(1647)6		草創年	元亀年間(1570−1573)真言宗
本　尊	釋迦牟尼仏			
開　基	天徳寺4世大應禅海(明暦2(1656)2・3示寂)			
旧名称				
旧所在地	島田市大津通(大正2現在地へ移転)			
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―天徳寺(492)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大應禅海	明暦2（1656)2・3		石雲院(607)輪住(寛永19)、天徳寺(492)4世	
前住1	名功呑譽	天和3（1684)1・3	中興、正保4・6大應禅海を開山に勧請		
前住2	凌高雲霄	元禄15(1702)6・28			
前住3	湛然元覚	元文4（1739)4・20			
前住4	禅關實定	天明1（1781)9・6			
前住5	錦峯鐵鱗	寛政6（1794)10・23			
前住6	大雲龍興	文化11(1814)5・29			
前住7	石城慧玉	文政12(1829)4・29			
前住8	石屋禅梁	嘉永4（1851)1・4		養徳寺(501)前住	

前住9	抜宗				
前住10	大宗				
前住11	太齢玄極		［高木？］	城願寺（神奈川）14世？	243c?
2	来機戒禅	大正10（1921）12・12	［城］	華厳院27世、法林寺	453d
3	南嶺寿山	明治33（1900）4 ・8	［木佐森］	林入寺（507）法地開山、龍雲寺19世	517c
4	笠翁戒儼	大正9（1920）6 ・8	法地開闢（明治23・7・17）、中興、明治26・3伽藍全焼、世寿70歳、法齢40年　［青葉］	法幢寺（509）3世、華厳院28世	453e
5	梵嶽道音	昭和33（1958）8 ・15	4世弟子、明治43・7・23住職、大正10以降境内地拡張、昭和7本堂再建、昭和25・3・15晋山式、世寿75歳、法齢48年　［近藤］	華厳院29世	453g
6	大道汎志	東堂	5世弟子、昭和33・8・28住職、昭和48位牌堂建立、昭和51英霊碑建立、昭和56山門建立、昭和60庫裡再建、昭和61・11・3晋山式、平成10釈迦三尊修復、平成13夢御堂（永代墓）建立、平成17・3・31退院、世寿88歳、法齢47年［近藤］		453h
7	大吼宗彦	現住	瀬戸市慶昌院18世伊藤正美二男、6世弟子、平成17・4・1住職、平成20・11・3晋山式［近藤］		

11教区	えんつうざん	ふもんいん	〒	427−0026
495番	円通山	普門院	住　所	島田市扇町6−4
			住　職	加藤良玄
開 山 年	元禄3（1690）、（元禄6（1393）駿河記・新風土記より）		草創年	
本　　尊	如意輪観世音菩薩			
開　　基	（開基）寂全（宝永5（1708）8・26示寂） （中興開基）臥雲院無外天心居士（高橋徳治郎・昭和47（1972）没）・眺雲院鶴聲壽光大姉（高橋みち・昭和58（1983）没）			
旧 名 称	普門庵（昭和17現在名に改称）			
旧所在地	明治22東海道線島田駅建設のため現在地へ移転			
本　　寺	大本山總持寺―大洞院（1303）―洞松寺（岡山28）―石雲院（607）―林叟院（388）―静居寺（493）―陽松庵（大阪68）（寛保3（1743）より） （旧）大本山總持寺―最乗寺（神奈川374）―龍泰寺（岐阜80）―善応寺（岐阜83）―徳巌寺（岐阜89）（元禄6（1693）より16年間） （旧）大本山總持寺―總寧寺（神奈川1）―海蔵寺（神奈川341）―傳正寺（茨城144）―台雲寺（東京27）（その後23年間）			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前住	寂全	宝永5（1708）8 ・26	開基		
	（賢達）		（元禄6小庵創立、駿河記・新風土記より）		

開山	天桂伝尊	享保20(1735)12・10	(勧請、駿河記より)	静居寺(493)9世、香橘寺(497)6世、丈六寺(徳島)14世、明光寺(同)3世、玉雲寺(513)開基、普門寺開山、蔵鷺庵(大阪20)開山、陽松庵(同68)開山	412c 413a
2	天光萬子	元文3 (1738)3 ・18	開山弟子、(寛延年中に当寺中興、駿河記・新風土記より)		413c
3	獅吼萬雷	延享4 (1747)7 ・4	(法地起立初住、山西洞家より)		
4	普蓋乾堂	延享5 (1748)1 ・23			
5	長安眠全	宝暦2 (1752)9 ・2			
6	巨海波龍	寛保3 (1743)1 ・12		静居寺(493)13世	190b
7	禅峰宗参	宝暦8 (1758)6 ・6	開山弟子	静居寺(493)14世	413c
8	雲海玄龍	宝暦13(1763)7 ・18			
9	佛眼圓鑑	安永3 (1774)2 ・15			
10	谷隠舜應	寛政7 (1795)7 ・26			
11	旭峰祖闇	寛政11(1799)8 ・14			
12	海雲禅達	文化9 (1812)5 ・29		石雲院(607)輪住(文化4)、静居寺(493)20世	
13	慧光戒全	天保7 (1836)4 ・4		静居寺(493)21世、全昌寺(岐阜)18世、永明寺(島根)30世、訂心寺(山口)15世	219c 221a
14	真間圓山				
15	賚豊興麟			天徳寺(492)19世	
16	完應亮全				
17	天慈全能	明治26(1893)10・8		静居寺(493)26世	412b
18	圓山覺成				
19	耕雲祖道	大正7 (1918)11・29		香橘寺(497)23世	
20	鐵心全之	昭和23(1948)7 ・31	愛知県小牧市出身、東京都板橋区蓮根で示寂、世寿55歳[亀谷]		
21	規契良範	平成1 (1989)2 ・14	中興(昭和60・10・27)、大分県遠見郡中山香町土師氏出身、大分県覚雲寺18世祖敬良順弟子、昭和37本堂再建、昭和54位牌堂建築、当院で示寂、世寿87歳、法齢74年[阿南]		533e
22	実山良玄	現住	島田市出身、21世弟子、昭和60・2・13住職、昭和60・10・27晋山式、平成5山門建立・客殿・庫裡増設 [加藤]		

11教区	がんこくざん	りゅうこういん	〒	427−0004
496番	岸谷山	龍江院	住　所	島田市岸2054
			住　職	山下芳昭
開山年	永禄3(1560)		草創年	延喜3(903)
本　尊	釋迦牟尼佛			
開　基				
旧名称				
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―可睡斎(1302)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
前住1	竹堂　来				
前住2	喜應　悦				
前住3	海翁　鯨				
開山	泰傳存康	寛永10(1633)6・28		可睡斎(1302)16世、学園寺2世、圓光寺3世	463b
2	花亭頓秀	承応3（1654)8・19		可睡斎(1302)18世、養命寺(518)開山、定光寺(919)開山	464a 465a
3	檎山秀薫	延宝4（1676)5・21			
4	産月照天	寛文9（1669)9・1			
5	龍蟠良白	元禄3（1690)10・9			
6	鐵岩祖牛	元禄10(1697)6・7			
7	玉産龍旨	享保7（1722)2・1			
8	月指海印	宝暦3（1753)3・15			
9	大仙抜牙	明和9（1772)6・18			
10	耕道良耘	安永9（1780)8・11			
11	章屋良峨	天明1（1781)12・5			
12	鐵哉良以	寛政1（1789)7・8			
13	恵嶽蘭香	寛政12(1800)4・21			
14	龍津玉籌	享和2（1802)7・17		宗徳院(124)17世	
15	養宗育山	嘉永1（1848)9・5			
16	金網龍鱗	天保13(1842)7・27		徳願寺(16)22世、秀道院(37)16世、龍雲寺(105)13世、龍国寺(東京)	21d
17	祖燈宗興	文政1（1818)7・12			410b
18	梵海潮音	嘉永3（1850)12・4		醫王寺17世、自得寺10世	410c
19	秀山太音	弘化4（1847)2・12			410b
20	祥雲太瑞	明治8（1875)8・14			410c
21	喚山太應	大正5（1916)3・17	［松下］	慶龍寺(20)5世、官養庵2世	410d
22	霊瑞應山	大正14(1925)1・5	［土屋］	小林寺6世	410e
23	佛山霊道	昭和49(1974)9・29	中興　［山下］	養命寺(518)法地開闢	410f
24	敬三道詠	平成7（1995)1・11	［山下］	養命寺(518)2世	410g
25	盡界芳昭	現住	［山下］	養命寺(518)3世	

11教区	げっかんざん	こうきつじ	〒	427−0006
497番	月澗山	香橘寺	住　所	島田市阿知ケ谷325
			住　職	磯田和雄
開 山 年	文禄2(1593)		草創年	
本　　尊	薬師三尊佛(旧、薬師如来、後に観世音菩薩)			
開　　基				
旧 名 称				
旧所在地	現在の白岩寺付近(6世代に現在地へ移転)			
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	鉄叟棲鈍	寛永2（1625）7・11	勧請(法地開闢時)、江尻袖師の農家出身	石雲院(607)輪住(慶長12)、静居寺(493)4世、桃原寺(89)開山、法憧寺(509)開山、浄円寺開山？	412a
2	舟谷長呑	慶安5（1652）3・28	勧請(法地開闢時)	石雲院(607)輪住(寛永10)、静居寺(493)5世、宝鏡庵(廃)開山？	412b
3	傑山鉄英	寛文9（1669）6・28	勧請(法地開闢時)	石雲院(607)輪住(慶安5)、静居寺(493)6世	412c
4	報資宗恩	寛文9（1669）10・5	勧請(法地開闢時)	静居寺(493)7世、法恩寺(515廃)開山	412d
5	五峰開音	天和3（1683）10・15	勧請(法地開闢時)	静居寺(493)8世	412b
6	天桂傳尊	享保20(1735)12・10	勧請(法地開闢時)、元禄2霊夢により現在地に移転	静居寺(493)9世、丈六寺(徳島)14世、明光寺(同)3世、普門院(495)開山、玉雲寺(513)開基、普門寺開山、蔵鷺庵(大阪20)開山、陽松庵(同68)開山	412c 413a
7	泰洲眞靖	享保11(1726)2・19	法地開闢(元禄2)、中興、客殿・庫裡・総門・仮中寮建立後、静居寺へ転住	石雲院(607)輪住(正徳1)、静居寺(493)10世、福泉寺開山	413a
8	備印明光	正徳2（1712）10・20	元禄2・9・21入院、在住24年		
9	禅山海光	享保6（1721）2・9	正徳2・10・20入院、在住10年		
10	心海禅髓	享保11(1726)6・16	享保6・2入院、在住6年		
11	鳳山龍宿	明和6（1769）11・12	享保11・6入院、客殿修復、在住15年、元文5・2総善寺へ転住、同寺で示寂	総善寺(426)12世	
12	了慧宣明	延享3（1746）8・20	元文5・2・23入院、寛保2静岡顕光院へ転住、同院で示寂	顕光院(1)12世	461d
13	国穏大京	天明1（1781）12・1	寛保2・12・22入院、寛保3・11村内慶雲寺開山、本尊・観音再興、諸堂屋根葺替、明和1退院隠居、在住23年	慶雲寺(廃)開山	
14	龍眉龐海	安永1（1772）11・16	明和1・4入院、総門・衆寮新造、在住9年、世寿46歳		
15	滄宗禅海	天明8（1788）6・25	安永1・11・18入院		
16	満堂寶充	文政7（1824）4・5		高岳寺(531)14世	325g
17	大忍賢龍	文政9（1826）2・6			
18	仙林桃紅	嘉永4（1851）8・21		春林院12世？	458c?
19	鉄山禅牛	文政10(1827)12・9			
20	地方高遠	天保8（1837）8・10			
21	鳥山義篆	嘉永3（1850）5・15		耕春院(424)15世	
22	廓道辨城	明治20(1887)5・11	(世寿75歳、山西洞家より)	伝心寺16世	
23	耕雲祖道	大正7（1918）11・29	三河出身、24世本葬儀中に示寂、(世寿78歳、同上)	普門院(495)19世	
24	画雲童龍	大正7（1918）11・18	秋田大円寺特選住職、同寺で示寂、世寿48歳	大円寺(秋田)20世	
25	祖雲哲英	昭和28(1953)4・11	三河出身、稲荷堂建立、昭和3授戒会［古川］		
26	大憲正義	昭和20(1945)4・1	三河出身、25世弟子、フィリピン沖で戦死、(世寿33歳、同上)		
27	大忍義雄	東堂	昭和49静居寺へ転住［古川］	静居寺(493)31世、松風軒(521)現住	412h
28	大峻繁雄	昭和52(1977)5・30	富士宮市先照寺出身、普門寺より転住、世寿63歳［磯田］		275f

29	峻嶺智康	昭和61(1986)5・29	28世法嗣、昭和53・4晋山式、在住中に示寂、在住9年、世寿34歳		
30	清峻和雄	現住	昭和62・4晋山式、慶福寺杉村弘道法嗣　［磯田］		

11教区			〒	427−0033
500番		洞源寺	住　所	島田市相賀1092
			住　職	
開 山 年			草創年	
本　　尊				
開　　基				
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―天徳寺(492)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開創	紫天鯨雲	元禄3（1690)11・23		天徳寺(492)5世、養徳寺(501)草創開山、瑞雲寺(502)草創開山、龍雲寺(510)開山、清源寺開山、法蔵寺開山、釣月寺開山、智徳寺開山、長雲寺開山？、来光寺(廃)開山？	
伝法初祖	頑翁敷空			天徳寺(492)17世、建福寺17世	477b
2	石菴太嚬				
3	寶山徳純	明治16(1883)2・2	中興	天徳寺(492)21世、養徳寺(501)伝法開山、慶雲寺法地開山？	
4	大安賢能	明治15(1882)12・27		養徳寺(501)2世	
5	得應法瑞	昭和2（1927)2・11		養徳寺(501)3世	
6	珍山大成	大正11(1922)11・7			
7	大泉活道	昭和59(1984)6・2	他寺へ転住		
8	賢龍正教	平成17(2005)2・6	庵原郡富士川町宗清寺へ転住、世寿100歳　［大嶽］	宗清寺(221)27世	370f
9	貫道締一	平成6（1994)12・16	名古屋市昭和区善昌寺へ転住［飯野］	善昌寺(愛知109)17世	462f
10	不昧全活	平成11(1999)6・4	長崎県菩提寺へ転住　［大野］	菩提寺(長崎2)33世？	64e
11	眞海照胤	平成21(2009)2・5	佐賀県武雄市出身　［吉武］		221g

11教区	えんめいざん	ようとくじ	〒	427−0033
501番	延命山	養徳寺	住　所	島田市相賀2260
			住　職	髙橋良浩
開 山 年	不詳		草創年	
本　　尊	延命地蔵菩薩			
開　　基	松雲貞公和尚(寛永2(1625)6・20示寂)、慶外高山居士(慶長19(1614)4・4没)			
旧 名 称				
旧所在地				

本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―天徳寺(492)
寺 史 等	

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	紫天鯨雲	元禄3（1690)11・23		天徳寺(492)5世、洞源寺(500)開創、瑞雲寺(502)草創開山、龍雲寺(510)開山、清源寺開山、法蔵寺開山、釣月寺開山、智徳寺開山、長雲寺開山？、来光寺(廃)開山？	
前住	松雲貞公	寛永2（1625)6・20	開基		
前住	寂天浄臣	元和1（1615)7・15			
前住	白岸太公	寛永5（1628)3・7			
前住	至山禅宿	正保3（1646)10・9	中興		
前住	玉山禅金	延宝8（1680)6・19			
前住	天超却外	享保16(1731)10・9			
前住	相容鈿円	宝暦6（1756)11・29			
前住	竺法儀仙	明和9（1772)2・22			
前住	柏岩玄樹	寛政9（1797)7・6			
	大光冨苗尼	文政5（1822)10・15			
前住	雄山梅英	弘化1（1844)12・8			
前住	真牛		弘化3春馨子新添		
前住	石屋全梁	嘉永5（1852)1・3	伊勢出身、文化11・12・21当寺焼失、文化13・12・1再建、嶋田長徳寺へ転住、野田鵜田寺へ隠居、同寺で示寂	長徳寺(494)前住8、鵜田寺	
	前法官忠				
伝法開山	寳山徳純	明治16(1883)2・2	天徳寺17世の法系	天徳寺(492)21世、洞源寺(500)3世、慶雲寺法地開山？	
2	大安賢能	明治15(1882)12・27	伝法開山法子	洞源寺(500)4世	
3	得應法瑞		天徳寺21世(当寺伝法開山)法嗣	洞源寺(500)5世	
4	大儛義鳳	明治42(1909)6・2	嶋田御仮屋松野甚太郎弟、天徳寺15世の法系、天徳寺18世・伝心寺10世徳雄法嗣［松野］		517g
5	興岳良英	昭和11(1936)10・24	金谷在岡田原徳川藩士長田元正長男、4世法嗣、安倍郡長田村川原光用院首先住職、昭和7・8・20退院、静岡市長田区下川原福慈庵へ閑居、同庵で示寂　［松野］	光用院(19)3世	517b
6	軌外良範	昭和49(1974)2・21	中興、徳川藩旗本高橋秀孝三男、5世法嗣、金谷町光明院首先住職、本堂築造、開山・位牌堂新築　［高橋］	光明院(634)26世	517b
7	哲巖良浩	現住	6世弟子、昭和61・2・27開山・位牌堂新築　［高橋］	光明院(634)28世	517c

11教区	ほうりんざん	ずいうんじ	〒	427−0033
502番	宝林山	瑞雲寺	住　所	島田市相賀316
			住　職	平野克史
開 山 年	元禄3(1690)11・23		草創年	
本　　尊	釈迦牟尼仏			

開　　基	
旧 名 称	
旧所在地	
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―天徳寺(492)
寺 史 等	

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
草創開山	紫天鯨雲	元禄3 (1690)11・23		天徳寺(492)5世、洞源寺(500)開創、養徳寺(501)草創開山、龍雲寺(510)開山、清源寺開山、法蔵寺開山、釣月寺開山、智徳寺開山、長雲寺開山？、来光寺(廃)開山？	
開闢開山	大忍孝道	昭和9 (1934)2 ・20	[秋野]	大本山總持寺独住7世、天徳寺(492)24世、可睡斎(1302)49世、大洞院(1303)独住6世、長興寺23世、清源寺法地開山？	411b 1050g
2	玄應大提	明治35(1902)12・10		法幢寺(509)前住	
3	天巖大保	昭和15(1940)6 ・6	[谷口]	清源寺2世	736f
4	松嶽月澗	昭和33(1958)12・27	[平野]		736g
5	真應雄禅	昭和19(1944)12・22			
6	克史	現住	[平野]		

11教区	ぶつでんざん	りんにゅうじ	〒	427−0058
507番	佛殿山	林入寺	住　所	島田市祇園町8512−1
			住　職	五藤秀典
開 山 年	天正6(1578)		草創年	不詳・天台宗智満寺末
本　　尊	聖観世音菩薩			
開　　基	秀岩全秋書記(寛永15(1638)9・22示寂)			
旧 名 称	佛田山隣祐寺―林幽寺(明治初年まで)			
旧所在地	島田市元島田(元禄年間まで)			
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	琴峰寿泉	天正10(1582)5 ・16		石雲院(607)輪住(天文14)、静居寺(493)3世、昌桂院(正林寺831)2世、康泰寺(508)開山、快林寺開山、竜源寺開山、寿泉庵(廃)開山？	409b 412a
開基	秀岩全秋	寛永15(1638)9 ・22			
前住2	融岩全祝	明暦1 (1655)12・7			
前住3	柏翁春庭				
前住4	粋巌紅純	正徳1 (1711)4 ・12 (宝永8)	中興		
前住5	浙嵒純東	寛保2 (1742)7 ・21	島田民話「薬梅」の和尚		
前住6	不昧禪光	寛政3 (1791)9 ・6			
前住7	大行戒忍				
前住8	眞嶽正道				

前住9	石應契珉	天保13(1842)5・16			
前住10	量外智道	元治1(1864)4・7		法幢寺(509)前住	
法地開山	南嶺壽山	明治33(1900)4・8	法地開闢、再中興 ［木佐森］	長徳寺(494)3世、龍雲寺19世	517c
2	無關大道				
3	天眞智暁	昭和33(1958)7・15	愛知県出身 ［水野］		517b
4	功雲義弘	昭和51(1976)8・3	［水野］		517c
5	暁山惟白	平成21(2009)3・5	4世弟子、藤枝竜雲寺前住(世代になし)、昭和51・11・3晋山、世寿80歳		
6	大法秀典	現住	5世弟子、静居寺30世弟子、同寺31世に転師、平成8・11・10晋山 ［五藤］	福泉寺前住	

11教区	しょううんざん	こうたいじ	〒	427−0048
508番	祥雲山	康泰寺	住 所	島田市旗指2883−1
			住 職	山田義明
開山年	慶長5(1600)または天正4(1576)5		草創年	不詳・天台宗
本 尊	聖観世音菩薩			
開 基	年室壽公首座(元和1(1615)5・29示寂)			
旧名称				
旧所在地	島田市扇町(万治3(1660)から昭和47(1972)4まで)			
本 寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)			
寺史等				

世 代	尊 名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	琴峰壽泉	天正10(1582)5・16	勧請	石雲院(607)輪住(天文14)、静居寺(493)3世、昌桂院(正林寺831)2世、林入寺(507)開山、快林寺開山、竜源寺開山、寿泉庵(廃)開山？	409b 412a
開基	年室壽公	元和1(1615)5・29			
2	一翁永宝	30			
3	年叟永壽	寛永10(1633)9・25		永源寺8世？、現慈院開山？	456h?
4	青岩梁天	寛永18(1641)1・30			
5	繁室林茂	慶安4(1651)2・22			
6	補底長綴	寛文12(1672)6・1			
7	達山周道	延宝7(1679)10・17	中興		
8	江山長國	宝永7(1710)10・26			
9	大圓覺海	宝暦2(1752)9・19			673d?
10	歩山哲運(参)	元文2(1737)6・26			
11	天巖覺瑞	元文4(1739)12・6			
12	定等祖祥	宝暦5(1755)12・17			
13	海光祖印	宝暦6(1756)10・29		廣澤寺(長野)25世？、徳運寺(同)30世？	861d?
14	象耕大舜	享和3(1803)8・8			
15	獲道宥麟	明治22(1889)6・18			
16	大用隨通		［松浦］	瑞昌院25世？	254d?

17	大円悊心	大正11(1922)1・17	在住28年、世寿76歳［杉山］	大永寺(553)22世、伝心寺15世	
18	覺雄専奎	昭和60(1985)10・29	中興、昭和47・4都市計画事業により市内扇町から現在地に移転、世寿96歳、法齢83年［山田］		30c
19	天眞義明	現住	18世弟子、昭和47・4・30晋山［山田］		30d

11教区	げっこうざん	ほうどうじ	〒	427−0048
509番	月光山	法幢寺	住　所	島田市旗指1450−1
			住　職	青葉茂雄
開山年	元和年間(1615−1624)または元和2(1616)または慶長6(1601)		草創年	
本　尊	聖観世音菩薩			
開　基	松岳宗祝首座(正保3(1646)2・17示寂)			
旧名称				
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	鐵叟棲鈍	寛永2（1625)7・11		石雲院(607)輪住(慶長12)、静居寺(493)4世、桃原寺(89)開山、香橘寺(497)開山、浄円寺開山？	412a
前住	松岳宗祝	正保3（1646)2・17	開基		
前住	正翁伝佶	寛文13(1673)8・29			
前住	誕山伝祝	正徳6（1716)2・30			
前住	古峰大謙	享保16(1731)4・13			
前住	牆外舜堂	元文2（1737)3・3			
前住	竜威大真	延享2（1745)12・14			
前住	禪林覚上	安永4（1775)10・13			
前住	無着賢外	文政10(1827)12・23			
前住	雄山俊峰	文政14(1831)1・1(天保2)			
前住	後山玉英	天保6（1835)4・6			
前住	大東玄良	天保7（1836)7・18			
前住	川流道水	天保8（1837)11・6			
前住	大渕默竜	天保14(1843)8・28			
前住	雷山默堂	弘化1（1844)10・5(天保15)			
前住	量外智道	元治1（1864)4・7		林入寺(507)前住10	
前住	玄応大提	明治35(1902)11・10		瑞雲寺(502)2世	
2	大游劫外	昭和48(1973)10・26	法地開闢［菅原］	静居寺(493)30世、新福寺(473)4世、慶福寺(511)2世、玉雲寺(513)1世	412g
3	竺翁戒僊	大正9（1920)6・8	［青葉］	長徳寺(494)4世、華厳院28世	453e
4	曹嶽楳堂	昭和63(1988)4・4	法地開闢(昭和21・4・16)、中興［青葉］	関川庵(1348)開山	453g

5	禪戒茂雄	現住	［青葉］	関川庵(1348)2世	

11教区	さんせきざん	りゅううんじ	〒	427−0007
510番	三石山	龍雲寺	住　所	島田市野田173
			住　職	倉見良光
開 山 年	天和2(1682)1・21		草創年	
本　　尊	阿弥陀如来　(旧、釈迦如来)			
開　　基	斯波六郎左衛門伊兵衛			
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―天徳寺(492)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	柴天鯨雲	元禄3 (1690)11・23	勧請	天徳寺(492)5世、洞源寺(500)開創、養徳寺(501)草創開山、瑞雲寺(502)草創開山、清源寺開山、法蔵寺開山、釣月寺開山、智徳寺開山、長雲寺開山？、来光寺(廃)開山？	
初住	久翁桃俊	1 ・21			
2	草岩峰香	寛永11(1634)1 ・12			
3	益山存利	正徳3 (1713)5 ・5	中興		
4	一翁意密	万治3 (1660)4 ・12			
5	梅厳獨端				
6	易峰交禅	享保17(1732)8			
7	普應益門	天明7 (1787)12			
8	實穏仙乗	寛政3 (1791)10・5	川根村笹間村出身		
9	大顕了機	文化10(1813)11・7	越後原郡出身、世寿92歳		
10	大信孝道	弘化3 (1846)10・12	御仮屋廣住佐五平二男		
11	大安量道	明治16(1883)4 ・17	尾川村神原仁助二男		
12	一山大雄	明治41(1908)1 ・5	中興、駿東郡沼津出身、明治16・11・27出火、明治23再建、世寿67歳	興福寺21世	
13	海淵賢龍	昭和18(1943)5 ・7	安倍郡長田村鎌〇で示寂、世寿66歳		
14	大器晩成	昭和17(1942)2 ・9	大宝俊成弟子　［八田］	泰休庵(滋賀)10世	472b
15	大用玄光	昭和62(1988)2 ・15	［八田］		472c
現住	法海良光	現住	法地開闢(平成15・10・24)［倉見］		

11教区	げっしょうざん	けいふくじ	〒	427−0034
511番	月松山	慶福寺	住　所	島田市伊太2060
			住　職	杉村弘道
開 山 年			草創年	
本　　尊	釋迦牟尼佛			
開　　基	古岳守泉和尚(慶長17(1612)9・15示寂)			
旧 名 称				
旧所在地				

本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)
寺 史 等	

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	大樹宗光	天文19(1550)10・2		石雲院(607)輪住(大永4)、静居寺(493)2世、竜眠寺2世、昌桂院(正林寺831)開山、慶正庵(廃)開山？	409a
開基	古岳守泉	慶長17(1612)9・15			
	名室清譽	慶安1(1648)9・16			
	盛屋元奕	明暦1(1655)6・8			
	機山傳應	寛文7(1667)11・15			
	歌山傳牛	元禄6(1693)10・11			
	深嶺素圭	正徳3(1713)9・12			
	良山月海	享保6(1721)11・21			
	徹源了宗	宝暦4(1754)8・15			
	玉線龍印	安永4(1775)8・17			
	巨嶽禪海	文化13(1816)9・10			
	石心見了				
	法雲東傳	文政5(1822)10・5			
	大安馨道	慶応1(1865)10・26			
	圓應佛海				
	祖学禪道	明治34(1901)3・23			
	蘭崖谷秀	大正3(1914)8・12			
	天外龍道				
	大道一真	昭和49(1974)2・18			
法地開闢	祖嶽良道	平成3(1991)2・16	［加藤］	静居寺(493)29世、陽松庵(大阪68)33世、講田寺11世？	412g
2	大游劫外	昭和48(1973)10・26	［菅原］	静居寺(493)30世、新福寺(473)4世、法幢寺(509)2世、玉雲寺(513)1世	412g
3	大圓弘道	現住	中興　［杉村］	薬師庵(527)前住	412h
4	大心宗弘	平成19(1991)8・22	世寿62歳		

11教区	ふどうさん	ぎょくうんじ	〒	427−0034
513番	不動山	玉雲寺	住　所	島田市伊太584
			住　職	戸田俊道
開 山 年			草創年	
本　　尊	釈迦牟尼仏			
開　　基	天桂傳尊大和尚			
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	天桂傳尊			静居寺(493)9世、香橘寺(497)6世、丈六寺(徳島)14世、明光寺(同)3世、普門院(495)開山、普門寺開山、蔵鷺庵(大阪20)開山、陽松庵(同68)開山	412c 413a
中興	悟州須了	寛永3（1626)12・30	中興		
2	喜叟悅公	延宝6（1678)1・17			
3	投隠祖林	宝永1（1704)1・29 (元禄17)			
4	自證清徹	宝永4（1707)3・21			
5	無外玄作	享保10(1725)12・14			
6	白旨傳文	宝暦4（1754)1・20			
7	一至全寶	天明5（1785)10・30			
8	青山孝及	寛政5（1793)9・13			
9	仙鎧惠忌	天保5（1834)4・25			
10	愚猶魯宗	天保15(1844)7・2			
11	實山良道	明治3（1870)8・29			
12	哲應大賢	大正5（1916)4・18			
1	大游劫外	昭和48(1973)10・26	［菅原］	静居寺(493)30世、新福寺(473)4世、法幢寺(509)2世、慶福寺(511)2世	412g
2	国英大豊	大正7（1918)1・30		昌林寺(106)26世	
3	徳巖大高	昭和41(1966)12・18		長泉寺(13)2世	
4	大薫靈道	平成15(2003)9・2	法恩寺17世弟子、昭和48晋山、世寿76歳、法齢57年 ［戸田］		412g
5	大梅俊道	現住	4世弟子、平成16・10・30晋山 ［戸田］		

11教区	がんとうざん	ようめいじ	〒	427−0004
518番	岸登山	養命寺	住　所	島田市岸2015
			住　職	山下芳昭
開山年	不詳		草創年	
本　尊	薬師如来			
開　基				
旧名称				
旧所在地				
本　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―可睡斎(1302)―龍江院(496)			
寺史等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	花亭頓秀	承応3（1654)8・19		龍江院(496)2世、可睡斎(1302)18世、定光寺(919)開山	464a 465a
法地開闢	佛山靈道	昭和49(1974)9・29	［山下］	龍江院(496)23世	410f
2	敬三道詠	平成7（1995)1・11	［山下］	龍江院(496)24世	410g
3	盡界芳昭	現住	［山下］	龍江院(496)25世	

11教区	もんしょうざん	しょうふうけん	〒	427−0038
521番	聞聲山	松風軒	住　所	島田市稲荷3丁目11−17
			住　職	古川義雄
開 山 年	享保年間(1716−1736)頃		草創年	
本　　尊	延命地蔵尊			
開　　基	禅山黙語首座(享保4(1719)7・26示寂)			
旧 名 称	地蔵庵			
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—静居寺(493)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開基	禅山黙語	享保4（1719)7・26	開基		
	満林知足	正徳4（1714)9・12			
	一渓喝音	享保7（1722)5・16			
	饉山慧通尼	明和2（1765)9・12	中興		
	達相辨了	寛政8（1796)9・28	世寿84歳		
	東岳了漸	文政7（1824)12・3			
	壽山貞松尼	元治1（1860)7・18	世寿74歳		
	孝道鐵如尼	明治24(1891)9・30			
	大圓玄道尼	昭和17(1942)11・2	世寿68歳		
	饉覺祖順尼	昭和25(1950)12・19	世寿40歳　［畑本］		
	楳心正純	昭和45(1970)4・20	世寿59歳　［二木］		
現住	大忍義雄	現住	［古川］	静居寺(493)31世、香橘寺(497)27世	412h

11教区	とうほうさん	やくしあん	〒	427−0034
527番	東方山	薬師庵	住　所	島田市伊太2771
			住　職	古川義典
開 山 年	元禄12(1699)		草創年	
本　　尊	薬師如来			
開　　基				
旧 名 称				
旧所在地				
本　　寺	大本山總持寺—大洞院(1303)—洞松寺(岡山28)—石雲院(607)—林叟院(388)—静居寺(493)			
寺 史 等				

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
開山	竜水竺雲	延享5（1748)3・6		静居寺(493)11世	
前住	(大圓)弘道	東堂	［杉村］	慶福寺(511)3世	412h
現住	大嶽義典	現住	静居寺31世大忍義雄法嗣［古川］		

11教区	えんめいざん	かんせんあん	〒	427−0037
1348番	延命山	関川庵	住　所	島田市河原2丁目11−20
			住　職	青葉茂雄

開 山 年	昭和48(1973)2・7	草創年	不詳
本　　尊	延命地蔵菩薩		
開　　基			
旧 名 称			
旧所在地			
本　　寺	大本山總持寺―大洞院(1303)―洞松寺(岡山28)―石雲院(607)―林叟院(388)―静居寺(493)―法幢寺(509)		
寺 史 等			

世　代	尊　名	示寂年月日	経歴等	歴住寺	大系譜
			創建等不詳、明治22年廃寺(島田市史より)、吉三地蔵あり		
開山	曹嶽楳堂	昭和62(1987)4 ・4	[青葉]	法幢寺(509)4世	453g
2	禪戒茂雄	現住	宗教法人設立、昭和48・2・7寺院台帳登録 [青葉]	法幢寺(509)5世	

教養部における数学教授方法についての考察

岡　田　朋　子

目的：

筆者は愛知学院大学の教養部の数学Ⅰ、数学Ⅱという授業を担当しています。

この授業は、宗教・宗教文化、歴史、国際文化、日本文化、心理、経営、国際経営、現代企業、法律、現代社会法などのいろいろな学部、学科の学生が受講している多人数クラスです。

以下では、理系ではない多人数クラスでどのように大学の数学を教えているか、また、どのような授業をしたら学生が授業内容を理解することができたか、また、どういうことを理解させるのが難しかったのかなどを紹介します。また、授業に対する学生の反応なども紹介して、どのような数学の授業が学生にとって有意義でわかりやすいのかを考察するのが目的です。

要約：

一方的で教科書通りに進める授業をやめて、学生にとって身近な話題を題材にしたり、実際に学生が自分の頭で考えたり問題を解いたりする時間を十分に与えたり、最近の数学の話題など数学や論理に興味を持つきっかけになるような問題を扱ったりすると、学生の反応がよく、静かに真剣に授業を聞くようになりました。

キーワード：

数の概念、集合、基数、有限集合、無限集合、無限級数、関数、微分積分、線形代数、行列、連立方程式、ゲーデルの不完全性定理

緒言：

数学Ⅰ、数学Ⅱの受講生のほとんどは中学校、高校のとき数学が苦手で、数学に対して苦手意識を持っています。分数の足し算やかけ算などの簡単な計算ができなかったり、中学校で習うはずのことがほとんどわかっていなかったりする学生も少なくありません。一方で、数学に興味があって大学の数学を理解したいという意欲のある学生もいます。

4年前、初めてこの大学で数学Ⅰを担当したときは、そのとき受け持っていた名古屋工業大学での微分積分学の授業を基に、それを簡単にしてわかりやすくしたような授業をしました。つまり、大学1年生向けの標準的な微分積分学のテキストを使い、そのテキストに沿って数学科のような「定義、定理、証明」という流れの授業をしました。その結果、ほとんどの学生が全く理解できない一方的な授業になってしまいました。

それで反省をして、その後はなるべく多くの学生にとって有意義な授業ができるように心がけ、「わからないことは言わない」、「難解な言葉は使わない」という方針の下で試行錯誤をくり返してきました。

最近は、毎回授業の最後に授業のまとめや質問、意見、要望、感想などを書いてもらっていて、それを基に次の授業計画を考えています。そして、なるべく学生が興味を持ちそうな話題を探し、少しでも数学がおもしろいと思ってもらえる内容を考えるようになりました。

以下で、去年度の数学の授業で具体的にどのような内容の授業をし、それに対する学生の反応や理解度はどうであったのかなどを書きます。

1．数

最初の授業では、まず数学の基本となる数について説明しました。

まず、自然数をわからせるために、単位という概念について説明し、それがいくつ分あるかで個数という概念が生まれることを話し、その個数を表すものが自然数であるというような説明をしました。

学生が興味を持ったのは、単位を何にするかによって「ひとつ」が決まるということ、たとえば、お米1粒とご飯1杯が同じ「ひとつ」であることや、国や文化によって自然数に0を含めたり、含めなかったりすることです。日本では建物は地上も地下も1階から始まるのに対して、たとえばフランスなどの国では地上は0階から始まり地下は－1階から始まるというようにたいへん数学的であり、そういうことからも自然数の定義が異なってくるということにも興味を示していました。

次に、自然数では足し算ができるが引き算ができないということや、資産－10万円などの負の表記ができないことの不便さを話し、自然数を引き算ができるように拡張したのが整数であるというように説明しました。そして、紀元前、紀元後のように 0 を中心に 2 方向考えることができる便利さをわかってもらいました。

さらに、整数においては分配する、分けるといった概念、つまり割り算ができないことを言い、整数を割り算ができるように拡張したのが有理数であると説明しました。 3 ÷ 2 をそのまま上下に書いた3/2が分数表記で、1.5と表したのが小数表記であり、分数と小数は違う数ではなくある有理数を表す表記方法の違いであるということが学生には理解しづらかったようです。このため、分数を小数にしたり小数を分数にしたりする練習を何問かさせました。有理数とは分数で表される数であるならば有理数という言葉は不要なのではないか、という質問もありました。

そして、有理数を小数で表したときは有限小数または循環無限小数になることを言い、それ以外の小数、つまり、循環しない無限小数を無理数と呼び、有理数と無理数を合わせて実数と呼ぶと説明しました。

学生のレポートには下記のようなことが書かれていました：

- 有理数や無理数の意味があいまいだったので、今日確認することができた。
- 複素数という数は初めて知った。
- わからない数学の授業とは別のベクトルでやっているのでおもしろかった。
- 循環無限小数を分数に直す方法には驚かされました。
- 自然数や整数など中学で学んだことなのに、あまり覚えてなくて新鮮な感じで学べた。国によって違うのがおもしろい。
- 数というのは自然数でも実際に存在するのではなくて、人間が作り出した抽象的概念であることを理解した。実数というと実際にある数みたいで変な気がする。
- 僕は19歳ですが、先生は僕が－何歳のときに生まれたのですか。よかったら整数で答えて下さい。

２．個数（基数）

ふたつの個数が等しいというのは両者の間に 1 対 1 対応があることであるということを自分で気付かせるために、教室にいる男の子の人数と女の子の人数はどちらが多いのか、または、等しいのかを一番簡単に調べる方法は何かということを考えてもらいました。何人かの学生に

聞いたら、ほとんどがそれぞれの人数を数えると答えました。そこで、男女ペアをつくってもらい、ひとりも余らなければ両者は同数で、男の子が余れば男の子の方が多くて、女の子が余れば女の子が多いと判断するのがもっとも早くて確実な方法ではないかというように提案し、個数が等しいというのは、ペアを過不足なくつくれることであるというように定義しました。

そして、そのように定義すると、(1、2)、(2、4)、(3、6)、…というペアを考えることによって、自然数の個数とその一部である偶数の個数が等しくなるということを説明し、同様に、自然数の個数も整数の個数も有理数の個数も実は等しいのであるということを紹介しました。

学生に無限集合の不思議さをわかってもらおうとしましたが、おもしろいと感じる学生より難しくてよくわからないという学生の方が多かったように思います。想像しづらい世界なので、屁理屈のように感じる学生もいたようです。

学生のレポートには下記のようなことが書かれていました：

- 有限と無限の言葉の意味がわからなかった。
- 無限と言われただけでよくわからなくなってしまう。
- 整数と自然数は圧倒的に整数の方が多いと思っていたが、同数であることがわかった。
- 今までなんとなくやっていた数学が実は奥が深いということがわかった。
- $1/2+1/4+1/8+1/16+\cdots=1$になるのが正方形の面積で示せるのは感動した。
  それなのに、$1/2+1/3+1/4+1/5+\cdots=\infty$なのは不思議だ。
- $1-1+1-1+1-1+1-1+\cdots$が計算順序によって0になったり1になったり$1/2$になったりするのがおもしろかった。
- $1-1/3+1/5-1/7+1/9-1/11+\cdots=\pi/4$とかは右辺が無理数なのに左辺は有理数しかない。
  どんな変な無理数でもふつうの有理数の無限個の足し算で書けるのですか？
- 無限だから計算できないと思っていたけど、考え方によっては計算できるのでびっくりした。

3．計算練習

その後の授業のために簡単な計算練習の時間を設けました。

まず、四則演算の入り混じった計算や（　）がついた計算の計算順序を説明し、簡単な整数の計算問題を何問かやらせましたが、半数以上の学生が間違える問題も少なくありませんでし

た。簡単な計算ミスが目立ち、計算順序を間違うことも多かったです。

次に、分数の割り算はどうして逆数をかけるのかということについて、ケーキを分配するなどの例を使って説明し、約分や通分の練習もしました。また、なぜ0で割ってはいけないかということも、2÷0、0÷0をそれぞれ☆、★と置いて、2＝0×☆をみたすような☆は存在しない、0＝0×★をみたすような★は何でもいいからであるというように具体的に説明しました。これらの理屈はほとんどの学生が納得したようでしたが、実際の分数の計算問題は多くの学生が間違えました。

こういった簡単な計算にも慣れていないせいで、数学を敬遠し難しく感じるという学生も多いということに気が付きました。なので、たとえばインド式の2けたの掛け算の暗算方法や割り算の暗算方法などを紹介し、まず計算に少し慣れてもらうようにしました。

学生のレポートには下記のようなことが書かれていました：

- 計算問題で順番がわからなくなるときがある。
- 簡単な計算を間違えて自分がいやになった。
- 計算が苦手だということがわかったのでもっと勉強したい。
- 計算などは努力すれば解けるが、応用的な思考ができない。
- 九九の9の段の10の位と1の位をたすと9になるのがおもしろかった。
- 2けたの掛け算がこんなに簡単にできる方法があるなんておどろいた。これから使います。

4．関数

関数とは何かから説明し、最終的には、1次関数、2次関数、3角関数、指数関数、対数関数などのグラフや、円や楕円などのグラフを描けるようになり、微分や積分の概念を理解することを目標としました。関数の定義においては、人にその母親を対応させるのや日本において既婚者にその配偶者を対応させるのは関数であるが、人にその子供を対応させるのやその友達を対応させるのは関数ではないというように、身近な例を使って説明しました。

学生は、平方根や3角比や対数などの定義を難しく感じたようです。たとえば、面積が2の正方形の1辺の長さや面積が1の正方形の対角線の長さは何かということを考えさせたりしながら、なるべく式を使わずに絵や図形を使って説明するように心がけました。

レポートを読むと、関数、平方根など中学校、高校で聞いたことのある数学の専門用語に対して難解なものであるという先入観を持っていて、そういった言葉を出すと敬遠して構えてし

まい、やっぱり難しいというように感じる傾向があるようです。それゆえに、絵や図形を使って概念を十分理解させたあと、言葉の定義をするようにしました。1次関数でも、傾きや切片などの言葉を出さず、具体的に点をプロットしてグラフを描いてもらって十分慣れてから、変化率などの言葉を出し、微分の概念などを少しでも理解してもらえるように努めました。

学生のレポートには下記のようなことが書かれていました：

- 関数は苦手です。平方完成がわからない。平方根は難しい。
- 直線や放物線のグラフは忘れていて難しかった。もう一度やってほしい。
- ルートのグラフは高校でやっていないので難しかった。
- 今まであいまいに理解していた関数がわかった。
- パラボラが放物線だということを知った。
- たしかにお好み焼きをカットするときは、度よりラジアンの方がわかりやすいと思いました。ちなみに僕は$\pi/3$ラジアンに切るのがちょうどいいと思います。
- フェルマーの最終定理は聞いたことあって難しそうと思っていたが、3平方の定理と似ていて簡単だと思った。2乗なら解がたくさんあるのに3乗以上は全くないのは不思議だ。存在しないことを証明する方が難しいというのはその通りのような気がした。
- 1回微分して＋で体重が増加していても、2回微分して－だったら増加率は減っていることなので安心していい。
- 先生の顔は黄金比ですか、白銀比ですか。
- デカルトは考えていることがよくわからない。なぜ天井に止まった蝿を見て座標平面が思いつくのだろう。

5．行列

まず、行列において、横の並びが行でたての並びが列であることを覚えさせるために、教室の椅子を行列の成分に見立てました。そして、第1行はどこか、（2、3）成分はどこかなどというような練習をしました。学生は、最前「列」が第1「行」というような日常語とのずれがあることが不思議そうでした。

行列の計算で、特に掛け算は難しいので、その意味を理解させることに時間を使いました。具体的に、各自動車ディーラーの車種別販売台数の表や車種と価格の表を行列とみなして、その積が意味するものは何かということを考えさせ、どうして行列の積を考える意義があるのかということをわかってもらいました。和についても、具体的な表同士の足し算を抽象化したも

のが行列の足し算であるというように説明し、行列が応用のために生まれたものであるということを強調しました。

また、行列の基本変形を使って連立1次方程式を解くときも、中学校で習ったはずの式変形による連立1次方程式の解き方を知らない、または忘れている学生もたくさんいるので、まずはそれを練習させてから、行列の基本変形を教えました。

学生のレポートには下記のようなことが書かれていました：

- 最前列という言い方はおかしいと思いました。行列のできるラーメン屋の行列って列だけですか。
- マトリックスが行列だとは知らなかった。
- 映画館の座席の例がわかりやすかった。これからはA列ではなくてA行と言います。
- 車には詳しくないのでよくわかりませんでした。
- 行列は実は現実の何かを表していて、どうして足したり掛けたりするのかがわかった。
- 連立方程式の解き方を忘れているのでわかりませんでした。
- 連立方程式が行列だけで解けるのはすごいと思った。

6．論理

論理的思考に慣れていない学生のために、身近な例を使って練習しました。例として使ったのが、自動車普通免許の学科試験の模擬問題で、たとえば、駐車余地6mという標識がある場所では、

「道路の幅が6m以上なければ、駐車をしてはいけない」

という文は正しいか、という問題です。これは、

「道路の幅が6m以上なければ、車の右側の幅は6m以上ない」

という事実と、駐車余地6mという標識がある場所では、

「車の右側の幅が6m以上なければ、駐車をしてはいけない」

という法令とから、3段論法によって正しいことを導いてほしいのですが、3段論法を説明したあとでも1割くらいの学生が問題の文は正しくないと解答していました。また、

「道路の曲がり角から5m以内の場所は、駐車禁止場所である」

という文は正しいか、という問題に対しても、

「道路の曲がり角から5m以内の場所は、駐停車禁止場所である」

という法令から、「駐車禁止であり、かつ、停車禁止である」のでもちろん「駐車禁止である」

のに、問題の文が正しくないと解答する学生が2割ほどいました。また、

「通行禁止の標識のある道路で、二輪車以外の自動車は通行してはならない」

という文は正しいか、という問題に対しても、

「通行禁止の標識のある道路で、すべての自動車は通行してはならない」

という法令から、もちろん二輪車以外の自動車も通行してはならないのに、問題の文が正しくないと解答する学生が半数近くいました。さらに、

「人間以外の動物は呼吸する」

という文が正しいということに納得ができなくて、授業後に質問に来る学生が数人いました。この文が正しくないとすると、

「人間以外の動物は呼吸しない」

ということになって、猫は呼吸しないことになると言ったらわかったようでした。

学生のレポートには下記のようなことが書かれていました：

- ふだん何気なく考えていることにも法則があるのだと気付いた。
- 日常にも数学がいっぱい出てくるんだなあと思った。言葉というのは論理なんだなあと思った。
- ややこしくて訳がわからなくなった。
- 自動車学校でおかしいと思っていたことが解決した。
- A だから C とすぐに思ったように思えるけど、実は A ならば B、B ならば C というような段階を踏んでいるのだということがわかった。
- ゲーデルの不完全性定理の本を買ったのでこれから読んでみます。
- こういう話はおもしろい。またやって下さい。

結論：

学生がもっとも納得しなかったことのひとつは、

$0.99999\cdots\cdots = 1$

が正しいということです。

$1 \div 3 = 0.33333\cdots\cdots$

は納得できるのに、両辺を3倍しただけで右辺と左辺の間にはどうしても隙間がある気がして不思議な感じがするという学生が多かったのです。

また、たとえば、うそつきのパラドックス、

「クレタ人はうそつきである」と言ったクレタ人

を紹介したり、

「この黒板に書いてあることはうそである」

と黒板に書いてみたりしましたが、こういった問題には興味を示してくれました。そして、学生の反応がもっともよかったのは、

「この文には 1 という数字が（　　）個ある」

の（　　）にはどんな数が入るか、という問題でした。

不思議に思ったり、自分の感覚に気付いたり、おもしろくて積極的に考えたいと思ったりするような、数学や論理的思考に興味を持つきっかけになるような問題を扱うと、学生は授業を真剣に受けるようになったと感じます。

最後に、理系選択ではなく数学が苦手である学生に対して、興味や関心を持たせることができた数学の授業内容を具体的にまとめます：

- インドで 0 という概念が発見されたこと。自然数に 0 を入れるか入れないかが国や文化によって異なること。
- 自然数と偶数が同数存在すること。
- $1/2+1/4+1/8+1/16+\cdots\cdots=1,$
- $1/2-1/4+1/6-1/8+\cdots\cdots=(1/2)\log 2,$

  $1-1/3+1/5-1/7+1/9-1/11+\cdots=\pi/4,$

  $1/1^2+1/2^2+1/3^2+1/4^2+\cdots=\pi^2/6$

  $1+1/1!+1/2!+1/3!+1/4!+\cdots=e$

  などの無限級数。
- インド式の 2 けたの掛け算の暗算方法や割り算の暗算方法
- 増加率の増加率という 2 階微分の概念。
- フェルマーの最終定理、リーマン予想など、一般に有名な数学の問題についての説明。
- 行列において、行と列の日常語との違い。
- 具体的な表を行列とみなしたときのその積が意味するものは何かということ。
- 連立 1 次方程式が行列の簡単な変形だけで解けるということ。
- 命題の真偽について多くの学生が勘違いしていることの指摘。
- パラドックスやゲーデルの不完全性定理など論理学の問題

また、理系選択ではなく数学が苦手である学生に対しての教養の数学の教授方法で、効果的であったものをまとめます：

・　数学の専門用語、難解な言葉はなるべく使わず、ゆっくり話すこと。
・　問題を解かせたり計算させたりなど、学生が自分でペンをもって考える時間をつくること。
・　理由や意味を理解しないまま、ただ解くだけの問題演習はさせないこと。
・　式変形などで過程を省略しないこと。
・　日常的な例や絵や図形を使って十分概念を説明してから定義や数式を出すこと。
・　学生が書く質問、意見、要望、感想を考慮し、次の授業でなるべく取り入れること。

今学期までに感じたことは以上ですが、毎学期、またクラスによっても学生の様子や理解度は違ったりしますので、そのクラスの学生をよく観察しながら柔軟に対応し、なるべく多くの学生にとっての有意義でおもしろい授業内容をさがすように努めていくことが大切だと考えています。

参考文献

［1］「科学と方法―改訳」、ポアンカレ著 吉田洋一訳、岩波文庫（1953年）
［2］「高木貞治の数学教育論」、上垣渉、数学教育史研究第3号、19–23（2003年）

道元禅師伝記史料集成（十―下）

吉田道興

外題（撰者）	永平祖師年譜偈　面山瑞方	永平祖師贊　全　面山瑞方	高祖禅師和讃　万仞道坦	永平高祖行実紀年略　玄透即中	永平和讃
内題（成立、刊写）	享保二年撰、延享元年㊞	享保十七年撰、弘化四年㊞	明和六年㊞	天明八年㊞	弘化四年㊞
禅宗の分派 二支五派 二十四流					
［序］		永平祖師贊并序 竊以、瞬目破顔之宗、嚢括一代時教而無餘蘊矣。嫡嫡相承、指齺齵老僧、以爲竺尾支頭。六傳之後、分脈於曹溪而二支五派。流入日國、則爲二十四流也。其中有系未到三四世而絶者。或有譜傳十餘世而斷者。或有雖謂系譜不斷、其衰也同			

南遊東渡の三家

第一栄西

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
	斷者。或有匪但不衰 絶而雲仍浩繁、法脈綿長、 同宮壤期悠久者。太凡 爲師者之於爲資者也。 丁其叮囑則豈不謂向 後接得好兒孫嗣續吾宗 莫令斷絶哉。爲其資 者之於爲其資者、亦皆 如是。不欲法脈紹續 免斷佛種之罪者、 未之有也。然、而其宗脈、 或有斷續興衰、而不期 然、而然者、一是因縁之 所係、而非人情之所卜 度也。雖然亦誤執此見 以自緩焉、則恐塞後學 守成之路。苟爲佛子、懷 家系相續之志者、豈宜 不擇慕其跡之可慕、而 自勵哉。 夫南遊東渡傳禪者惟多、 而今揀其尤者三家、以 論其跡乎。第一千光、第 二吾祖道元、第三聖一也。 第一按千光禪師行狀、謂			

第二道元

師以二文治三年一再入宋、得二禪於天台萬年敞虚菴一。歸朝之後、開二聖福寺於筑之博多一。尋將軍頼家、建二建仁寺於洛東一。後將軍實朝、營二壽福寺於鎌倉一。皆以レ師爲二之開山一。又按二東鑑一、謂建保元年六月二日、壽福寺長老榮西、自二京都一參著。日來所レ望二大師號一。同三日在二議定一。存生大師號事、依レ無二先蹤一、同四日、被レ任二權僧正一。第二按二我祖行錄一、謂祖以二貞慶二年一入宋、得二法於天童淨禪師一。曾在二天童一時、淨祖以二侍者一請レ之乃辭。歸東亦結二菴深草一而寂寥。及下檀越創二興聖一而縉紳歸投、車馬輻湊、則逃而埋二跡於越之深山一。鎌倉副元帥、建二伽藍一請之不レ顧。且寄施二齋田一不レ受。後嵯峨上皇、賜二紫衣徽號一、辭之莫レ與。第三按二聖一國師年譜一、謂師以二嘉禎元年一入宋。得二法於徑山範無準一。

第三弁円

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
	師初登二徑山一。準一見器許。未二浹旬一乃充二侍者一。準常不レ稱二侍者一、只〳〵呼二爾老一。臨二其辭一、準自大書二敕賜萬年崇福禪寺八字一囑曰、汝最初住院、以レ是爲レ額。歸東之後、開二筑之崇福・承天二官刹一。果應二其讖一。又藤大相國、立二大伽藍於洛東一則洪基於東大興福一。故名二東福一。又親書二聖一和尚四字一授レ之。于レ時國政自二相國一出。故與二此號一。蓋擬下唐代宗賜二徑山法欽國一之例上也。又　寛元上皇、自持二黃金扇一與レ師。帝者之手授、古來寡レ儔。夫千光受二兩將軍之供養一、建二三大刹於都會一。既任二權律師一、而更乞二大師徽號一、而昇二權僧正一。聖一充二　徑山之侍者一、而顯二赫榮稱於中華一。預得二敕寺識於無準一、而果如二其言一。且聳二東福層傑於洛東一而覆二壓諸大			

三師鼎足

釈尊の教誡

刹於平安城。更受德號於相國、得金扇於　上皇。此二師之盛譽大業也、皆古今人之所不及而一代之堪羨者　也。我祖則反之初入宋辭三應於天童。歸朝之後、避朱門於洛南而入越山不應時賴建伽藍之請。終辭紫衣敕號以倣楷淨之祖風。由此觀之、二師之所好而榮則我祖之所惡而辱則二師之所好而榮也。我祖之所惡而辱、則也。嗚呼、三師之傳禪於日國而闢化也、恰如鼎足並立、而其出處行藏之跡。二師之與吾祖相背　之一何似冰炭不同器哉。然今三師去世、殆乎五百年而其宗脈法派之盛衰斷續不同、亦如昔時其所出處行藏之相背也。嗚呼何爲如是耶。按佛告舍利弗、昔迦葉佛、預記我言、釋迦牟尼佛、多受供養故、法當疾滅。舍利弗、

	永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
如浄の教誡		我法實以多供養故當疾滅。夫常在靈山之熾然說、不可涉起滅興廢、而託乎受多供養、以垂鑑誡於末法、修少欲知足之人、誰不圭復金口哉。我祖以之。實其厚盛譽洪福於孤身、而薄其末裔於千歳、何若固守儉於孤身而貽其孫謀以有令法久住之巨益哉。昔時我祖、辭淨翁時、翁告云、莫近國王大臣、莫居城邑聚落。只須住深山幽谷、接得一箇半箇嗣續佛祖慧命、起宗祖家風矣。是豈但淨翁之言而已哉。佛應妙吉祥之請說後惡世擧揚佛知見者親近處云、不親近國王・王子・大臣・官長。又西印土雲自在王、請迦毗摩羅尊者於宮中。尊者曰、如來有教沙門不得親近國王大臣權勢之家。王曰、今我城			
迦毘摩羅尊者の教誡					

華亭德誠の教誡

北有二大山石窟一。師可レ禪二寂于此一否。尊者時諾、即入二彼山一。華亭德誠禪師、囑二夾山一亦復此旨耳。按我祖言云、雲水兄弟、遙辭二家鄉一、永拋二親族一、名利是非、總不二相管一。細細行履、條條威儀、雖レ須二勤學一、先應三當學二佛祖一件事一。謂居山也。昔有レ僧。問二雲居弘覺大師一云、僧家畢竟如何。大師云、居山好。僧禮拜起。大師云、爾作麼生。僧云、僧家畢竟、於二善惡生死逆順境界一、其心如二山之不一レ動。大師乃打一棒云、辜二負先聖一、喪二吾兒孫一。大師乃問二傍僧一。爾作麼生會。其僧禮拜起云、僧家畢竟居レ山。眼不レ觀二玄黃之色一。耳不レ聞二絲竹之聲一。大師云、辜二負先聖一喪二吾兒孫一。所以諸人先聖古佛之所二願樂一、唯是居山好。諸人既得二居山一。直須下與二古佛曩祖一相見上。雖レ未レ得二相見一、應三當慶二快居山

雲居弘覺の教誡

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
	好一也。不退不轉保二任此事。乃一條之辨道也。世尊言、山林睡眠佛歡喜。聚落精進、佛不レ喜。所以鷲嶺、鷄足、嵩山、黄梅、曹溪、南嶽、青原、石頭、藥山、雲巖、洞山、雲居、芙蓉、雪竇、太白諸大祖師、皆以居レ山而已。況乎俗猶有道之士、皆隱二深山一也。箕山、南山、首陽、崆峒等之勝躅也。卽今若有三道心一之人者、須レ隱二居山谷一也。本無二道心一、貪名愛利癡人、不レ能レ居レ山也。汝等諸人、既得二居山一。如何不レ修。諸人未レ得レ辜二負先聖一、不レ喪二我兒孫一。切莫レ忽二諸居山好一也。縱愚須レ居二深山一也。愚而居二聚落一增二其失一。縱賢須レ居二深山一也。賢而居二聚落一損二其德一。永平壯齡、訪二道於西海之西一、潦倒占二居於北山之北一。雖二不肖一			

面山の感懐

慕古蹤也。不論賢不肖、不択利鈍機、須居深山也。云云。

祖山の幽邃

余曾数回登祖山、而歴観其境致也、環屏之千峰高聳層巓而峥嶸。縈帯之萬溪、遠潔霊源而流灌。片片之雲、凝乎隴上、兀兀之石、眠乎崖下。青蘿長纏喬樹之頂、緑苔深封古巖之角。乃至、奇花藥草、珍禽異獸、實不是凡俗之境界者也。至論其山深而氣候之與世不同則暮春之霞、群花未発、晩夏之暑、積雪猶殘。縱雖其曰鷲嶺嵩山芙蓉太白、亦可以讓其岑崟幽邃矣。嗚呼可貴哉、其道也。嗚呼可慕哉、其跡也。昔在若敎吾祖永居洛南、則宗風豈不與京洛之古禪刹同其盛衰耶。又令吾祖往住鎌倉、則豈不與相陽之古叢林同其興廢哉。又今日之遠孫、如我輩者、豈有得親登

永平祖師年譜偈	
永平祖師贊	祖山、見ニ如レ是岑崟幽邃一而感中其祖恩之廣兮大兮深兮厚兮、不可思議、不可稱量上哉。古謂、皮之不レ存、毛將安傳。今日二萬有餘之枝山子刹、充ニ滿六十餘州一、亦將下以屬中烏有上乎。嗚呼居山好、居山好。吾祖靈根深密之家風。夫如レ是也。他家之所ニ以不レ同也。然兮我輩、苟稱ニ其遠孫一、而今日行ニ住焉、坐三臥焉、暖四衣焉、飽五食焉、於三高祖衣鉢之中一者、却忘ニ祖恩之出自一而傲ニ風儀於他派一、或嫌ニ山林一而好ニ聚落一、或以ニ官榮一自高、或親ニ厚媟三慢於公侯之家一、得ニ其涕唾一、則重ニ之金玉一、或專著ニ斑爛之法服一、夸ニ耀愚俗一而貪ニ供養一、以至傲ニ貢高一、恣ニ自大一、求レ名爭レ利而不レ知レ感下祖師爲ニ兒孫一之深密之大慈大悲上、則何異ニ裸蟲一哉。惟恐
高祖禅師和讃	
永平高祖行実紀年略	
永平和讃	

日本禅の霊源
悟本大師の再来

二十四流日本禅　唯有二洞水一浪拍レ天
今爲下掬二其枝派一者上　欲レ示二霊源一綴レ言宣

得二高祖大寂定中之冥罰一而宗風漸漸衰殘、法運日日式微一而後來他派之視二吾宗一亦如三今吾宗之視二他派一而有識戮笑之波、覃及二于高祖一也。實可レ畏。由レ此觀レ之、綿二長于高祖法壽一而仰二之萬世一亦短二促于一代一而忽宗風拂レ地偏在二于今日雲仍之用心進退如何一耳。嗚呼可レ不下恐二懼乎日一而戒中慎乎時時上哉。因感二祖恩一之血涙溢二于眼中一而漣漣。不レ覺說二此偈一奉レ贊云レ爾偈言

日本高祖元古佛　其行實尋ヌレバ　悟本禪師ノ再来ト
如浄禪師夢ニ見　六十餘州ノハテ迄　洞家ノ法弘メ玉フ

歸命頂禮元古佛　悟本大師の再来と　如浄禪師の夢に見て　我國洞下の宗祖也

	永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
出自 誕生	村上九世源氏裔　通親二男 号二希玄一　正治庚申産二禁闕一　眼有二重瞳一儀容奸	我祖出二華胄一	古郷ハ平安城裏　村上天王九世尊　源氏ノ苗裔通親二男ト出現玉ヘリ　母九條ノ関白之　基房公之娘ナリ　已ニ託胎マシ〳〵テ　十三月ヲ過ヌレバ　現光室ニミチ〳〵テ　正治二年ニ誕生シ　其名ヲ希玄名付リ　眼重瞳有ケレバ　非凡ノ兒トハ相ケル	京兆誕生 正治二年庚申正月二日、誕二于京兆久我家。父者内大臣通親、母者九條攝政基房女也。	村上天皇九世の孫　久我の大臣通親の　二男と出現し玉へり　母ハ攝政基房の　御女にてましませり　時に虚空に聲有て　大聖人としらせけり　正治二年に降誕し　眼に重瞳ありしとぞ
通親薨去			其年冬十月ニワ　父ノ通親薨玉フ		
幼少時の俊才 振り 母の死	四歳誦二李嶠百詠一　七歳讀二毛詩左傳一　八歳喪レ母知二如幻一　九歳始閲二倶舎論一		四歳時至リテハ　李嶠ガ百詠讀玉フ　毛詩左傳ヨミ暁シ　師匠モイラズ讀暁スアレドモ其身不幸テ　八ノ年ニハ母終リ　世間無常ノ理ヲ観シ　出家求法望アリ　九歳ノ時成リヌレバ　倶舎論等モ讀玉フ　若人其ヲ尋ヌレバ　其辨懸河ノ如ナリ		四五六七は儒を学び　八ツて母の喪に逢ふて　つらく無常の理を悟り　出家求法を望まるゝ
猶子要請			母父ナル基房モ　世ニハマ		御舅攝政　師家は　猶子と

叡山に出家

十三歳春潜出レ洛　尋二舅一
良顯一上二叡山一

染レ衣投二佛宗一　叡岑攀二剛
岌一

レナル抜群ト　思テ時〳〵
語ニハ　吾子ナリテ其後ヲ
摂家ノ重職継セント　造バ
更聞入レバ

十三歳ノ春夜ニ　京ヲヒソ
カニ立出テ　舅ノ良顯アイ尋
子　此叡山ソ登ケル

叡嶽薙染

建暦二年壬申春、謁二叡山ノ
良觀法師一、昭告ニ出塵之
志一。觀者師之舅氏也。

出家の素意

良顯已驚キテ　由來委ク問
ケレバ　母臨終遺言ニ　其
方出家窮ト也テ　二人ノ親
ノ菩提ヲバ　ヨク〳〵予申
セヨト　聞ヨリ肝銘ズレバ
髪ヲオロシ玉フベシ

剃髪・受戒

建保改暦四月九　薙染納戒
於二横川一　是時行年甫十四
首楞嚴院師二公圓一

建保元年癸酉四月九日、
就ニ横川首楞嚴院公圓僧
正一、剃髪受戒。時師齒甫
十又四。

明レバ建保改元ノ　卯月九
日之吉日ニ　三塔横川ノ其
内　楞嚴院参詣ヘシ　天台
座主ノ公円ヲ　頼剃髪事了
ル

公胤・栄西に参見

翌春見二三井公胤一　蒙レ教
参二建仁榮西一

御井漱二沈浴一　顯密日畿飽

翌春三井ノ公因ニ　法身自
性理問ヱバ　禪家宗師尋ヨ
ト　即衣ヲ更改宗シ　臨濟
宗ノ玄理ヲバ　栄西禪師ニ

参見知識

同　二年甲戌春、見二三井ノ
公胤一。又依二胤ノ誨一参二建仁ノ
西和尚一。

建保卯月の九日に　公圓座
主を師となして　御ぐしを
おろし戒を受

舅の良観驚いて　ことの
故よし問るれば　母の菩提
に出家すと　聞て感涙催
ほさる

なして重職を　續せむ事
をはかれども　更に耳にも
聞入ず

十三歳の春の夜に　ひそか
に都を忍び出　比叡山にぞ
のぼらるゝ

御年十六論議あり　叡山三
井に法性の　道理を究盡
さねば　教によりて建仁の
營西禪師に参ぜらる

	永平祖師年譜偈	永平祖師賛	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
栄西遷化 明全に師事	翌秋七月西示寂　亦事ニ明全ニ歴ニ九年一　渉ニ獵大藏一究ニ顯密一　且稟ニ禪戒一自ニ明全一		相尋　建仁寺参玉フ是時師ノ歳十四ニテ　耆宿老師モ皆下ル 翌年秋ノ七月ニ　栄西禪師ハ遷化ニテ　幸嗣法明全ヲ師トシテ九年ヲ經玉リ　其内一代藏ヲ　不残拜覧マシ〳〵テ	同　三年乙亥秋七月七日、西示寂。師即、師ニ事西嗣明全和尚ニ依止ル九年也。	續いて佛樹を師と頼み精修に九歳を經玉へり
大蔵を渉猟す			渉獵大藏 後ニ建保乙寅ニ至ニ貞應二年癸未一。在ニ建仁一周ニ覽ル大藏ニ再次。又從ニ明全一重受ニ禪門菩薩六戒一。		廿四歳の春のころ　師と諸共に遥なる　宋土へ渡り明州の　界に舩を撃せて五山の風儀を伺へる
入宋	貞應二春二十四　求ニ法ヲ大宋ニ跨ル舩舷ニ	遠登ニ太白峰ニ	入宋求法 貞應二年癸未、師年二十有四、隨ニ明全一入ニ宋土一。即南宋嘉定十六年也。	同秋七月、登ニ天童一見ニ派無際一、依附二載。嘉禄元年乙酉、即南宋害慶改元也。	秋七月に天童の　無際禪師に相まみえ
天童山の無際に相見	嘉定十六秋七月　相ニ見ニ無際ニ露ス風顛ヲ一		廿四歳ノ春ノ日ニ　商人舩ニ便舩シ　大宋國ニ入玉フ 夏ハ唐土ノ國々ヲ　アナタコナタト徘徊シ　秋七月ニ天重ノ　無際禪師ニ見玉フ		

「新到列位」問題

更糺ニ戒次一得ニ勅裁一　從レ是雄名徧ニ震丹一

和國邊僻ノ僧ナルト　臘次モ不糺師坐ヲバ　新戒並ニ列タリ　國ニハ大小有トテモ　佛法已無ニナレバ　僧臘何國違マジ　戒臘並ト請玉フ　汝國ヨリ來ルモノ傳教弘法栄西モ　先々カクノ如クニテ　相スミ來ル事ゾカシ　夫レヨリ禁裏ヱ表モンシ　三度復上玉フ　叡感已無私ナレバ　和僧ノ言道理ナリ　戒次正定ヨト詔下リケル　從是師名高レテ　四百餘州カクレナシ

諸方遊歴

次登ニ徑山一見ニ如琰一　又訪ニ蕭老一到ニ平田一　五家宗風歸ニ掌握一　勘ニ破杜撰一欲ニ東旋一

夫レヨリ諸方扁参　アラユル知識ヲ訪テ　五家玄理ヲ究ツ、　大唐國裡禪ミナ此掌握ニ帰ヌレバ　已東歸ヲ促セバ　正法流通スアヤウケン　ハタシテ道ヨリ便得　天童山又カヱル

如浄に相見得法

時値ニ老璡一見ニ浄祖一　面授法門絶ニ弟筌一　即是寶慶乙酉歳　五月朔日天童巔　重有ニ商量返躑勢一　身心脱落

不レ異ニ磁吸レ鐵　因縁契ニ浄翁一　身心忽脱落　無ニ人羅ニ機鋒一

其コロ無際迂化シテ　如浄禪師ソ住持タリ　宝慶乙酉年　五月二日入室シ　彼是問答相濟テ　其後坐禪ヲリ

天童得法

同年夏五月、再上ニ天童一見ニ浄和尚一。師一日坐次、聞ニ浄呼ニ傍僧坐睡一豁然

法臘序あらざれば　寧宗帝に上表し　終に戒次をたゞさるゝ

夫より諸方を参歴し　老璡羅漢の教にて

寶慶元年仲の夏　無際の後席天童の　如浄禪師に参見し　機縁に契ひ道を得て　室中相受事をはる

	永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
江西弾虎 「一夜碧巖」 韋将軍の帰国 勧請 稲荷神の解毒	鼻孔穿　其秋九月十八日 傳戒嗣法契二機縁一 偶〳〵遊二江西一伏二猛虎一　韋天勸令二故國還一　夜得二碧巖一欲二繕寫一　白山助レ毫畢レ功遄		フシニ　隣僧ヱノ垂誡ヲ 聞テ即大悟シテ　嗣法傳戒 事了ル 有時江西行脚之日　荒野邊 宿スレバ　一ノ虎ゾ馳来ル 持タル拄杖ヲ擲ケレバ　飛 龍ト化テ戦イケル　虎ハ畏 テ退散ス　今虎ハ子ノ拄杖 トハ　是ヲ傳現ニ在　暁日 童子来テ　深観ニ申スヨウ 故郷ヱ早帰ルベシ　祖道ヲ 弘衆ヲ度セヨ　ココニ留事 ナカレ　コレハ誰カ問イケ レバ　韋將軍トソ答ケル 異國渡リテ五年月	大悟。浄印以二脱落一。同秋 九月十八日、傳戒嗣法已畢 師年二十六。 同二年丙戌、遊二歴江西一。 時有二虎伏神現等之奇異一。	また江西に行脚して　猛 虎の難に杖を擲　龍頭と 化して是を追ふ　稲荷の神 は解毒にて　途中の病難 救わるゝ　韋馱將軍は現 れて　帰郷をはやくと勧ら る
如浄に告暇 帰朝時に大 権・観音の応 現	寶慶三年亥臘月　告二暇淨 祖一催二歸船一　大權現レ形 隨二錦纜一　觀音應レ感乘二瑞 蓮一		宝慶三年亥臘月　暇ヲ如浄 ニ告ケレバ　芙蓉ノ法衣ヲ 附玉フ　城邑聚落住スナヨ 深山岩間ニ居ベシト　種々 教訓多カリキ　其日モ已ニ 暮裡ニ　碧岩録ヲ見玉イテ 写ノ國ニ帰ラント　筆ヲ取 テ夜半過　白山助筆ヲナサ	航海歸朝 安貞元年丁亥冬十二月、 辞二天童一、此夜得二碧岩録一 謄寫。白山助毫。速理二歸 楫一。	寶慶　三年臘月に　師を辞 し秘訣を受玉ふ　碧巖書写 の其夜半は　白山助筆し全 尾せり　纜といて南海に 風波の難も觀世音　顯應 あれば恙なく

帰朝	安貞二春二十九　卸レ帆ヲ肥後河尻（カハシリノ）邊		ルレバ　程ナク全部書了ル 是ヲ一夜碧岩ト　傳テ今ハ 賀加（ママ）ノ國　椙樹林ニソ鎮護 セリ　夜シノ〳〵メ之帆ヲ 上テ　海上寒雪ソフル　折 節和上ノ船タヱ　異ナル人 之見ケルカ　大現（ママ）菩薩ト名 ノリ来テ　大法守護之爲ト テ　同日本渡リ玉フ　俄ニ 海上浪高ク　船モアヤウク 見ヱニケル　意ヲ静身ヲ正 シ　坐禪ノシト子ニ坐シ玉 フ　普門品ヲソ誦シ玉フ 忽補陀観音之　出現ナサレ テ其後ハ　風モ静ニ恙ナシ 是ヲ写シテ一葉ノ　観音ト ソ名ツケタリ	
建仁寺寓居	往寓（チノ）ニ建仁（ニ）三歳（ノ）后		師ノ歳年○明レバ廿九ノ　安 貞二年初春ニ　肥後州（ママ）テテ 帆ヲ卸ス 夫ヨリ都（ノ）建仁ニ　行テ三年 歴テ後ニ	同　二年戊子春正月十八 日、着二博多（ノ）之岸（ニ）一。
				建仁寓居 後二安貞二年戊子（ノ）春一至二寛 喜二年庚寅（ノ）冬一、綿二歴（スルノ）三 載（ヲ）之際、寓二于建仁寺一。
				肥後川尻（ひごかはじり）に帆（ほ）をおろし 直（すぐ）に都（みやこ）の建仁（けんにん）へ　行（ゆき）て三年（とせ） を經給（たま）へり

	永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
深草閑居	閑居聽レ雨深草阡	歸國藏ニ深草一　緇素奈影ノ如ニ從	柴之庵ヲ深草ニ　結テ榻ヲ移シ玉フ	深草閑居 寛喜二年庚寅冬、移ニ榻ヲ於深草極樂寺別院安養院一。 同　三年辛卯仲秋、乃撰ニ辨道話一。師行年三十又二。	閑居の菴を深草に　結びて聽る夜雨の聲
興聖寺開創	天福改歳剏ニ興聖一　開堂一住已十年　緇白輻輳百千萬由良法燈亦鑽研	因開ニ寶林寺一　嫌レ受ニ官迎逢一	天福改元初春ニ　宇治之懸へ駕ヲ住テ　興聖禪寺開山ト　ナリテ十年住メ玉フ 正法流通ノ時ナレバ　山川海岳コゾリ来テ　問法伺参ノ其中ニ　公卿ノ太夫之馬車　門ニハ市ヲゾナシニケリ	興聖艸創 天福元年癸巳春、弘誓院正覺禪尼等、剏ニ興聖寶林寺一請レ師爲ニ開山第一祖一。 嘉定二年丙申冬十月十五日、開堂祝釐一住十霜。	嘉定三年四月より　興聖禪師を開かれて　門には公卿の馬車　喧しきを忍びつゝ　弘法十とせに満給ふ
入越 大仏寺開創 永平寺と改称	忽避ニ洛南朱紫族一　遙覓ニ深山一隱ニ越前一　山號ニ吉祥一規ト乃祖一　寺本ニ漢曆ニ名ニ永平一	終棄入ニ越岳一　安ニ禪於蒙茸一　規則學ニ太白一　枯淡傚ニ芙蓉一	如浄禪師ノ垂誡ヲ　思イツラ子テ夫ヨリモ　深山北越ノ國　志比イノ里ニ駕ヲ移シ　永平禪師ヲ開闢シ　山禪千祇出現シ	大佛開闢 寛元改元癸卯秋七月十六日、出ニ城州一到ニ越之比一。 同　二年甲辰、雲州刺史、建ニ大佛寺一請レ師涖レ之、 同　三年丙午、改ニ大佛寺一爲ニ永平寺一。	波多野義重勧むれば　寛元元年七月に　越の國にぞ下向ある　同じく二年大佛寺　建立あれば草も木も　吉祥瑞を現はせり 説法の日は天花降　布薩に彩雲たな引り
後嵯峨帝の下賜	紫衣黃綸束ニ高閣一　獨著ニ皂服一傚ニ古賢一	不レ受ニ上皇敕一　何顧ニ元帥ノ供一　勢利比ニ泥糞一　名位	人王八十七代ノ　後嵯峨之聞シメシ　紫衣ト徽号ヲ賜	（後記） 同　三年丙午、改ニ大佛寺一爲ニ永平寺一。	（後記） 説法の日は天花降　布薩に彩雲たな引り

蘭溪との交信

蘭溪西來仰ニ高德一　先奉二書信一竭二恭虔一

齊二鞠凶一

シガ　高臺ニ束子置キ　一生黒衣ヲ着シ玉フ　實古賢ノ風儀也

鎌倉下向

時頼建レ寺請不レ就　却擯二明老一揮二熱舉一

玄明擯罰

師ノ歳四十八。秋　將軍時頼師ヲ招キ　明暮法ヲ相尋子　菩薩戒ヲモ受了ル　建長禪師ヲ建立シ　住持請トシタガハズ　秋ヨリ春迄滞留シ　本志比ヱソ帰玉フ　元明首座ト申人ト　アトヨリ帰ル幸便ニ　時頼賜ヲ朱印ヲバ　受テ喜フ其事ヲ聞テ則擯出シ　其身ノ居ン床之下　七尺鋤テ土ヲノケ利欲ノ穢ト去リ玉フ

鎌倉延請

寶治元年丁未秋八月三日、得二時頼請一赴二鎌倉一。居半載餘。時頼執二弟子禮一受二菩薩戒一。營二大禪苑一雖レ請レ師、師不レ肯レ就。同二年戊申春三月十三日、卒還レ山。

鎌倉將軍時頼は　請して戒法受らるゝ　御朱印たまへど固く辞し　かへりて首座を擯て　床の地七尺　捨たまふ

「血脈度霊」

婦魂受レ戒離二苦域一

又有妬之深婦ノ　死毒蛇ト也リケルガ　人民多ナヤマサル　血脈池中ニ投ケレバ　苦域ヲ出テ生天ス

僧堂異香

また僧堂のうち外へ　異香薫ずる事ありき

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
羅漢応現 應眞依レ請現二齋筵一		宝治三年夏五月　羅漢供會ヲ設レバ　松樹ノ枝降臨シ現住世間ヲアラハセリ　其木今ニ猶ヲ有リテ　羅漢松トテ栄ヱケリ		羅漢供養に木像も　画像も一時に光あり
後嵯峨帝の下賜 （前記）	（前記）	（前記）	賜紫徽號 建長元年巳酉、後嵯峨帝、賜二紫衣徽號一。師述二謝偈一云、永平雖二山淺一、敕命重重却被二猿鶴笑一、紫衣老翁。	後嵯峨の帝　聞し召　紫衣を賜ふぞかしこしな
不思議鐘声				霊山院の奥にては　不思議に鐘の聲聞ゆ
正法眼蔵九十五巻				正法眼蔵涅槃心　九十五巻に止りて
微疾		師ノ年正ク五十三　不安ノ床ニツキ玉フ　病悩次第ニヨモカリキ　顔貌更ニウツクシ、		建長　四年の夏の頃　微恙にかゝらせ玉ふより　はやく涅槃としろし召
遺教経開示 五十三歳講二遺教一　八大人		如來ノ儀戒準テヤ　遺教經	講遺教經	如来の儀式に随ひて　遺教

入洛

覺慕ニ金仙一

ヲ講説シ　意ハ在世モ程アラジ

同　四年壬子夏、講ニ遺教經一。預メ知ニ泥洹時至一。遠擬ニ如来最後之垂誨一也。

経を開示ある　王公親族情あれば　孤雲和尚へ寺を附し　都へ御駕を發せらるかどでせる身の木の免山

中秋和歌

建長五年五十四　罹レ痾赴レ洛不ニ終痊一

公卿大臣日々ニ　使ヲ越シテ迎ラル　八月二日ノ露路蹈テ都ヱ出玉フ

西の向院覺念が　館に竹椅を居られて　その望月の御詠には　志ぼらぬ袖もなかりけり　上皇醫官に勅せらる　診候ありしぞ目出たけれ

中秋和歌堪ニ感泣一

十五月見ノ和歌ミナ　唱ヌ人ゾナカリケリ　和歌ノ意ヲ吟スレバ　モハヤ迂化モセマルナリ　拜セシ者ヲト馳来ル　其人々ゾ夥シ　師ハ猶ヲ常ノ如クニテ　機々ニ應メ法ヲ演フ

遷化

二十八日化方遷

建長五年五十四之　八月廿八日ニ　沐浴浄衣ヲ調テ大寂定ニ帰シ玉フ　龕ヲバ宇治ノ宝林ニ　移メ三日留ラル

示現圓寂

同　五年癸丑夏、示ニ微恙一。讓ニ席於孤雲装一。赴ニ招于洛陽一。館ニ西洞院一而調養。帝使ニ宦醫一診レ病對晤如ニ平居一。八月廿八日半夜、沐浴整衣書レ偈畢。溘然坐化。

建長　五年の丑の秋　八月二十八日に　沐浴浄衣調へて　筆を取て偈を遺し御年五十四歳にて　涅槃の寂　土に帰し玉ふ

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
茶毘 非公火浴得二舎利一　承陽菴 内塔基堅		茶毘ハ則舎利傳テ　永平禪師ヘ塔ヲ建　承陽庵トソ名付タリ		道俗皈依の輩や　五十二類もみな共に　涙に加茂の水増り　茶毘は東山赤筑地舎利を納て駕を装ひ　越の深山の雲わけて　三日三夜にねもごろに　如在の供養ぞ尊けれ　塔廟高く築たて承陽庵とぞ号しける
徳風(一) 倏忽浮世不二暫止一　鳥飛兎走将二半千一　雲仍匡レ徒領レ衆者　籌量　二萬四千員　雖下中知二大恩一者少上家訓攀レ例自綿綿　最後一偈今此記　億劫心銘亦骨鐫	(後記)	浮世ハ夢ノ如クニテ　寛保二年已ニ至リ　四百九十七年ト　流ヲ汲テ衆ヲ河　一派ノ兒孫ガソウレバ　洹河沙數ニ餘リケル　道風四海ニ溢シハ　家訓ノ質素所以カシ　唐土日本名ヲ振フ　大師德誼今ココニ　紙筆ニイカテ尽シケン　只アラマシヲ述了ル		(後記)
遺偈 五十四年　照二第一天一 打二箇跻跳一　觸二破大千一 咦　渾身無二著處一　活陷二黄泉一			偈曰、五十四年、照二第一天一、打二個跻跳一、觸二破大千一、咦、渾身無二着處一生陷二黄泉一。　畧年譜畢	

徳風(二)

（前記）

雲居山好　堪獨繼其
蹤　傳禪吾國者　幾人
策其功　賴家仰葉上
建仁剏洛東　尋營相壽
福　見信實朝公　自
乞大師署　得權僧正封
藤相稱聖一　慧日聳梵
宮　承天及崇福　官刹最
顒顒　上皇賜金扇　聲響
鳴洪鐘　初見徑山日
浹旬　充大空　二師大知
識　誰敢爭英雄　星霜
過五百　兒孫自然窮　鐘
鼓忘砰磕　檀護欠精豐
堂上不支雨　室內難防
風　誼譁有酒盞　閑寂
事煙筒　菩提樹下客
不拾其實紅　天津橋上
晩　無人愛錦楓　前佛
言　後佛　多供法不
隆　末法宜藻鑑　聞
此勿　佯聾　嗚呼吾祖也
天質具開聰　七處得平
滿　兩光列重瞳　一聞
千悟質　交衆在天童
錐末難藏處　擇木揀器
充　獨專埋其德　辭讓

（前記）

その源の谷ふかく　すめ
るながれの派を別ち　舩師
となりて波を揚　法炬とな
りて夜を照し　六十餘州の
其中に　勝法幢地を数ふ
れば　はや三萬に程近し
淳密質素の風に帰し　情
識意路の迹をたち　不思
量底を思量せよ　機境の
窠旧に拘礙せず　證上の
修を要すべし　知恩報恩い
く人ぞ　南無永平元古佛

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
	守謙沖　其志期遠大 不苟開智籠　及其歸 我國　未敢求幃幪　深 山與幽谷　慕彼在崆 峒　越嶽其岌嶪　不可 讓泰嵩　周圍五十里　羣 峰聳蒼穹　虎跑名懸瀑 巉巖號玲瓏　傘峰雨降注 劒嶺風磨礱　流水鳴天鼓 松風奏曩桐　洗清凡骨 潔　消落俗氣融　激揚 單傳法　竭力大擊蒙 經行及端坐　雲仍誰繼踵 南北龍與象　悉皆伏德 攻　自有達磨後　誰 比與此鴻　二萬四千寺 悉飯一鉢中　勿謂如 鼎足　其德迥不同　俚 言任教拙　我傲我佛 崇			釋迦歎偈 南無本師釋迦尊　娑婆往來 八千邉　本誓願故現穢土 四十九年無説説　拈花微笑

「釈迦歎偈」

奥書

享保二年丁酉八月二十八
日遠孫相州老梅菴沙門面
山瑞方謹撰
前年師在海東之日
訓誨隨徒述此年譜
偈其後叢林往往展轉
書寫今也非但烏焉
可痛焉故附于此而
令便于考讎者也
侍者慧中謹識
年譜偈尾

刊記

延享元子歳三月發行
二條街
風月勝左衞門
京師書林
六角街
小川多左衞門
製本發行

于旹
享保十七壬子八月二十八日
北海若雲濱城空印禪寺
老梅室謹撰

金頭陀　正法眼蔵親付屬
跋提河邊入涅槃　紫磨金色
示群生　利益人天佛舎利
常在靈山不滅度　五百
大願皆圓滿　南無本師釋
迦尊

弘化四年丁未仲秋
江戸谷中玉林禪寺
現住蘭關秀叟印施

永平祖師年譜偈	永平祖師贊	高祖禅師和讃	永平高祖行実紀年略	永平和讃
六角通御幸町西入町 印　柳枝軒 小川多左衞門				

前回（十一上）の訂正

通算頁	段	行	（誤）	↓	（正）
11	上	14	帰朝後		その後
14	上	10	寛永六年		寛永十六年
24	下	14	河合功一		川合功一
51	上（見出し語）		「希玄と号す」を「大蔵経周覧二遍」の前の項目の中程へ移す。		

法持寺歴住法系譜と戦前の伽藍配置図

川口高風

一、有栖川宮祈願所になった年次について

法持寺の寺紋の由来について、第三十二世慧等兼修は

抑々当山の寺紋は古来五三の桐でありましたが、明治維新にあたり神仏分離となり焼打の法難に遇ひました。幸にも有栖川宮家の御祈願所でありましたから、宮家の御紋章付の高張燈を掲げて、その災害を免れました。爾来此の因縁で寺紋を改め今日に至つて居ります。

三十二世　白鳥山　法持寺住職識[1]

と述べている。これによれば、本来の寺紋は五三の桐であった。しかし、明治元年の神仏分離令によって法難にあった時、有栖川宮家の祈願所であったところから、宮家の御紋章付の高張燈を掲げて法難を免れたという。それ以来、寺紋を「丸に結びこぶ[2]」と改めたのである。

では、法持寺が祈願所になったのはいつ頃であろうか。慧等兼修の「白鳥山紋章の由来」によれば、明治元年以前に祈願所となっていたように思われる。しかし、二十八世鼎三即一が記録した『本堂並諸堂瓦葺替記録』（法持寺蔵）に所収する明治十年十月二十八日に記した記録によれば、

一金百三拾円也　熱田諸寺院取払之儀に付有栖川御祈願所に相成右に付諸入費

とあり、熱田の諸寺院が取払（廃寺）になる時、法持寺は有栖川宮家へ百三拾円を納めて祈願所となっていることがわかる。

熱田の諸寺院が廃寺、あるいは境内易地がなされようとしたのは明治元年十二月頃のようで、それは長寿寺（名古屋市緑区大高町）八世や東福寺（京都市本町）二八八世住職を務めた林海州（一八〇八―七八）の伝記[3]によって明らかになる。

法持寺の「回向草紙」（明治四十五年六月新調　三十二世慧等代）にある祠堂諷経の回向文には、最初に

大功徳院宮一品親王中務郷尊霊

とあり、続いて廃寺した塔頭の無翁院、東陽軒、耕雲院、一雲院、三笑軒、高岩院、太虚院の七ヵ寺の歴住精霊が記されている。

大功徳院宮とは弘化二年（一八四五）二月二十八日に六十二歳で薨去された韶仁（ツナヒト）親王（一七八四―一八四五）のことである。そのため明治元年前後に祈願所となったならば、勧請ということになる。その他の諸寺院も明治元年頃に祈願所となっている。韶仁

親王の位牌を祀り祈願所となったのは神峰山寺（高槻市大字原）や修禅寺（伊豆市修善寺）など[4]があり、福昌寺（現在、八王寺神戸市兵庫区羽坂通）は内願によって寺格を常恒会地に昇格している[5]。また、可睡斎（袋井市久能）は幟仁親王より護国殿の扁額を賜わっている[6]。

さて、有栖川宮家は天皇家とどのような関係であったであろうか。四親王家の一つで、寛永二年（一六二五）に後陽成天皇の第七皇子好仁親王が高松宮を創設したことに始まる。寛文七年（一六六七）に三代幸仁親王が有栖川宮となり、その後十代威仁（タケヒト）親王（一八六二―一九一三）まで三百余年続いている[7]。四代将軍徳川家綱は子供がなく、後継者問題が起きた時、大老の酒井忠清は北条氏の例になぞられて公家の有栖川宮幸仁親王を将軍に推挙した。しかし、それに反対した老中堀田正俊は、徳川家の血脈を引く館林藩主徳川綱吉を推挙したため、幕府内で覇権争いが起きた。結果は堀田側に水戸徳川家の光圀がついたところから、徳川綱吉が将軍となり後継者争いに敗れた酒井忠清は直ちに隠居したのである。

その酒井忠清が祀られている香華院の龍海院（前橋市紅雲町）は、嘉永三年（一八五〇）十一月に熾仁（タルヒト）親王（一八三五―一八九五）よりの「令旨」によって祈願所となっている。また、明治元年十一月には同じく熾仁親王より「御寄附書」（灰筋築地、下馬札）が下され、それには祖父の韶仁親王の尊牌を安置することが記されており、厨子に入った位牌が祀られている[8]。

このように龍海院を始め、その他の諸寺院でも韶仁親王が勧請され祀られているが、どのような理由からであったかは不詳である。現在の法持寺では、韶仁親王の位牌を祀っていないが、韶仁親王の祈願所であったことは鼎三の記録や慧等代の「回向草紙」などによって明らかになる。

注

（1）これは慧等兼修が法持寺住持中（明治四十一年～昭和十四年）に陶芸家亀井清市（瀬戸市東町三八）の洞山窯で寺紋の入った抹茶茶碗を作った時に記した「白鳥山紋章の由来」による。

（2）「丸に結びこぶ」の名称は、筆者が師僧らより聞いたことで紋帖や家紋事典にはみえない。そのため正式の名称は不詳である。手紙を折りたたんで結んだものとか御神籤などを結んだ形である文（ふみ）の「二つ文」が同じ形である。ただし、左へ垂れるラインが二つあるため異なったものである。「結び文」の折り方とは反対になる。

（3）明治元年十二月に熱田寺院が廃寺されることになり、それを免れたのは林海州によることを森慶造『近世禅林言行録』（明治三十五年二月　金港堂書籍株式会社）四一二頁や『名古屋市史』人物編第二（昭和九年五月　名古屋市役所）六〇二頁にいう。

（4）『幟仁親王行実』（昭和八年六月　高松宮蔵版）一九五、一九六頁の「祈願所竝に寄進」による。

（5）福昌寺のことは『幟仁親王行実』一九六頁及び能仁柏巌『曹洞宗問題十説』の秦慧昭の「再刊ノ序」に指摘している。

（6）田中霊鑑『秋葉総本殿可睡斎縁記』（明治四十二年七月刊）三頁にいう。

（7）『有栖川宮総記』（昭和十五年十二月　高松宮蔵版）五、六頁による。

（8）『是字寺龍海院誌』（平成十九年六月改訂　龍海院）十二～十五頁。

二、法持寺歴住法系譜

㈠　本法系譜は『曹洞宗全書』大系譜一、二、『西来法系譜』（昭和七年八月　鷲山覚成）、『白鳥法系略譜』（昭和二十八年十月　孔版　伊藤崇隆）、「黄龍室中系譜」（黄龍寺蔵）などを参照して編集した。

㈡　本法系譜には人法相承と伽藍法相承との錯乱があり、嗣承間に異同のある場合もある。異なった嗣承系統がある場合は左側上部に※を付しておいた。

㈢　各師の右は住職県（県を省略）、寺院名、世代の順で記入してあり、実際は住職したが、現在の歴住帳世代に入っていない場合は、□によって示した。

㈣　各師の号諱が別の字である場合には、その右横に（　）で記入した。

㈤　住職寺院の寺号改称は、住職当時の寺号を入れ、改称寺号は（　）で示した。

㈥　俗姓が判明する場合には、左下の［　］に記入した。

㈦　……は不明確な嗣承法系である。

㈧　同一室中の兄弟順位を明確にしようと努めたが、図版の関係上異なったものもある。

愛知学院大学　教養部紀要　第58巻第2号

開山―十五世（寒巌派）

- 永平道元
  - 孤雲懐奘
    - 寒巌義尹
      - 鐵山士安
- 東洲至遼
  - 梅巌義東
    - 華蔵義曇
- 誓海義本（静岡普済寺6・愛知円通寺開山）
  - 悟峰宗得（義）（同常安寺2）
    - 才叔恵林（同常安寺3）
      - 陽年玄甫（同常安寺4）
        - 大先智安（同常安寺5）
          - 如庵痴哲（同常安寺6）
            - 恩海祥君（同常安寺7）
              - 五澗宗穀（同常安寺8）
      - 綱外全提（同常安寺9）
        - 浅国不叟（同常安寺10）
  - 徳中義雲（同福重寺2）
    - 柔室義順（同福重寺3）
      - 天魯道璵（同福重寺4）
        - 玄白要三（同福重寺5）
          - 傘松本祝（同福重寺6）
            - 太翁義周（同福重寺7）
              - 天英智禅（同福重寺8）
      - 滅禅恩鎖（同福重寺9）
        - 密伝正啓（同福重寺10）
          - 州峯果益（同福重寺11）
            - 玉葉耕雲（同円通寺6）
              - 栄室存盛（同円通寺7）
- 明谷義光（克×本（元））（同圓通寺2・愛知法持寺・愛知楽寺・愛知重福寺・愛知常安寺・愛知宗福寺・愛知松屋院・愛知秀寺・長泉寺・愛知黄龍寺・各開山・愛知龍泉寺・愛知開山・愛知勧請寺開闢）
  - 維玄義中（同法持寺2）
    - 月洲瑞香（同法持寺3）
      - 仙英良菊（舜）（同法持寺4）
        - 春沢祖豊（同法持寺5）
          - 大洋宗呑（同法持寺6・静岡普済寺輪住）
            - 嫩桂祖林（嫩（祖））（同法持寺7・静岡普済寺輪住）
              - 月峰慶呑（桂）（同法持寺8・静岡普済寺輪住）
      - 春巌百甫（愛知正法寺2）
        - 鉄華独舟（同正法寺3）
          - 徳重禅天（同正法寺4）
            - 逸宗祖雄（同正法寺5）
              - 圓山慈智（同正法寺6）
                - 萬瑞永善（同正法寺7）
  - 大通快道（同法持寺9）
    - 海岸義雲（同法持寺10）
      - 悦堂愚禅（同法持寺11）
        - 弘海義全（禅）（同法持寺12）
          - 輪山東轂（同法持寺13・愛知春養寺□）

- 同宗福寺2 独運聞瑞
- 同長楽寺2 義山華厳
  - 同長楽寺3 義伝月洲
    - 同長楽寺4 書獄宗佐
      - 同長楽寺5 孝菴恵順
        - 同長楽寺6 梅雪義薫
          - 同長楽寺7 松沢曇林
            - 同長楽寺8 月峰桂呑
              - 同長楽寺9 茂林永繁
                - 同長楽寺10 全応永久
- 同円通寺4 南齢牛誉
  - 同円通寺5 天海孤舟
- 同円通寺3 無能秀榎
  - 愛知白毫寺□ □□禅海
  - 愛知常安寺□ □□全提
  - 愛知円通寺□ □□玄超
- 岐阜満願寺6 大空日崇
  - 同法持寺14・愛知大運寺法地開山・愛知正法寺8 義山淳孝（イ）
    - 同法持寺15・岐阜満願寺7・愛知妙覚寺開山 督宗淳董（ロ）
- 愛知延命寺□ □□嫩誉
  - 愛知龍源寺3 良阜文英
    - 愛知万松寺17 百津吾拙
    - 愛知善長寺□ □□賞柳
  - 愛知長禅寺□ □□本橘

（イ）（「永平寺前住牒」による）

- 月峰慶吞（桂）（愛知法持寺8）
  - 春巌百甫
    - 鉄華独舟
      - 徳重禅天
        - 逸宗祖雄
          - 圓山慈智
            - 萬瑞永善
              - 義山淳孝（同法持寺14・愛知正寺寺8・愛知運寺法地開山大）
                - 督宗淳董（同法持寺15・岐阜満願寺7・愛知覚寺法地開山妙）
                - 周室淳鼎（愛知妙覚寺2）
                - 活宗淳快（同妙覚寺3・愛知龍潭寺12）
                - 南嶺扶宗
                - 貫道督之
                - 雄州亮契（同大運寺2）
                - 智翁淳哲（同大運寺3）

（ロ）

- 永平道元
  - 孤雲懐奘
    - 徹通義介
      - 瑩山紹瑾
        - 峨山韶碩
          - 通幻寂霊
            - 了菴慧明
              - 無極慧徹
- 月江正文
  - 華叟正萼
    - 絶峰祖脩
      - 乾叟禅亨
        - 大室祖圭
          - 蘭如従賀
            - 林叟正芳
              - 枝深正孫
- 大圓正密
  - 光山正玄
    - 梅翁正嶺
      - 大洞正桃
        - 大建正巨
          - 彭山正仙
            - 蘭室正芳
              - 中巌正的
- 朝国正補
  - 天菴正堯
    - 潭州雲龍
      - 月岑自圓
        - 幸巌俊栄
          - 逸巌英俊
            - 大空日崇
              - 督宗淳董（愛知法持寺15）
                - 周室淳鼎

7

法持寺歴住法系譜と戦前の伽藍配置図

活宗淳快

南嶺扶宗

貫道督之

十六世―三十五世（明峰派）

- 永平道元
  - 孤雲懐奘
    - 徹通義介
      - 瑩山紹瑾
        - 明峰素哲
          - 珠巌道珍
            - 徹山旨廓
              - 桂巌英昌
                - 籌山了運
- 義山等仁
  - 紹嶽堅隆
    - 幾年豊隆
      - 提室智闡
        - 虎溪正淳
          - 雪窓祐補
            - 海天玄聚
              - 洲山春昌
                - 超山闇越
- 福州光智
  - 明堂雄暾
    - 白峯玄滴
      - 月舟宗胡
- 徳翁良高
  - 大光寂照
    - 雷州惟黙
      - 俯貫雄道（愛知（府）法持寺16）
        - 大謙説道（八）
        - 大疑覚道（同法持寺20）
          - 石雲禅虎（同法持寺22）
            - 大達玄中（同法持寺27）（ヘ）
          - 黄泉無著
            - 大潜退承（同法持寺24）
              - 鼎三即一（同法持寺28）
                - 韜光衣玲（ト）
                - 西核道果（ト）
                - 吹毛冷生（同法持寺29）（ト）
                - 節道晩香（ト）
                - 童拳天珠（同法持寺30）（チ）
                - 碓伝衣燈（リ）
                - 接航等一（ヌ）
                - 亨元貞道（同法持寺31）（ヌ）
                - 蓬仙萊洲（ヌ）
                - 哲掃惟一（ヌ）
          - 大中玉英
        - 俯璨洞外（同法持寺21）（府不）（ホ）
      - 孤峰松林
      - 鉄馬天倫
      - 金嶺慧剛
      - 瑞巌唯芝（惟）（之）
      - 梅谷浪華
- 黙子素淵
  - 鉄文道樹
    - 退歩玄妙（同法持寺17）
      - 提禅悦成（同法持寺18）（修）（二）

（八）

- 大謙説道（細）　長崎天祐寺28・愛知黄龍寺6
  - 大道貫宗　愛知法持寺19
    - 盧舟胡童
      - 證応道契　新潟本興寺18・同法雲寺開山・愛知黄龍寺10・同法持寺23
        - 大如干雄　同本興寺19・神奈川福伝寺24
    - 種田珪深　新潟本興寺20　［太田］
      - 仏海珪種　同本興寺21　［山田］
        - 大圓玉道　同本興寺22　［木村］
          - 活水大珠　同本興寺23　［武藤］
            - 大琛悟山　※福島吉祥院27　［高橋］
              - 大行幸山　千葉東福寺3　［石井］
            - 龍水玄珠　同本興寺24　［高原］
              - 宗道良山　新潟智堂寺10　［佐藤］
              - 得水真龍　新潟林葉寺26　［武藤］
                - 大眼昭孝　新潟本興寺25　［高原］
                - 大徹良弘　［武藤］
              - 大覚法珠　福島龍蔵寺22　［田澤］
              - 大法玄正　新潟福昌寺25　［桑野］
                - 玄応昌彦　［橋本］
              - □□興雲　新潟見国寺3　［小林］
              - 法眼全明　新潟法雲寺9　［橋本］
                - 槌晴法光　［橋本］
            - 至道孝元　山梨海島寺33　［平島］
            - □□清光　山梨妙善寺27　［鈴木］
      - 種覚心田
        - 瑞岳耕雲　山梨海島寺31・同光善寺20　［平野］
          - 真源孝順　同景徳院25・山梨光善寺21・同海島寺32・　［平野］
    - 日神全光　神奈川福伝寺25　［日下］
      - 祖室紀道　同福伝寺26　［日下］
        - 長道全宣　同福伝寺27　［日下］
          - 祖道健生　同天王院28・同福伝寺29　［豊島］
    - 一極励心　宮城金勝寺20　［北條］
      - 最念正覚　同金勝寺21・同法性寺8　［渋谷］
        - 不褪正宗　同金勝寺22・同法性寺7　［渋谷］
          - 何伝篤宗　［渋谷］
          - 碩田綻質　宮城法性寺9　［渋谷］

（三）

- 愛知法持寺18 提禅悦成
  - 提宗悦玄
    - 山口光雲寺16 宗機悦巌［善甫］
      - 同光雲寺17 道開鉄眼［山本］
        - 同光雲寺18 道学悦夫［山本］
        - 山口三汲寺16 恵海正之［林］

（亦）

- 愛知法持寺21・同黄龍寺8 俯璨洞外
  - 愛知法持寺25・同黄龍寺11・愛知昌久寺法地開山・長崎天祐寺31・同正応寺9（碩） 石雄慧玉
    - ※佐賀宝蔵寺・長崎補陀林寺各開山・長崎天祐寺38・同西仙寺4 恵珍大定［松山］
      - 長崎光雲寺30・同補陀林寺2 恵黙陳亮［伊東］
        - 長崎光雲寺31・同天祐寺41・長崎西仙寺7・山梨淨林寺28（寅） 大雄虎雄［福田］
          - 長崎天祐寺33・同西仙寺8・同光雲寺33 蟠龍光太［福田］
          - 佐賀円通寺16 行如誠転［桂樹］
        - 佐賀東善寺15・長崎補陀林寺5 智覚文亮［鷲峰］
          - 智童泰亮［岩野］
      - ※長崎正応寺15・愛知成福寺25 梵海珍龍［原田］
        - 長崎観音寺17・長崎正覚寺20 祖芳梅嶺［木塚］
          - 長崎正覚寺21・佐賀東善寺14 枯吟法龍［小場石］
            - 北海道大法寺5 □□哲巌［大串］
            - 長崎広福寺21 無外秀典［富永］
      - 佐賀宝蔵寺3 得参道契［小柳］
    - 愛知成福寺18・同昌久寺2 本隆悦源
      - 同成福寺20・同昌久寺3 見龍文海
        - 同成福寺21・同昌久寺4・長崎天祐寺39・同西仙寺5 巨山漸海［高島］
          - 同成福寺22・同西仙寺6・長崎正応寺16・同天祐寺40 天外暁山［水野］
            - 長崎光雲寺32・同西仙寺10・同天祐寺42 大外弘元［水野］
              - 同西仙寺11 雲外道輝［須田］
              - 大阪龍光寺30・同龍光庵開山 琢磨圓之［本田］
              - 神奈川豊川寺□ 機雲担山［前田］
              - 群馬東光寺27 物外晩稔［山影］

法持寺歴住法系譜と戦前の伽藍配置図

- 一道全恵（愛知成願寺開山）
  - 一応喝三（同成願寺2・同黄龍寺15・愛知法持寺26）
    - 大隆賢道（同成願寺3）
    - 洞然百明（静岡西光寺□）
- 隆山智応
  - 大光道光
- 大喝俊応（愛知成願寺4）
  - 大圓智賢（同成願寺5）［林］
    - 大心道光（同成願寺6）［西村］
      - 天山健童（同成願寺7）［西村］
        - 大光浄信（同成願寺8）［西村］
- 無外洞禅（愛知法正寺6）
  - 慈外鉄門（同法正寺7）［大喜］
    - 大安義道（同法正寺8）［吉田］
      - 大磯道隆（同法正寺9）［吉田］
        - 大雲孝道（同法正寺10）［吉田］
          - 隆山照道（同法正寺11）［吉田］
- 仏海禹門（長崎天祐寺35・長崎和銅寺9・長崎正応寺10）
  - 台立宜保（長崎和銅寺11・同正覚寺17）
    - 默道宜禅（同和銅寺14・同正覚寺18）［藤原］
      - 一道貫禅（佐賀宝蔵寺4）［橋本］
  - 巨海穿底（長崎正応寺13）
    - 恵珍大定（※同天祐寺38・同西仙寺4・佐賀宝蔵寺・長崎補陀林寺各開山）［松山］
      - 梵海珍龍（同正応寺15・愛知成福寺23）［原田］
        - 大安担道（同成福寺24）［中野］
          - 貫之道一（同成福寺25）［原田］
            - 貫山道雄（同成福寺26）［原田］
  - 盤山辨玉（同正応寺12・同和銅寺13）
    - 雪心智門（同和銅寺15）［石島］
      - 一道貫之（長崎通福寺28・同清浄寺6）［中尾］
        - 慈心克己（同通福寺29）［安永］
      - 雪山昱道（同正応寺17・同和銅寺16）［志岐］
        - 筑童東一（同正応寺18・同清浄寺6）［大木］
        - 雪岳良孝（同和銅寺17）［谷川］

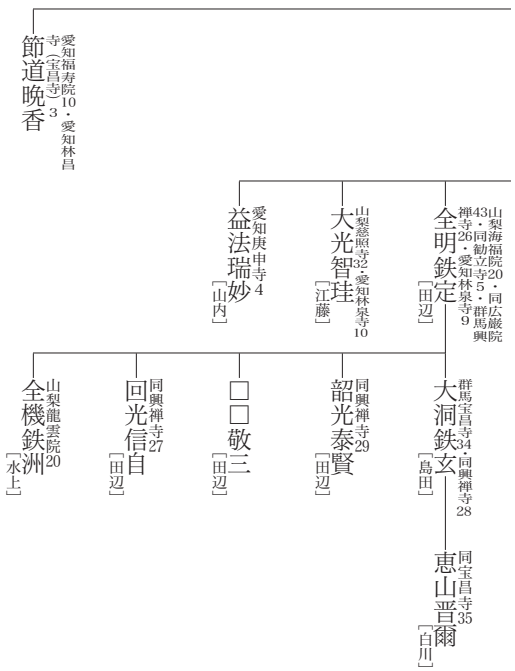
（へ）

- 大達玄中（愛知法持寺27・愛知黄龍寺13・愛知正法寺35・愛知天年寺9・愛知東昌寺・愛知梅尊院各開山）
  - 法従慧音（同正法寺23・同東昌寺2）［久田］
    - 投杖葛龍（同正法寺26・同東昌寺4）
      - 祥巌石雲（同正法寺32・同東昌寺6）［勝川］
        - 大成良寛（同正法寺33・同東昌寺8）［勝川］
        - 徳応一義（同正法寺34）［勝川］
        - □□順心（愛知薬師寺4）［土尾］
    - 徳有東隣（同正法寺25・同東昌寺3）［雉本］
      - 越巌顕朗（岐阜即現寺16）［垣沼］
      - 即応大道（通）（同正法寺27・同東昌寺5）［武田］
        - 天生秀道（岐阜大龍寺□）
        - 護国興禅
      - 無文良章［内藤］
  - 拙堂魯中（同正法寺28・同黄龍寺16・同空雲寺8・同梅尊院2・愛知栖光院・同善光寺各開山）［水野］
    - 少林得髄（同黄龍寺17・同空雲寺9）
      - 梅林賢孝（同黄龍寺19・同栖光院5）［安井］
        - 竹鳳仙瑞（同栖光院6）［浅井］
          - 舜豊昭彦（同栖光院7）［浅井］
      - 蘭溪瑞芝（同空雲寺12・同梅尊院6）［水野］
        - 霊峰松巌（同空雲寺13）［長谷川］
          - 栽松徳元（同空雲寺14）［長谷川］
        - 大安貞道（愛知地蔵寺7）［渡辺］
        - 大圓機道（愛知円覚寺7）［山田］
          - 良光圓成（同円覚寺8）［山田］
    - 鶴道仙翁（同正法寺29・同空雲寺21・同栖光院21・同黄龍寺18・同梅尊院5・岩手龍徳寺22）［青山］
      - 大至徹禅（岩手盛興院16）［原田］
        - 徹能正龍（同盛興院17）［原田］
      - 不斬貫中（同黄龍寺21・同栖光院4）［高田］
        - 不昧祖道（同黄龍寺22・静岡陽向院17）［高田］
      - 大安探道（愛知地蔵寺4・静岡陽向院16）［武藤］
        - 大雄勝道（同陽向院18）［武藤］
  - 鷲直原道（※三重東漸寺21）［大崎］

- 同正法寺24 柏禅尊生
  - 同梅尊院3 玄同圭宗［内匠］
    - 同梅尊院4・同正法寺30 禅機悦堂［村上］
      - 同梅尊院7・岐阜天長寺7 翔南瑞鳳［米本］
        - 愛知教務院開基 実翁心静［佐竹］
        - 同梅尊院9・同天長寺9 霊鳳徳愷［米本］
          - 同梅尊院10 説三禅鳳［米本］
          - 大阪天長寺3 鳳翔敏明［加藤］
        - 同天長寺8 祥鳳碩天［森］
          - 同天長寺12 誓準良弘［森］
      - 京都蟠根寺16 嘯雲虎道［内匠］
  - 岩手龍徳寺23 曹山洞音［青山］
    - 宮城昌学寺16 大山静夫［南浦］
      - 宮城延命寺21 大峯曹敬［青山］
        - 同延命寺23 □□敬悟［青山］
      - 大嶺厚道［青山］
        - 宮城昌学寺18 大洋浩哉［南浦］
  - 岩手龍徳寺24 曹流道派［宇津野］
    - 同龍徳寺25 □□龍豊［宇津野］
- 同黄龍寺20・同秀泉寺3 治天等澍［森］
  - 同秀泉寺5 訥外拙宗［鬼頭］
    - 同秀泉寺6・同宗福寺9 鈴久瑞音［山田］
      - 同秀泉寺7・同宗福寺10 無外碩道［山田］

（ト）

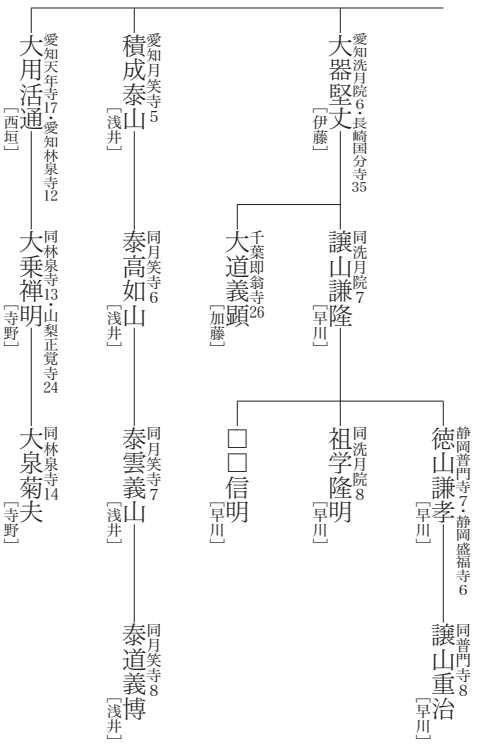
- 韜光衣玲（愛知福寿院7・同観音寺10）
- 西核道果（愛知一心寺13・同福寿院8）
- 吹毛冷生［天橋・鷹林］（愛知福寿院9・山梨長生寺37・同広厳院・愛知法持寺29・山梨慈照寺・山梨海福院30・愛知林泉寺8・同深寿院19・同楽寺・勧立寺・正伝院・各法地開祖東光寺）
  - 慧南嶺道［河内］（新潟光明寺24・山梨勧立寺4）
    - 物外良禅［渡辺］（同光明寺25・同龍源寺22）
      - 雲嶽悦山［久保田］（同龍源寺23）
        - 天海悦恵［久保田］（同龍源寺24）
          - 凌雲悦明［久保田］（同龍源寺25・同東光寺27）
    - 泰道富山［井上］（同光明寺26）
      - 徳隣道潤［佐藤］（同光明寺27）
  - 掬聞香流［鷹林］（山梨広厳院41・同勧立寺2・山梨興因寺39・同正伝院3）
    - 聞溪曹流［水野］（同勧立寺7）
      - 禅嶽俊道［水野］（同勧立寺8・同清泉寺20）
    - 法泉得流［武井］（山梨海福院21・同勧立寺6・同宝福寺24）
      - 徳陽正憲［武井］（同海福院24・同宝福寺25）
        - 憲誠正導［武井］（同海福院25・同宝福寺26）
      - 洞泉聞流［小野］（同海福院23）
    - 仰山霊獅［板倉］（山梨宝福寺23）
    - 脱五貫道［中村］（山梨法星院19）
      - 寿脱登贍［中村］（同法泉院20）
    - 大圓不證［渡辺］（山梨清泉寺18）


全明鉄定［田辺］
山梨海福院20・同広厳院43・同勧立寺5・群馬興禅寺26・愛知林泉寺9
大洞鉄玄［島田］
群馬宝昌寺34・同興禅寺28
恵山晋爾［白川］
同宝昌寺35
韶光泰賢［田辺］
同興禅寺29
□□敬三［田辺］
回光信自［田辺］
同興禅寺27
全機鉄洲［水上］
山梨龍雲院20
大光智珪［江藤］
山梨慈照寺32・愛知林泉寺10
益法瑞妙［山内］
愛知庚申寺4
節道晩香
愛知福寿院10・愛知林昌寺・宝昌寺3

（チ）

- 童拳天珠［大島］（愛知天年寺13・同月笑寺2・同洗月院3・同法持寺30・同延命寺26・愛知林泉寺11・山梨徳岩院23）
  - 禅巌徹宗［三橋］（静岡大泉寺□）
  - 慧等兼修［明達、山田］（同延命寺27・同月笑寺4・同洗月院5・同法持寺32・愛知慧光院・草創開山・愛知常盤寺法地開山）
    - 光山義明［川口］（同延命寺42・静岡慶寿院29・静岡真珠院持寺33・同法持12）
      - 諦観高明［川口］（愛知成福寺8・同慧光院4・同延命寺31・同法持寺34）
        - 大徹高風［川口］（同慧光院33・同常盤寺5・同延命寺持寺35・同法6）
        - 大光義照［川口］（同延命寺32・同常盤寺5）
      - □□昌山［水野］
      - 祥山豊瑞［酒井］（愛知庚申寺5）
      - 能圓本良［山内］（愛知薬王寺5）
    - □□俊法［水野］
    - 慧岳石禅［水野］（同延命寺30・同常盤寺2）
    - 逢山孝仙［熊沢］（同常盤寺3）
      - 大順孝学［熊沢］（同常盤寺4）
    - 喜翁大心［三浦］（静岡真珠院43・同慧光院2）
      - 南華大乗［花岡］（同慧光院3）
    - 金鳳指禅［江口］（静岡慶寿院13）
    - 秋月文雄［竹市］（静岡清印寺14）
  - 提鉗斧山［浅野］（同天年寺31・茨城16・茨城管天寺最勝院43・祇園寺22・静岡）
    - 帛堂禮云［佐藤］（同祇園寺23）
  - 紹三崇隆［伊藤］（山梨徳岩院28・静岡最勝院24・同延命寺館山寺4・長崎国分寺・静岡36・同西光寺開山）
    - 豊山隆道［加藤］（静岡普門寺6）

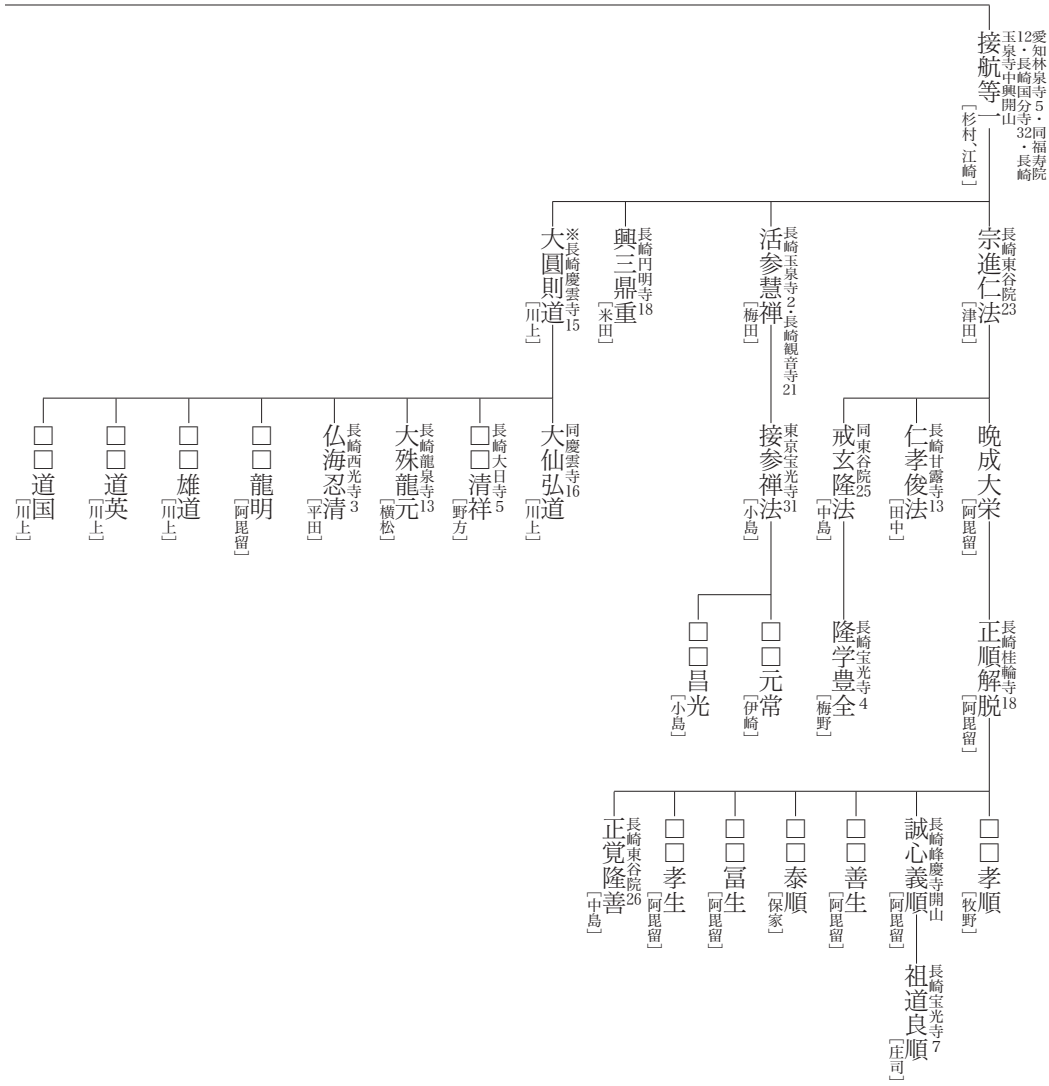
- □□萬隆［鈴木］
- 静岡舘山寺5 玄外金隆［舘］
  - 同舘山寺6 舘山孝道［舘］
    - 同舘山寺7 嶺山賢聖［舘］
- 長崎延命寺3 大心賢光［田中］
  - 長崎西光寺2 賢道光雄［小川］
- 長崎西光寺4・同大蔵寺3・同国分寺37 雄機道俊［加瀬］
  - □□平基［西山］
  - 長崎福泉寺14・同国分寺38・同西光寺5 祖堂道輝［加瀬］
- 長崎福泉寺13 悟山堅明［黒岩］
  - □□哲明［黒岩］
- 東京心月院28・長崎延命寺4 堅珠光隆［荒木］
- □□信隆［春田］
- 長崎成相寺34 大隆徳勇［阿毘留］
- 長崎甘露寺14 大圓勝俊［扇］
- □□天隆［滝川］
- 長崎延命寺5 徳山泰隆［縫田］
- □□孝良［春田］


大器堅丈 愛知洗月院6・長崎国分寺35 [伊藤]
積成泰山 愛知月笑寺5 [浅井]
大用活通 愛知天年寺17・愛知林泉寺12 [西垣]
大道義顕 千葉即翁寺26 [加藤]
泰高如山 同月笑寺6 [浅井]
大乗禅明 同林泉寺13・山梨正覚寺24 [寺野]
□□信明 [早川]
泰雲義山 同月笑寺7 [浅井]
大泉菊夫 同林泉寺14 [寺野]
譲山謙隆 同洗月院7 [早川]
祖学隆明 同洗月院8 [早川]
泰道義博 同月笑寺8 [浅井]
徳山謙孝 静岡普門寺7・静岡盛福寺6 [早川]
譲山重治 同普門寺8 [早川]

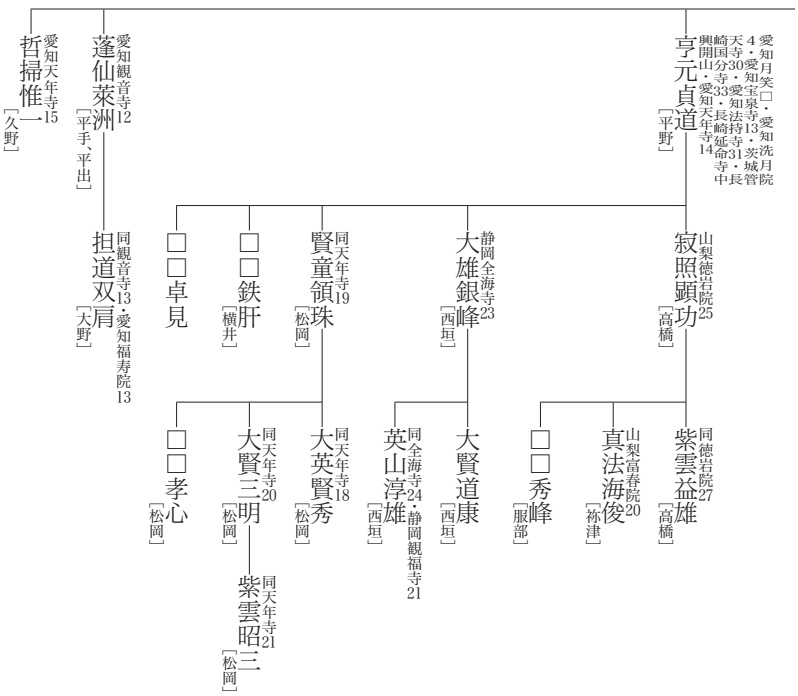
（リ）

- 雄傳衣燈［栗木］（愛知林昌寺（宝昌寺）2・愛知福寿院11・愛知大日堂開基）
  - 仏心智堂［栗木］（同福寿院14・山梨広厳院42）
    - 至道宗順［栗木］（山梨普門院25）
      - 順孝虔堂［栗木］（山梨龍沢院23・群馬長昌寺35）
        - 順堂信昌［栗木］（同長昌寺36）
    - 法雲啓允［鈴木］（山梨海潮院16）
      - 承雲啓介［鈴木］
    - 天瑞応龍［藤田］（山梨龍華院33）
      - □□英文［上田］（山梨大殊寺18）
    - 鉄心大淳［景中］（山梨保雲寺32）
      - 淳心暁道［景中］（同保雲寺33）
  - 関山晁堂［加藤］（同福寿院15・兵庫福昌寺（八王寺）6）
    - 正印道綬［佐藤］（同福寿院16）
    - 鉄肝黙堂［加藤］（愛知宝蔵寺4・愛知長福寺10・同福寿院17）
      - 三養昭純［加藤］（同宝蔵寺5）
        - 終南道輪［高井］（愛知観音寺14）
        - 南山泰純［加藤］（同宝蔵寺6）
      - 大忍謙堂［加藤］（同長福寺11）
    - 純一覚禅［後藤］（愛知釈迦寺10・同福寿院18）
  - 伏龍清源［鬼頭］（三重光明寺22）
    - 大圓弘堂［鬼頭］（三重永命寺5・同光明寺23）

（又）


接航等一［杉村、江崎］
愛知林泉寺5・同福寿院12・長崎国分寺32・長崎玉泉寺中興開山
宗進仁法［津田］
長崎東谷院23
晩成大栄［阿毘留］
仁孝俊法［田中］
長崎甘露寺13
戒玄隆法［中島］
同東谷院25
正順解脱［阿毘留］
長崎桂輪寺18
□□孝順［牧野］
誠心義順［阿毘留］
長崎峰慶寺開山
祖道良順［庄司］
長崎玉光寺7
□□善生［阿毘留］
□□泰順［保家］
□□冨生［阿毘留］
□□孝生［阿毘留］
正覚隆善［中島］
長崎東谷院26
隆学豊全［梅野］
長崎宝光寺4
接参禅法［小島］
東京宝光寺31
□□元常［伊崎］
□□昌光［小島］
活参慧禅［梅田］
長崎玉泉寺2・長崎観音寺21
興三鼎重［米田］
長崎円明寺18
大圓則道［川上］
※長崎慶雲寺15
大仙弘道［川上］
同慶雲寺16
□□清祥［野方］
長崎大日寺5
大殊龍元［横松］
長崎龍泉寺13
仏海忍清［平田］
長崎西光寺3
□□龍明［阿毘留］
□□雄道［川上］
□□道英［川上］
□□道国［川上］

法持寺歴住法系譜と戦前の伽藍配置図



三、歴住世代とその開山・歴住地

㈠ 開山・歴住地は住職県（愛知県は省略）、寺院名、世代の順で記入した。資料により住職とあるが、世代の不詳の場合は□で示した。

㈡ 開山・歴住地の寺号は改称された寺号もあるが、現在の寺号で示した。

㈢ 世代に異字がある場合は右横の（　）に、俗姓が明らかな場合は左下の［　］に記入した。

開　山　明谷義光（克）（本）（元）大和尚　文明十四年（一四八二）十月十二日寂（一説・十二月十四日寂）七十五歳　静岡・普済寺輪住（文明十三年（一四八一））、常安寺・福重寺・長楽寺開山、松屋院・秀泉寺・宗福寺草創開山、黄龍寺勧請開山、龍泉寺開闢開山

二　世　維玄義中大和尚　明応六年（一四九七）九月十八日寂　円通寺輪住

三　世　勅特賜義伝禅師　月洲瑞香大和尚　天文十三年（一五四四）四月二十三日寂　光明院・大運寺・洞仙寺草創開山、円通寺輪住（義伝月洲と同一人物ならば）

四　世　仙英良（舜）菊大和尚　弘治三年（一五五七）八月十日寂　延命寺・東光寺草創開山

五　世　勅特賜慈雲禅師　春澤祖豊大和尚　天正十八年（一五九〇）三月二十八日寂　宝昌寺草創開山、三笑軒開山

六　世　大洋宗呑大和尚　寛永九年（一六三二）正月五日寂　九十六歳　宝昌寺二世、長禅寺開山、禅養寺伝法開山、静岡・普済寺輪住（慶長十二年（一六〇七））

七　世　嫩（嫩）桂祖（祖）林大和尚　寛永九年（一六三二）八月七日寂　龍源寺法地開山、春養寺草創開山、静岡・普済寺輪住（元和七年（一六二一））

八　世　月峰慶（桂）呑大和尚　承応四年（一六五五）二月三日寂（一説・二月二日寂）　成福寺開山、正法寺法地開山、円通寺輪住、静岡・普済寺輪住（寛永七年（一六三〇））、春養寺二世、長楽寺八世、妙覚寺中興

九　世　大通快道大和尚　延宝五年（一六七七）正月十六日寂（一説・九月十六日寂）　空雲寺草創開山

十　世　海岸義雲大和尚　元禄五年（一六九二）九月十五日寂（一説・元禄三年九月十五日寂）　京都・林泉寺開山、空雲寺二世

十一世　悦堂愚禅大和尚　不詳

十二世　弘海義全大和尚（禅）
享保十二年（一七二七）十一月四日寂
京都・林泉寺二世、成福寺六世、東昌寺開山

十三世　輪山東轂大和尚
元文三年（一七三八）五月十三日寂（一説・五月十五日寂）
春養寺□世、禅林寺五世

十四世　義山淳孝大和尚
宝暦七年（一七五七）三月六日寂
大運寺法地開山、洞仙寺□世、正法寺八世

十五世中興　督宗淳董大和尚
寛政二年（一七九〇）三月十一日寂（一説・三月十三日寂、八月十一日寂、天明二年（一七八二）十二月十一日寂）七十九歳
妙覚寺・空雲寺法地開山、光明院伝法初祖、岐阜・満願寺七世

十六世（叢林開闢）　俯貫雄道大和尚（府）
天明七年（一七八七）四月九日寂　六十四歳
陽泉寺法地開山、黄龍寺四世、埼玉・長善寺十一世、石川・天徳院十四世

十七世　退歩玄妙大和尚
寛政七年（一七九五）八月二十七日寂
龍潭寺十九世、長野・栖林寺九世

十八世　提禅悦成大和尚（修）
天保六年（一八三五）八月十七日寂
新潟・長興寺十五世、大本山総持寺如意庵輪住、東京・豪徳寺二十一世、神奈川・徳寿院（廃寺）□世

十九世　大道貫宗大和尚
享和三年（一八〇三）六月九日寂
文化十一年（一八一四）四月二十五日寂　六十三歳
春養寺伝法一世、黄龍寺七世、陽泉寺二世

二十世　大疑覚道大和尚
文政十年（一八二七）十一月十四日寂（一説・五月十七日寂）
新潟・東禅寺十世、黄龍寺八世、新潟・長興寺十六世

二十一世　俯璨洞外大和尚（不）（府）
文政十一年（一八二八）七月五日寂
観音寺三世

二十二世　石雲禅虎大和尚
弘化三年（一八四六）三月二十九日寂
五十八歳
黄龍寺十世、新潟・本興寺十八世、新潟・法雲寺・日照寺開山

二十三世　證応道契大和尚
天保五年（一八三四）正月七日寂
観音寺四世、陽泉寺四世、林泉寺法地開山

二十四世　大潜退承大和尚［堀田］
安政六年（一八五九）六月二十三日寂
七十三歳
成福寺十七世、黄龍寺十一世、昌久寺法地開山、長崎・天祐寺三十一世、同再住、長崎・正応寺九世

二十五世　石雄恵玉大和尚（頑）

明治十年（一八七七）八月五日寂（一説・旧六月二十六日寂）八十四歳
成願寺二世、黄龍寺十五世、龍泉寺八世、瑞延寺伝法開山、静岡・西光寺法地開山

二十六世　一応喝三大和尚［浮屠］

明治六年（一八七三）九月九日寂（一説・七月十八日寂）七十二歳
梅萼院・東昌寺法地開山、鉄地蔵堂（青大悲寺）開山、観音寺五世、黄龍寺十三世、正法寺二十二世、天年寺九世、秀泉寺伝法第一祖

二十七世　大達玄中大和尚［森］

明治二十五年（一八九二）十一月二十八日寂　八十六歳
寿昌院□世、観音寺八世、福寿院六世、黄龍寺十四世、林泉寺二世、宝昌寺・宝泉院法地開山、洗月院・月笑寺法地開祖、地蔵寺中興開山、庚申寺再興開山、静岡・秋葉寺十七世、長崎・円福寺法地開山

二十八世（法嗣開闢）　鼎三即一大和尚［水野、白鳥］

明治三十一年（一八九八）一月二十八日寂　六十七歳
福寿院九世、林泉寺八世、山梨・長生寺三十七世、山梨・広厳院三十九世、山梨・慈照寺三十世、山梨・海福院十九世、山梨・深泉院・勧立寺・正伝院・寿楽寺・東光寺法地開祖

二十九世　吹毛冷生大和尚［大橋、鷹林］

明治三十七年（一九〇四）四月二十一日寂　六十七歳
天年寺十三世、月笑寺二世、洗月院三世、延命寺二十六世、林泉寺十一世、山梨・徳岩院二十三世

三十世（再中興）　童拳天珠大和尚［大島］

大正二年（一九一三）七月十日寂　五十九歳
月笑寺前住、洗月院四世、宝泉寺十三世、天年寺十四世、茨城・管天寺三十世、長崎・国分寺三十三世、長崎・延命寺中興開山

三十一世　亨元貞道大和尚［平野］

昭和十四年（一九三九）八月十五日寂
七十三歳
延命寺二十七世、月笑寺四世、洗月院五世、慧光院草創開山、常盤寺法地開山

三十二世　慧等兼修大和尚［明達、山田］

昭和四十一年（一九六六）十一月二日寂
七十七歳
延命寺二十九世、静岡・真珠院四十二世、静岡・慶寿院十二世

三十三世　光山義明大和尚［川口］

平成二十一年（二〇〇九）三月二日寂
九十三歳
成福寺九世、延命寺三十一世、慧光院四世

三十四世（重興）　諦観高明大和尚［川口］

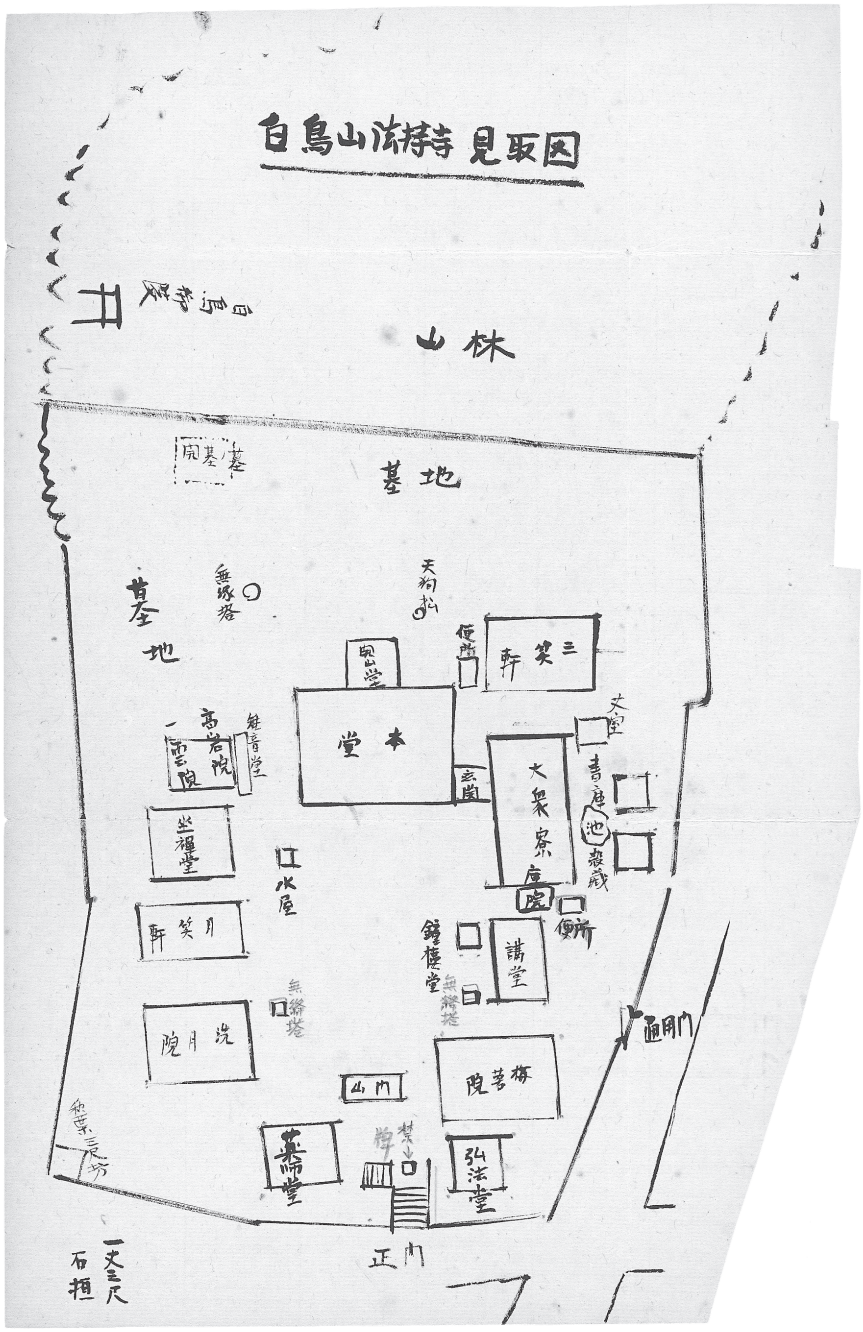
現　住

三十五世　大徹高風大和尚［川口］

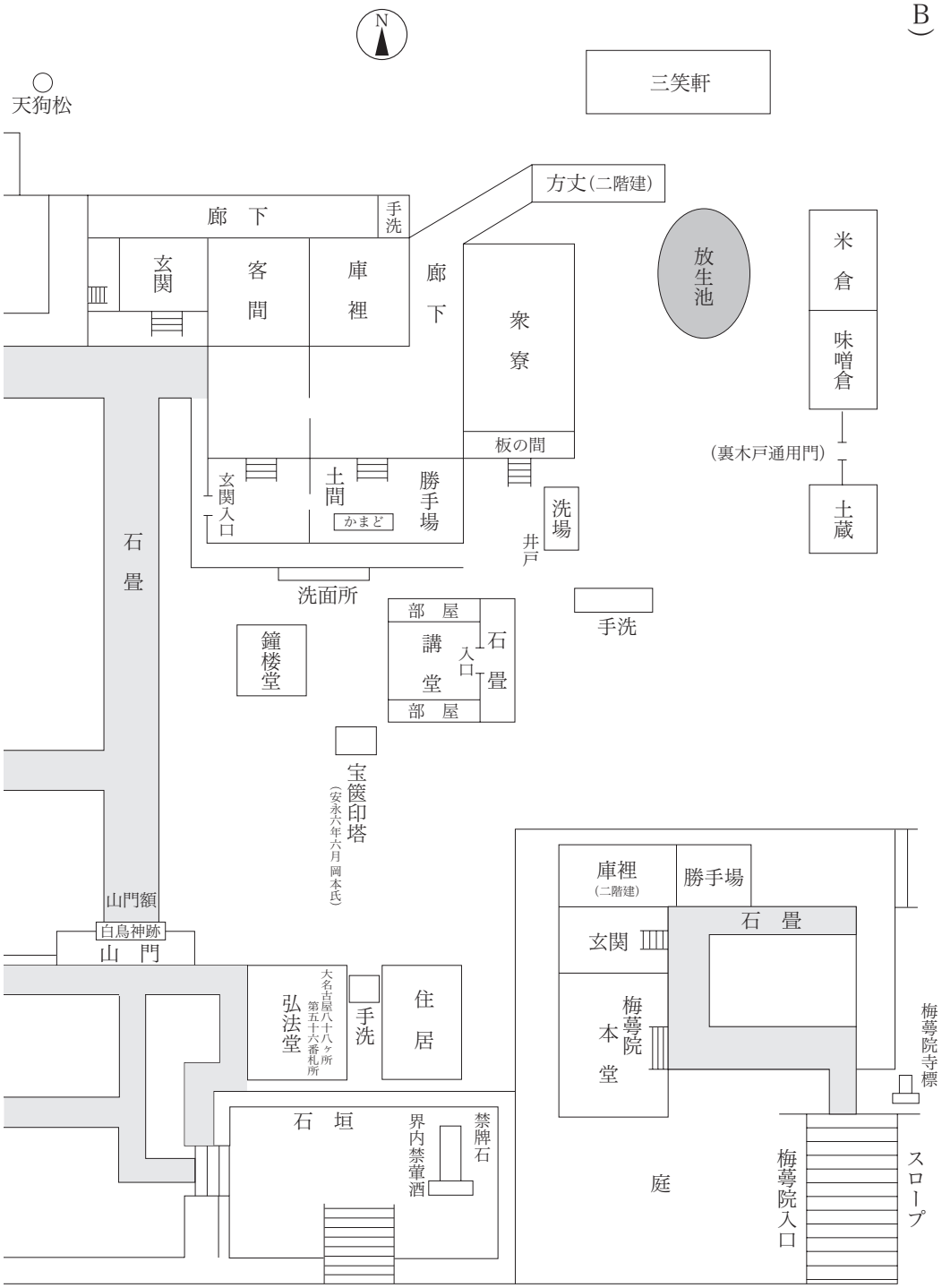
四、戦前の伽藍配置図

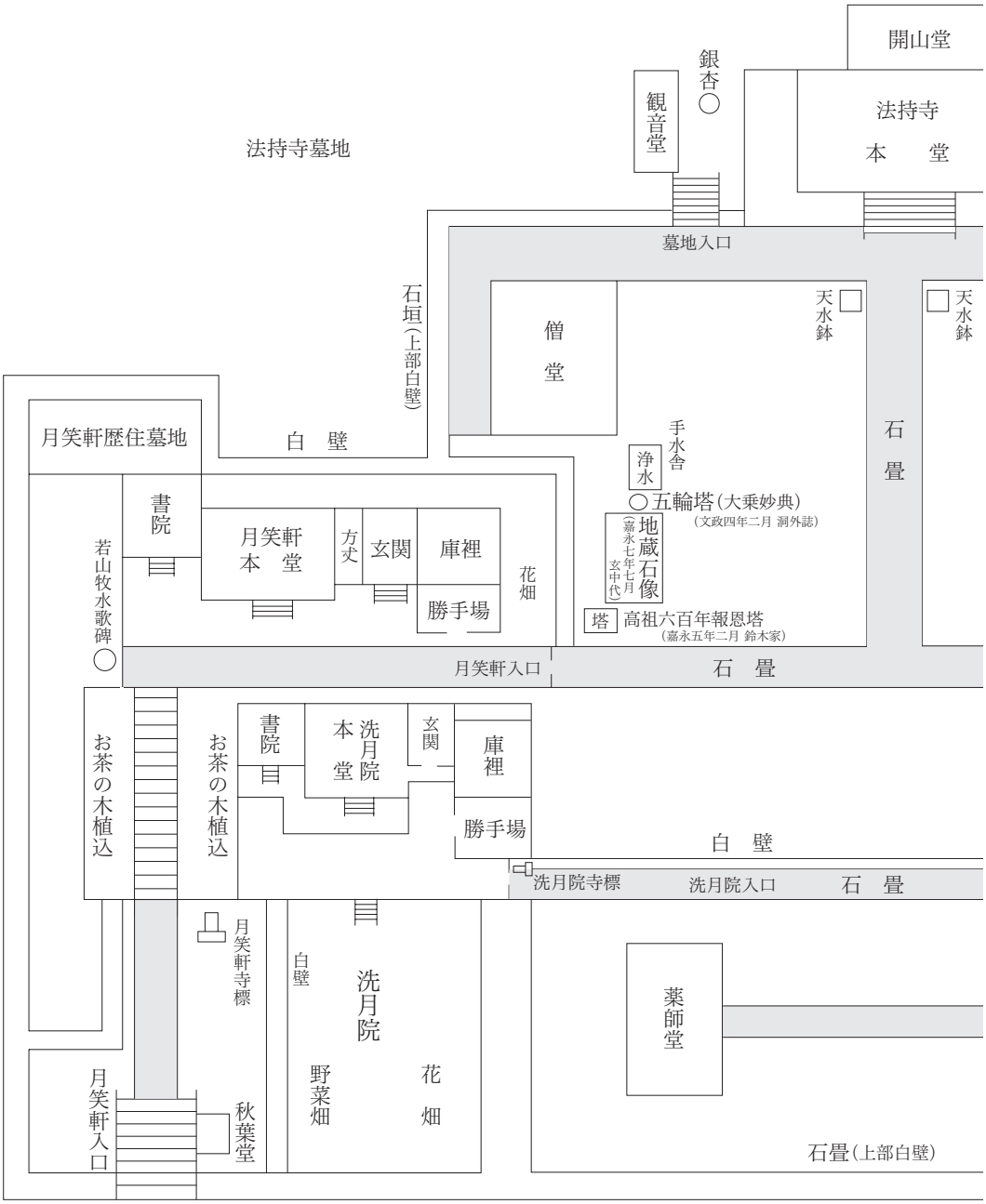
ここにあげた二つの図は、昭和十五年〜二十年頃の法持寺伽藍配置図である。（A）は三十四世諦観高明が墨で画いた「白鳥山法持寺見取図」である。（B）は大野純美子、榊原充子の両氏よりの御教示と旧境内、伽藍の写真などから作成した境内図である。

（A）



(B)


N
天狗松
三笑軒
方丈(二階建)
廊下
手洗
玄関
客間
庫裡
廊下
衆寮
放生池
米倉
味噌倉
(裏木戸通用門)
土蔵
板の間
玄関入口
土間
かまど
勝手場
洗場
井戸
石畳
洗面所
手洗
部屋
講堂
入口
石畳
部屋
鐘楼堂
宝篋印塔
(安永六年六月 岡本氏)
庫裡
(二階建)
勝手場
石畳
玄関
梅蕚院本堂
梅蕚院寺標
山門額
白鳥神跡
山門
大名古屋八十八ヶ所第五十六番札所
弘法堂
手洗
住居
石垣
禁牌石
界内禁葷酒
庭
梅蕚院入口
スロープ


開山堂
銀杏
観音堂
法持寺
本　堂
法持寺墓地
墓地入口
石垣（上部白壁）
僧堂
天水鉢
天水鉢
石畳
月笑軒歴住墓地
白　壁
手水舎
浄水
五輪塔（大乗妙典）
（文政四年二月 洞外誌）
地蔵石像
（嘉永七年七月 玄中代）
書院
月笑軒本堂
方丈
玄関
庫裡
花畑
勝手場
塔
高祖六百年報恩塔
（嘉永五年二月 鈴木家）
若山牧水歌碑
月笑軒入口
石　畳
お茶の木植込
お茶の木植込
書院
洗月院本堂
玄関
庫裡
勝手場
白　壁
洗月院寺標
洗月院入口
石　畳
月笑軒寺標
白壁
洗月院
薬師堂
月笑軒入口
秋葉堂
野菜畑
花畑
石畳（上部白壁）

執　筆　者　紹　介

清　水　義　和（本学教授……英　　語）
SHIMIZU　Yoshikazu

吉　井　浩　司　郎（本学教授……英　　語）
YOSHII　Koshiro

Gert M. BURESCH（本学外国人教師……英　　語）

川　口　高　風（本学教授……宗　教　学）
KAWAGUCHI　Kōhū

木　村　文　輝（本学准教授……宗　教　学）
KIMURA　Bunki

吉　田　道　興（本学教授……宗　教　学）
YOSHIDA　Dōkō (Michioki)

岡　田　朋　子（本学非常勤講師……数　　学）
OKADA　Tomoko

教養教育研究会委員

（会長）稲垣正巳　（副会長）佐々木　真

（会計）※北村伊都子

岡島秀隆　尾崎孝之　河合泰弘

小林秀一　城　貞晴　※高木靖文

前山慎太郎　松浦國弘　安富眞澄

※鷲嶽正道

※本号編集委員

編集後記

『教養部紀要』第58巻第2号の編集作業が大詰めを迎えた10月26日、高木靖文先生がご逝去されました。有為無常が世の習いとはいえ、あまりにも突然の訃報に戸惑いと深い悲しみを隠せずにおります。

本号にはご多忙の中、先生方から論文4本、資料2本、授業報告1本のご投稿を賜りました。編集者一同、衷心より御礼申し上げます。本号はご闘病中の高木先生にかわり、若輩の二人が編集の任を承りました。無我夢中で務めを果たしたつもりですが、実践躬行の碩学であった高木先生の背中に少しは近づけたかと、自問するばかりです。

高木先生のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。（鷲嶽記）

平成22年10月25日　印 刷
平成22年10月31日　発 行

（非売品）

愛知学院大学論叢
教養部紀要第58巻
第２号（通巻第168号）

編集責任者
稲　垣　正　巳

発行者　愛　知　学　院　大　学
教　養　教　育　研　究　会
〒470–0195
愛知県日進市岩崎町阿良池12
電　話　〈0561〉(73) 1111（代表）

印刷所　株式会社　あ　る　む
電　話　〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol. 58 No. 2
(Whole Number 168)

CONTENTS

Articles

Yoshikazu SHIMIZU : Avant-garde Art Creation in the Sou-Getsu Art Center
—Shuji Terayama & Ono Yoko— (1)

Koshiro YOSHII : Of the Time Scheme of *The Woodlanders* (25)

Gert Michael BURESCH : A Masterful Plot:
An analysis of Barbara Vine's novel "The Brimstone Wedding" (37)

Kōhū KAWAGUCHI : On Chronological Lists of Superiors and Disciples of the Hojiji Temple
and Allocations of Edifices in the pre-World War II Period (152)

Materials

Bunki KIMURA : Annals of the Chief Priests at the Buddhist Temples belonging to the Sōtō Sect
in the Middle and Eastern Parts of Shizuoka Prefecture (6) (53)

Dōkō (Michioki) YOSHIDA : A Zen Master Dōgen's Biographical Compilation (10-2) (124)

Teaching Report

Tomoko OKADA : An Empirical Study of Methodologies on Lecturing Mathematics (89)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2010